

奏でることを忘れた少年

TAKACHANKUN

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星川優はギターを愛してやまない少年だった。

しかし、ある日を境に奏でることをやめてしまった。

そんな彼は一人のギタリストと出会い、情熱を取り戻していく…

目次

星川優は平和に過ごしたい	1
憂鬱の優	4
生徒会長襲来	8
おたんちんつてよくよく考えたら危ない響き	13
女子もバンドをやる時代	17
その熱は	20
忘れてしまった感情	24
出会い、始まり	30
大魔姫の姉	33
超カッコいい追求大作戦	38
お前の言うカッコいいってやつを	42
大饗宴という名の公開処刑	47
生徒会長がアイドルだった件	52
バンドがやりたくて	58
欠けているもの	66
文化祭が何故か他校と合同になりました	68
思わぬ再会	73
5人の夢	78
幼馴染	84
文化祭開幕	91
アイドル×女優×おねーちゃん	94
あつたはずの青春	98
心を震わせる音	102

もうお前とは	110
黄昏ブラックコーヒー	114
幼馴染の不安	120
過去と向き合う時	127
ギタリストとして	131
Reminiscence	136
逢沢優歌	141
大切なこの時間	145
涙の理由は	150
もういいよ	155
もう二度と	162
もうやめだ	168
ライブハウスデビュー	175
怒涛のゲストバンド達	180
次もその次も何度だって	183
小さな変革者	191
俺の奏でる音を	196
表舞台へ	200
ラーメン銀河にて	204
幼馴染のこれまで	208
あとは頼んだ	214
御簾を上げようぜ	218
ライブ前夜	222
初舞台は大舞台	225
You are unstoppable!	228

頂点獲れよ

232

学校の放送で自分の名前を呼ばれると一瞬ドキッとするよね

238

不合格の理由

243

闇の中から

247

LAST PIECE

252

Turns into a Lock

256

交わる二つのR

261

頂上バトル開戦

267

勝者は

270

かけがえのない人達と

274

何も知らない

279

不穏な予感

285

パレオは何処へ

289

ちゅという少女

294

パレオと令王那

299

きっといつか

304

俺ができること

311

始まりは

315

誓いと出会い

320

番外編

一周年

327

星川優は平和に過ごしたい

「ふわあ…」

これで何回目だ？ 欠伸。

だって眠いんだもの…しようがないよね。

今は高校の入学式の真っ只中である。

校長が話しているのだが…

いや、まじで何分話すの？

かれこれ30分近くは経ってる。

簡潔にまとめろっての。

出会いを大切にーとか宣っているが

正直どうでもいい。

そんな運命的な出合いなんてあるわけないじゃん。

勉強に部活に恋愛？ 何それって感じだわ。

脚色されたドラマに毒された幻想だろ？

そんなもん…

俺の祈りが届いたのかくそ長かった話も

ようやく終わりを告げた。

「えっと、次は生徒会長の挨拶…です。」

ええ…まだあんの？ もういいって。

「みんなー！ 入学おめでとー！ 生徒会長の

氷川日菜です！」

へえ、あれが生徒会長ね。

中々かわいいじゃん。プラス1点。

「羽丘は勉強も大事だけどー生徒会長的にはー…」

もうわかったから、早く終わらせてくれよー。

「るん♪ってしよーっ!!」

…はあ？

なんだそりや…フリーダムすぎるだろ。

原稿みたいなのふっ飛ばしちゃったよ…

るん♪ってなんだよるん♪って…

それで、誰もツツコまないかい…
それどころかこいつらノリノリだったわ。
大丈夫か…この高校。
俺…来るとこ間違ったかな？
先行き不安しかない。

入学式も終わり、教室にきたわけだが…

「入りたくねー…」

気づいちちゃったんだけど、この高校

男子生徒が全然いない。

圧倒的に女子の比率が高い。

というか俺以外にいんのかってレベル。

家から近いってだけでテキストに受験しちまったからな…。

情報なんて全然知らん。

いうて、つい最近こっちに引っ越してきたわけだし…

絶対浮くじゃん俺。

目立たず平和にが星川優のモットーだっていうのに…

「はあ…」

ため息も何回目だろ。

とにかく、立ち止まってもしょうがないし教室入るか。

「超大魔姫あこなるぞ！」

「ええ…」

完全に出鼻くじかれた。

なにあれ。

るんるん生徒会長の次は厨二病娘かよ。

勘弁してよホントに。

「ああっ！あっ…ああーっ！」

今度は何だよ、次から次へと

イベントに事欠かねーなこは。
見るとプリントが散乱して大惨事となっていた。
いかにもどんくさそうな地味メガネっ娘が慌てている。
あーあ、やっちゃまったね。御愁傷様。

「もう…おたんちん…」

「ええ…」

おたんちんて…言うやつ初めて見たわ。

あいつ、どこの生まれよ。

「ごめんね！大丈夫？」

「え？」

「みんなに配るの？」

「はい…出席番号が1番だから先生に頼まれて…」

拾ってやらんこともないこともなかったが

どうやらその必要もなさそうだ。

というか目立つのもやだし。

ちようどいい、この隙に教室入らせてもらおうか。

こうして俺は不安ばかりの学園生活を

踏み出しましたとき。

憂鬱の優

「ちよつといいい?」

頭上から声が聞こえる。

その声で意識が覚醒する。

まったく誰だ?

俺の睡眠を妨害しやがって。

ん?待てよ?

俺の睡眠を妨げる存在っていったら

かーちゃんぐらいなもんなんだが:

明らかに他人の声だ:ホントに誰だ?

この感触:机かこれ。

「あれ:ここの、どこ?」

「学校の教室だよ。」

:そうだった。入学式だったつけ今日。

ていうかこの子、さっきおたんちん娘(仮)

のプリント拾ってあげてた優しい

女子生徒じゃん。

俺に何か用かね?

「これ、プリント。渡したいんだけど。」

「あー:悪い悪い。おもいつきり爆睡してたわ。」

「登校初日だよ?」

そう言われましても:この状況でどう

モチベをあげろというんだ。

:そうだ。

ちよつどいい機会だし、この子に聞いてみつか。

「ちよいと聞いてもいい?」

「何?」

「見た感じ女子生徒ばかりなんだけど:男子生徒っていないのかな

」?

いるよな?」

いるに決まってるよな？。(迫真)

「んー…羽丘は去年まで女子高だったみたいだし…いない…かも？」

「まじすか…」

聞きたくなかった衝撃の事実。

「はあー…女子高だったんかよ、ここ。」

今日一のため息出たわ。

それにしたって男子生徒のもう一人や二人くらいはいてもいいだろうに…どんな奇跡よこれ。

「知らなかったの？」

この女子生徒も半ば呆れ顔である。

「だってさー俺こっちに越してきたばかりだし…家から近いってだけでテキトーに受験したのよ。」

「適当に受験して受かるところでもないんだけどね…」

「え、そうなん？」

「うん。羽丘は進学校だから。」

「ええ…」

聞きたくなかった衝撃の事実その2

「知らなかったんだ…」

うん、知らなかったんだ…。

無知は罪つてのは本当だな。

「今みたいに寝てたら授業についていけなくなっちゃうよ？」

え、この子俺の心配してくれてんの？

さつきはプリント拾ってあげてたし…

ひよつとしていい子？

「だいじょーぶ。俺やればできる子。」

「…自分で言っちゃおう？」

「言っちゃおう。」

だって俺だもん(謎の自信)

「…ふふっ。名前、聞いてもいい？」

「ああ…えつと、田中 一郎です。」

「…絶対嘘でしょ？」

うっそ、何でバレたん？
仕方ない、真面目に自己紹介すつか。

「星川 優ってんだ。よろー。」

「私、戸山 明日香。よろしくね。」

誰とも関わる気はなかったんだけどなあ…

なんかいい感じに談笑みたいなのしちゃったよ。

それを悪くないとも感じてしまった。

いかんいかん。

人間関係なんて煩わしいだけなんだ。

これからは会話も最低限にしよう。

…それでいいんだよ。学園生活なんて。

程なくして先生がやってきた。

自己紹介という名のくそイベを消化した後

HRをやって家路についた。

「っだいまー。」

「おかえり。」

「疲れたわー。」

「疲れたって…今日は授業もなかったんでしょ？」

「まーそうなんだけどさ…」

色々…ね。

「そうそう、優の写真たくさん撮っておいたから！」

「別に撮らんくてもいいって言うたやん…」

「で、学校は楽しめそう？」

「それがさ、男子生徒が俺だけっぽいんだよね…」

「良かったじゃない。」

かーちゃんよ…何故そうなる。

「しかも進学校なんだってさ。勉強もきついんだろうなあ…憂鬱だよ

もう。」

さつきは強がったがやっぱりきちーわ。

「頑張りなよー！」

「へーへー……」

さてと、こういう時はひと昼寝でもしますかね。

「そういえば優、話は変わるんだけど」

「何？」

「あーちゃん……元気にしてるかねえ」

「あー……」

……懐かしいな。

引っ越してきたとはいったが

俺はもともとはこっちに住んでいたのだ。

あーちゃんとはその時に遊んでいた子である。

唯一俺が気を許していた仲でもあった。

「今何してんだろ……元気にしてっかなー」

「会いにいつてみれば？」

「いや……いーよ。」

何話していいかもわからんし、直前まで引っ越すの言わなかったこと怒ってるだろうし。

わんわん泣いてたなー。あの時は。

まあ、今はまだいいか。

落ち着いたら会いにいつてみよう。

いつになるかはわからんが……いずれな。

生徒会長襲来

入学式も終わり、今日から本格的な授業が始まる。いざ始まってみると予想通りというべきか。進学校というだけあって授業中に居眠りや私語をしている生徒はいなかった。

真面目ちゃんかお前ら…って俺が異質なだけか。

俺はというと、さすがにそんな中で眠りにつくわけにもいかず、とりあえずノートだけはとっているという次第である。

「はあーっ…」

疲れたわー。

1時間近く授業受けて休憩時間が10分とかおふぎけにもほどがあるやろ。

等価交換とやらの法則に則ってその分休ませろ。

「どうしたの？ため息ついて」

「ああ…えっと…」

なんだっけ、名前忘れちった。

「もう忘れたの？自己紹介したじゃん…」

戸山 明日香。」

「ああ、そうそう！戸山な。」

唯一俺に話しかけてくれる良くできたしっかりしてそうな子。

「戸山はさー…やっぱ進学校だから…」

受けたわけ？」

「うん。良い大学行つときたくて…」

ちゃんと考えてんだな。偉いわこの子。

「しっかりしてんなー…」

「そうかな？」

「だって俺らまだ入学したての高校一年よ？卒業後の進路考えてるやつなんてそうそういねーって…」

「そうやって過こしてたらあつという間に3年過ぎちやうよ？」

うん、ごもつともですな。

つていつても将来のこととか言われてもピンとこないしな！。

何してんだろ…未来の俺って。

「やっと終わったー」

帰り支度を済ませ、教室を出る。

なんだかザワついているが俺には関係ないことだろう。

「あつー」

…あの人、確か生徒会長の…氷川日菜だっけ？

…一瞬目があつたんだが。

…ていうか、俺のほう見て

あつ！って言わなかったか？

…そんなわけないか。ないよな？

「ねえ！君！」

話しかけられてる気がするけど気のせいだろう。

そうだ、きっとそうだ。

「ねえってば！」

よく考えたら生徒会長が俺なんか話しかけるわけないしな…

「うえっ!?!」

変な声出た。だって急に腕掴むんだもんこの人。

「ちよつといいかな？」

「え、えと…用事があるのでええええっ!?!」

返事をする間もなく腕を引つ張られ生徒会長は走り出した。

「すぐ終わるよ！お話聞くだけだから！」

すぐ終わらんやつだろそれ絶対！

強制イベントかよ！

…それにしても人間って人一人引つ張ったままこんな速く走れるものなんだな！

…人間ってなんだっけ？

結局俺は生徒会長室に連行されてしまった。

「よかったらどうぞ。」

「あ、ども。」

副会長的な人がお茶を出してくれた。

あーうめえ。

直感でわかるわ。この人絶対いい人。

「あ、あのー…それでご用件は？」

「んー…男の子の生徒って珍しいから…つい♪」

つい♪じゃねえわ。

感覚派の究極形かよこの人。

参ったな。お茶出された手前、帰っていいですか？なんて言えないしな…

「えーと、氷川…先輩」

「日菜ちゃんでもいいよー！」

いや、ダメだろ。

「お名前聞いてもいいかな？」

「あ、鈴木です。」

「うっそだー！星川 優君でしょ？」

バレとんのかい…じゃあ何で聞いたし。

「優君、学校はどう？楽しい？」

「や、入学したばっかですし…まだなんとも…」

「そっかー、何かあったらこの日菜ちゃんに遠慮なく相談してね！」

絶対嫌やわ。

「つぐちゃんも！相談にのってあげてね！」

「は、はい！」

うん…やつぱはこの人はいいい人だわ（確信）

この人に相談しよう。絶対。

「そういえば…男子生徒って俺しかいないんですかね？」

「うん！優君一人だよ！」

すごい良い笑顔で言いきりよったよ。

俺の最後の希望を打ち砕きやがったよ。

良い笑顔で。

…黙っていれば間違いなくかわいいのにねえ。

そうか…仕方ない、腹括るか。

「氷川先輩…」

「なーに？」

「せいぜい頑張りますよ…先輩の言うような…るんってするような学園生活、送れるようにね」

「うん！頑張ってね！優君！」

って、んなわけあるかい。俺は平和に過ごしたいんだっつーの。

「なになに、呼び出し？」

「星川何やったの？」

「会長と話したんでしょ？いいなー」

こいつら、クラスの連中か。

馴れ馴れしい野次馬め。

「別に、男子の生徒は珍しいからって色々話聞かただけだよ。」

「そうなんだー」

「でも実際、男子いるなんて思わなかったしねー」

そうなのか。

「やっぱ、その…浮いてるよな…俺。」

「え、気にしてんの？」

「かわいいー！」

「星川って面白いんだねー！」

かわいい言うなおもろい言うな。

「別に気にしてねーし！ほら、散った散った！」

「えー！」

冗談じゃない。

何勝手に人を面白いやつ認定してるんだ。

俺は一人で生きていくんだ。

腹を括ったってのはそういうことだ。

おたんちんってよくよく考えたら危ない響き

「やっぱ…ギリ間に合うか…?」

只今俺は何年か振りの全力疾走の真っ最中である。

無遅刻無欠席記録が途絶えちまう!

皆勤賞つてのが俺の唯一のステータスなのに…!

原因?優雅にホットミルク飲んでたら時間過ぎてただけです。す

んません。

しかし、努力の甲斐もありなんとか間に合いそう。

やりやあできんだちくしようめ!

「ふっ…間に合ったあー!ギリギリセーフ…」

なんとか教室の前までたどり着く。

どうなることかと…

「ふっ…」

安堵したのもつかの間背中に衝撃が走る。

…いつてーな、誰だよ。

少しはギリギリセーフの喜びに浸らせろっつーの。

…最初から余裕持って来いつて?

やかましい…正論だ。

「またやってもうた…おたんちん…」

なんだお前か。おたんちん娘(仮)

ちゃんと前見ろよな。ったく。

…そうだ、ちよつとからかったるか。

「いや、すまん…おっしやる通り…」

おたんちんだったわ…」

「あつー違うんです!違うんです!おたんちんっていうのは自分に向けて言ったのであって…決してバカにしたわけではなくて…」

あはは、面白いなこやつ。

「いーよいーよ、気にしてへんから…それよりプリント…大惨事になつてっけど…」

「あぁっ！」

「また先生に頼まれたのか？」

「は、はい…」

どうでもいいけど、何で敬語なん？

この子。

「断りやええやんそんなん」

「え、でも…」

いるよなー。頼まれたら断れないやつ。

「まあいいや…ほれ。」

「あ、ありがとうございます！」

「そんなかしこまんよ…同い年だし同じクラスだろ？えっと…阿佐ヶ谷さん。」

「あ、朝日です…」

「あ、そうだっけ？わりーわりー…つとこんなことしとる場合じやねーな。先生が来ちまう。」

「あ、あの…」

「ん？」

「先生…遅れるみたいです。なので私が代わりにプリントを頼まれて…」

「ファッ!？」

ちよ待てや…。

「ええー…まじでえ？」

「ま、まじです。」

言わんでええねん。

俺の過去一の全力疾走と達成感とその他諸々返せや。

「星川、遅刻ー！」

「残念だったな、先生来んの遅れるらしいで。つかワンチャンギリセーフやろ。」

「言いつけてやろうよ」

「ねー!」

「メロンパンか? バンオーテンのココアか? 何が欲しい? 言ってみなさい。購買何でも揃ってっから」

このように いじられるのが ふえてきた

一句詠んじまったわばかたれ。

そうなんすよ。

最近ね、女性陣に弄られつつあるの。

打ち解けてきたってプラスに考えるべきなんでしょうけどね…何度も言ってるが俺はさらっさらそんな気はないわけで…ホントに困りますよ。

「「やっと終わったー!」」

「「えっ?」」

誰だ俺とシンクロしたのは…

「えと、宇田川…だっけ?」

「いかにも! 我は…えつと…漆黒の深淵より舞い降りし…」

「言わせねーよ?」

「ええーつ!」

「そういうのが好きなんか? 漆黒とか…闇とか…」

「うん! 何だかカツコよくない? あこ、カツコイイのが大好きなんだ!」

へえ、フツー女子だったらかわいいものが好きってのがセオリーなはずだが…

「しかし、見事にシンクロしちまったな」

「そーだね!」

「授業大変じゃね? ついていけてる?」

「大丈夫! あこにはロゼリアで鍛えた…なんかこう…すごいパワーが

あるもん！」

大丈夫じゃねーなこりや。

…人のこと言えないって？

…やかましーわその通りだわ。

てかロゼリアアってなんやねん。

「ところでさ、カツコイイのが好きならそういう感じの本をこの前見かけたから買ってみれば？」

「本当に!？」

「ああ、クトウルフ神話ーだかなんだかよくわからなかったけど…たぶんそういう闇系のが載ってると思うぞ？」

「今度みてみるねーありがとー！ゆーくん！」

「お、おお…」

なんだ…いい子じゃねーの。

ちよつと変わってるだけで。

「星川くん。」

「あ、先生。」

「後で職員室に来るように。お話があります。」

「どーしたの？ゆーくん。」

「ちよつと先生とお話してくるわ☆」

君はそのまま純粹なままでないさい。

女子もバンドをやる時代

月日は過ぎ、早いものでもう4月も終わりである。待ちに待ったゴールデンウィークというやつ…なのだが…

「はぁーっ…」

素直に喜ばれへんわ。

確実に襲いかかってくるであろう五月病。

中間テスト。極めつけは文化祭。

連休明けはすなわち地獄の幕開けなのである。

夏休みまでがくそ遠い。

クラスの連中は呑気なものでゴールデン

ウィークの予定を言いあたりしている。

いいね、キミたちは予定があって…

俺は予定もないしお金もないよ。

バイトはする気になれないし、接客とか

イヤだし。

「星川は何か予定あるの?」

そらきた。

「俺…?ないよ。」

「だよね、家でずつと寝てそう。」

失礼だなキミは…凶星だわ。

「お前らは…?」

「私達はRoseliaの主催ライブに行くんだ!」

「ライブ?Roseliaってなんだ?」

どっかで聞いたことある気がするが…

「えっ、知らないの!?!」

「知らん。」

「宇田川さんが所属してるバンドだよ!すごい人気があって今度ラ

ライブを主催するの。」

えっ、あいつバンド組んでるの？

ってかバンド？

「あいつすげーな…女子でバンドってなかなかハードル高くね？」

「知らないの？今は女子もバンドをやる

時代なんだよ？」

「ほーん、そうなんか。」

楽器やらバンドってのは男っていう

イメージが先行してたから…ちよつと意外だな。

「大ガールズバンド時代って言われてるよね？」

なんじゃそら…大航海時代みたいになつとるやんけ。

「お前らは？楽器やったりしてんの？」

「私達はやってないけど…このクラスにも結構いるよ。楽器やってる子。」

「へー。」

主催ライブねえ…わざわざゴールデンウィークにご苦労なことで。いずれにせよ俺には関係のない話だ。

勝手に盛り上がりについてくれよな。

「優、優！起きてってばー！」

微睡みの中誰かの声がある。

もうちよい寝かしてくれ。

「あれえ、戸山じゃん…どしたん？」

「もう…とつくに下校時刻だよ？」

「ああ、そうだった…帰ろうとしたら力尽きたんだった…」

「起こしたから、私達ももう帰るよ。」

「おお…」

ってよく見りや朝日もいるやんか。

結構一緒にいるの見るけど仲いいんだな。

「じゃー俺も帰るかね。」

「宿題、忘れないようにね。」

「わかってるって…誰に言ってるんだよ。」

「この前も怒られてたじゃん…」

「そうだったけどか、量エグくね？」

「無理なくやればできる量だと思うよ。」

まさか、宿題があるとはな…とんだ大誤算である。

クラスの連中、殆どが遊びに行く言うとったけど大丈夫なんか？

特に宇田川とか。そういうライブやるとか言ってたっけ。

「話変わるけどさ、宇田川のやつバンド組んでるらしいな。」

「うん。Roseliaってバンド。連休中にライブがあつて、私

と六花も行くんだ。」

「あ、そうなん？」

そりやまた意外だな。

「優は行かないの？」

「まさか、人の多いところは苦手なんぞな。」

それに、女性ばかりが来るに決まってるし。

「朝日、戸山とはぐれんなよ。」

「う、うん！」

「じゃあね、優。」

「ああ、楽しんでな。」

今回はじゃない。

これからもだ。

ライブには行くつもりはない。

俺はもう…ギターをやめたんだから。

思い出させないでくれ。

その熱は

本日は5月4日の土曜日。天気は快晴である。

「んーいい朝だ…」

時刻は12時35分。

うん。朝じゃないね。

母ちゃんさー何で起こしてくれへんの？

どっか行ってるのか？

星川家の飯担当は基本俺になっている。

なのでいつもは起こしにくるはずなのだが…

居間へ行くと案の定書き置きがあった。

『優へ お茶しに行つてきます。勝手にご飯作って食べててね☆』

☆はいらねーぞおばさん。

『出勤！パステル*レンジャー！』

「…レンジャーってピンクしかおらんやんけ…」

他のメンバーどこ行つたんだよ。

…って何テレビに一人でツツコミ入れてんだ俺は。

しょうもな。

くっそ…宿題さえなければな。

いや、やろうとはしたんすよ？一応。

その前にまずは部屋の片付けだと意気込んだのが運の尽きだったね。

小学生の頃にやったゲーム(RPG)を見つけてしまってもう大変。いやー久々にやると面白いんだこれが。

うーん…いうてあと3日も休みあるし

あとちよつとくらいはやってもいいんでないか？

話的にもいいところだったし…

モヤモヤしたままだと宿題も手につかんやろ。

「ん？」

携帯にメッセージが入っていた。

クラスの女子か…何だろ。

『今日はRoseliaの主催ライブだよー！

ホントに来ないの？』

Roseliaの主催ライブ？

誰が行くかっての。

ていうか今日だったんだ。

『あーちゃん出るよー！ドラム凄いだって！』

今度は別のやつからだ。

あいつドラムだったのかよ…てつきり

カスタネット担当かと思ってたわ。

『もしかして、宿題終わってないの？（笑）』

また別のやつから…お前ら絶対一緒にいるだろ。

しかも内容…腹立つわー。

宿題？そんなもん楽勝だってんだよ。

星川優を見くびるなよ。

こちらら羽丘受かつとんじゃい。

宿題なんぞちやつちやと終わらせたるわ。

「ただいまー優…ってあら？」

「ノックしいや。」

「ごめんごめん…珍しいねえ、アンタが勉強してるだなんて…」

「熱はねーぞ。」

「あら、そうかい？じゃあ今日の夕飯は母さんが作るから…頑張りな。」

「んー。」

…そうか、もうそんな時間か。

夕飯までにもうひと頑張りするか。

…の前に、あいつらにメッセージ返してなかったのを思い出した。

しかたないから返してやるか。

画面を開くとまた新たにメッセージが来ていた。

『Roselia 凄かったよー！来ればよかったのに』

ふーん、そんなに凄かったのか。

『人もたくさんいたよー！あこちゃんも』

凄かった！』

宇田川も…ちゃんとできたみたいだな。

『宿題ガンバー！また学校で！』

見とれよ…今日中に終わらせたるからな。

『おつーおやすみ』

よし、これでええやろ（適当）

「終わったあ…」

長かった。いや、マジで。

…もう深夜の3時やん。

シャワー浴びて寝よ。

…それにしても、あいつら楽しそうだったな。

文面からでもイヤというほど伝わってきた。

それだけ熱狂できるものがあるっていうのはいいことだと思う。

…俺にだって確かにあったんだ。

その熱が。

けれどそれは…その熱は…今はクローゼットの中に押し込められている。

忘れてしまった感情

連休明け。起きて学校まで普通に来た俺を褒めてほしい。
予想通りというべきか校内はRoseliaの主催ライブの話で
持ちきりであった。

皆が皆、目を輝かせてベースがキーボードがドラムがギターがボー
カルが凄かったなどと熱弁している。

この羽丘にはRoseliaのメンバーが宇田川の他にあと2人
もいるそうだ。

リサ先輩にユキナ先輩というらしい。

思いのほか身近にいたものだ。

まあ、バンド組むなら同じ学校の人と組むのは当然っちゃ当然か。

行きたくねーなー…クラス。

絶対あいつらうるさいもん。

「おはよう、優。」

「おーす、戸山に朝日。」

「おはよう。」

お前らは落ち着くわ。騒がしくなくて。

「朝っぱらからRoselia、Roseliaって騒がしいよなあ
まったく…」

「凄かったよね、六花。」

「うんー！」

っってお前らかい。そういやそんなこと言っとな。

「っーか宇田川がドラムって…ちよつと

びっくりだよな。」

「あこちゃん…凄く楽しそうにドラム叩いとったよ。」

「へえ…」

緊張つてものには縁がなさそうだからな…あいつは。

「朝日のような田舎っぺには良い刺激になつたんじゃねーの?」

「うん…私も頑張らんと…」

頑張るって?

っていうか今ちよつとバカにしたんだけど…

「優は何してたの?」

「俺?俺は…世界を救つてた。」

「ええっ!」

「六花…たぶんゲームの話だよ…」

「大変だつたんだぞ、マジで。」

「はいはい…宿題はちゃんとやったの?」

「もちろん。」

この子、最近俺の保護者になりつつある。

別にそんな心配せんでもいいのに。

「…其方らの召喚に応じてドーン!」

噂をすれば、時の人となつた大魔姫（自称）が現れた。

…お前、そのくだり前もやってなかつたか?

「あこ、おはよう。」

「おはよう、あこちゃん。」

「おつすー。」

「おはよー!」

朝から元気いっぱい全速前進全開だな

こやつは。

「ライブ、楽しかったか?」

「うん!あこもだけどね!リサ姉も

りんりんも紗夜さんも友希那さんもみーんなノリに乗っててやつ

ててすつごく楽しかったよ!」

「よかつたなあ。」

「優も今度ライブする時は見に来てよ！」

「ああ、行けたらな。」

行かんと思うけど。

「星川君、悪いけど帰りに職員室まで来てもらえる？」

だつる…。

どうせまた何か頼み事なんだろう。

あの先生、生徒パシリすぎ問題。

まあ、大体俺か朝日なんだけど…

俺はもっぱら力仕事担当である。

先生：俺は肉体派じゃあないんすけど…
体力ないし。

「ごめんなさい、ちよつといいかしら？」

「んあ？」

誰だよ…つて…すつげえ美人…！

声をかけてきたのは腰まで届くであろう

銀髪を垂らした凜とした顔つきの美人さんであった。

「な、なんででしょう？」

こんな人初めて見たけど…上級生…だよな？

何でこんな一年生の階にいるんだ？

「職員室の場所を聞きたいのだけけれど…」

「えっ」

職員室…つてうそやん。

この人転入生か何かか？羽丘に来て日が

浅いとか？それを言うなら俺もただけど…。

「あ、えつと、俺もちょうど職員室に用があつて…一緒に行きますっ。」

「ええ、そうさせてもらうわ。」

「……………」

やつべー…物凄く気まずいんですが…

さつきから全然表情変わらんし…

表情筋…鍛えたほうがよろしいのでは？

美人だが落ち着いた佇まいに無表情なのもあつてちよつと近寄り
難い雰囲気があつた。

「着きましたよ、ここです。」

「ありがとう、助かったわ。」

なんだかんだ美人さんにお礼を言われるのは悪い気はしない。案内した甲斐があるというものだ。

「お願いね、星川君。」

「はい。」

頼まれたのは案の定力仕事であつた。

速攻終わらして帰るか。

「湊さん、バンド活動をしているんですってね？」

「ええ。」

「やるのは構いませんが、こういった

課題もこれからはきちんとこなしてくださいね。」

「ええ、以後気をつけます。」

あの人…湊さんっていうのか。

どうやら忘れてしまった課題のプリントを出しに来たらしい。

…しかし、どいつもこいつもバンドバンドって…

一体何があるっていうんだよ？

バンド活動のその先に…。

そんなの、ただの自己満足だろ？

頼まれた用事を済ませ帰る頃にはもう

夕暮れ時であった。

「はあーっ…」

誰やねん…俺とため息シンクロしたやつ…

前もあつたなこんなこと。

「つて朝日かよ。」

「あつ、優君。」

「こいつ、こんな遅くまで何やってんだ？」

「今、帰り？」

「ああ、先生にまた頼まれ事してよ…生徒をパシリすぎだよなまつた
く…」

「大変やったね…」

「一緒に訴えようぜ？ブラック教師つて…そんなだから彼氏の一人
もできないんだつてな。」

「そ、そんな言ったらあかんよ…」

「で、朝日はこんな遅くまで何してたん？帰らんの？」

「私は…ちよつと…」

「ふーん…何か知らんけど頑張れな。」

「んじゃ。」

「う、うん！」

憂鬱になる。

忘れたはずなのに…。

何故音楽に関する話題ばかりが俺の周囲で繰り広げられるのであ
ろうか。

勘弁してほしい。

…昔は好きだった。

子供ながらに文字通り音を楽しんでいた。
楽しいという感情をストレートに弦に乗せて掻き鳴らしていた。

楽しい…か…忘れちゃったなあ…そんな
感情。

出会い、始まり

小学校の入学祝い。

何が欲しいかと聞かれた俺は最新のゲーム機とソフトが欲しいと言ったのを記憶している。

数日後、何を間違ったのか俺の部屋に置かれていたのは一つのギターであった。

騙されたと思つてやつてみるとは父親の弁。

何でも昔ギターを弾いていたらしく、その楽しさを俺にもわかつてほしかったらしい。

飽きたらまた欲しいものを買つてやるからと俺は渋々、父親に教えられながらギターをやり始めた。

最悪だった。血は出るわ：ママはできるわ：

かつての相棒に対する最初の印象はとにかく最悪だった。

本当に騙されたのだと思ひ、やめてやろうと思つた。

そうか、やめるか：という父親の顔が心底ムカついたのでコイツだけは抜いてやろうと必死に必死に練習した。

いつしか、欲しかったものに興味がなくなっていることに気づいた。

本当の意味で父親に騙されたのだというのは間違いではなかった。

気づくとその父親よりも上手くなっていた。

元々俺なんか大したことないという父親のしてやったり顔がこれまたムカついた。

結局俺は掌で踊らされていたに過ぎなかったのだ。

そんな俺を幼馴染みも褒めてくれた。

ギターを弾いている俺をカッコいいと

言ってくれた。

その子もピアノを習っていたから一緒に

合わせて弾いたりもした。

『将来はミュージシャンになったりするの？』

『うん！なるよ！』

その質問にも自信を持って答えられた。

まだまだ世の中を知らないガキだったけれど、その頃の俺は本当にそう信じていた。

勉強もできなかったし、運動も散々だったが両親はそんな俺に特に何も言わなかった。

ギターを取り上げることもせず、

それどころか幼馴染みの通うミュージックスクールなるところに無理やりブチ込まれた。

個人レッスンであり、今さら教わることでもないようなことばかり教えられたので

講義は非常に退屈なものではあったが…。

例えるならば小学校の高学年でたし算や

ひき算をやるようなものだった。

その退屈だった鬱憤を晴らすかのように

他の専攻のやつらと呼ばびつけてソロライブを行ったりもした。

一種の名物にもなっていたりしてたっけか…。

『引越すなんて聞いてない！何で何も

言わなかったんだよ！優！』

だが、そんな日々も長くは続かなかった。

父親の転勤で引越さざるを得なくなったのだ。

『優！行くなよ…！』

心配をかけまいと直前まで言わなかったがどうやら逆効果だったらしい。

幼馴染みはわんわん泣いていた。

顔が涙と鼻水でぐしゃぐしゃだったのが

おかしくて笑っていたら怒られてしまった。

俺はただ一言だけ言い残した。

『また一緒に弾こうね。あーちゃん。』

あの頃の幼馴染みは今元気にしているのだろうか…。

物凄く人見知りだったから周囲から浮いてしまったりはしていないだろうか。

正直怖い。

あの人に会いに行くのが。

事実、俺は越してきてから会いにいけないでいる。

怖いから。あの人の今を知るのが。

：俺の今を知られるのが。

俺が弱くなかったら…胸を張って会いにいけたのかな？

いや、弱くないんなら…そもそもここに

逃げてきたりなんかはしていないか。

大魔姫の姉

「あのさ、ちよつといいいか？」
始まりはその一言であった。

えつと…どなたですか？

こちらのイケメンは。

一瞬、男子生徒かと思つたわ。

背丈も俺とそんな変わらんし…

深紅色の髪を腰まで伸ばした

長髪の女子生徒。

まず、間違いなく上級生であろう。

そんな人が俺に何の用なのであろう。

いつかの湊さんだっけ？彼女のよう

迷子つたわけでもなさそうだし…

『今からアタシと決闘しようぜ！』とでも言われるのだろうか。

ありえなくはない。

うん、他をあたつてくれ。

リアルファイトはまじ無理。

勘弁してちょ。

ぼく痛いのがキライ。

勝てないケンカはしない主義。

「そんなに固くなるなよ。ちよつと相談があつてさ…」

相談？初対面のはずですが…

「ごごじやなんだし、ちよつと屋上にでもいかないか？」

あつ（察し）

これ終わったやつですね。

屋上ですか？屋上で何するんですか？

決闘ですか？制裁ですか？

今度昼飯奢るんで許してください。

学食は高いので勘弁してください。

そもそも俺何かしましたっけ？

授業も真面目に受けてるし、先生の頼み事も快く引き受け、女子にも優しくしている。

もうダメだ。思考がまとまらない。

お母さん。お父さん。

未だ会えずにいる幼馴染。

1年A組の皆さん。

星川優を知るすべての皆さん。

俺は今日プライドというプライドを粉々にされるかもしれませんが。
あしからず。

ていうか助けて。

「悪いな！急に付き合わせて。」

「あ、いえ…」

そういえば屋上には初めて来たな。

絶好の昼寝スポットなので是非とも

入り浸りたいんだけど…さすがに他の

生徒達の邪魔はしたくない。

そういうこともあって屋上は利用していなかったのだが…なかなか良い所じゃないか。

陽当たりも風当たりもいい。

「そ、それで…ご相談というのは…?」

「ああ…つと悪い。まだ自己紹介もしてなかったな! アタシは宇田川巴。」

「ほ、星川優です。」

「そっか、優っていうのか。よろしくな!」

そう言っただけの俺の背中をバンバン叩く。

めっちゃ痛い。

「あこと同じクラスだったよな?」

ん? 何故ここであいつの名が…

「あこって…宇田川あこですか?」

口に出して気づいた。

まさか…

「ああ! アタシの妹なんだけどさ」

「お、お姉さんですか!」

ぜんっぜん似てねえ!

失礼を承知で言うが1ミリも似てねえ。

義理の妹とかいうオチはありませんよね?

「最近のあこの様子を知りたくてさ」

こうして優に付き合ってもらったわけなんだ。」

なるほど…本当に相談だったのか。

「よかったあ…」

「ん? よかった?」

「いえ、なんでも…それで、あこさんの様子でしたっけ?」

「ああ!」

「そういえば最近、一人でぶつぶつ言ってることが増えましたね。」

いつもと違うというか。

「いつも、我が身に宿りしなんちやらが
バーン！とか言ったりしてるんですけど…最近は何かなくなりま
したね。」

「そっか…」

「なんか、悩んでるんでしょうか？」

あつたほうがいいとはいわないが

あの口上を聞けないとなるとそれはそれでちよつと寂しい気もす
る。

ほんのちよつとだけだけどな！

「あこのヤツ、カツコいいものに憧れててな。」

「あー…それはなんとなくわかります。」

「その…なんていうか…その中にはアタシも含まれてるらしいんだ
…」

さすがに恥ずかしいのか、少し顔を赤くして巴さんは話す。

ちよつとかわいいとか思っちゃまったよ！

畜生！

「それで、そのカツコいいっていうのを

具体的に説明するにはどうしたらいいかってわけで悩んでいるみ
たいなんだ。」

なるほど。

…いや、無理じゃね？

人間無理に短所を克服しようとせず、長所を伸ばすべきだと思う
…あれって長所なのか？

「アタシは今回力になれそうになくてさ…アタシの幼馴染が手伝って
くれてはいるんだけど…」

手応えはさほどって感じなのかな。

「やっぱり、そういうのは男子のほうが

詳しいのかなーと思って優に話しかけたんだ。」

そういうことか…だから俺に。

はあ…仕方ない。

乗りかかった船ってやつだ。

「そういうことなら、俺でよければ力になりますよ。」

「ホントか!？」

わぁ近い。近いっす。

「俺も男ですし、あいつの気持ちにはわからんでもないんでね。」

俺にもカツコいいものに憧れた時期はある。

「悪いなー助かるよ優ー!あこのヤツ、良い友達持ったな…これからも仲良くしてくれな!」

友達か。友達なのかな？

まあそういうことにしとくか。

…嫌いではねーし。

超カツコいい追求大作戦

「んー…」

俺は悩んでいた。

『俺でよければ力になりますよ』

ドヤ顔かましてそう言ったまではよかったのだが…

星川優、清々しいまでのノープランである。

「どうすっかなー…」

カツコいいってのを具体的に説明だろ？

そんな宇田川をふと夢想してみるが…

「なんかやだな…」

推しだった清廉潔白を謳うアイドルが実はタバコ吸ってましたみたいなの。

そんなのはあいつじゃないよなあ。

無理にアイデンティティーをぶっ壊す必要もないのではないか？
という疑念に駆られる。

いや、でも…あいつも殻をやぶろうとしてることだし、ここはやっぱり協力するべきか…

それとなくあいつから聞き出して助言するってのが一番なのかな。
間違っても、お前の姉ちゃんから相談受けてよーなんてことは口が裂けても言わないが。

「どうしたの？ぶつぶつ言ってる…」

「おっ！お二人さん…いいところに来た。」

戸山に朝日…この二人は宇田川と結構仲良いからな。

建設的な意見が聞けるかもしれん。

幸い宇田川もまだ来てないことだし。

「いやさ、実は昨日宇田川の姉ちゃん…

巴先輩って人から相談を受けてな」

「巴先輩？」

「aftergrowさんの人やね。」

「あふたーぐるう？…もしかして、バンド組んでる系？」

「うん、aftergrowさんってバンドの

あこちゃんと同じドラム担当の人なんよ。」

じゃあ、姉妹揃ってドラマーなんか。

ていうかバンド名超かっけえなおい。

そんなネーミングセンスがほしかったものだ。

と、話が逸れたな。

「あいつ、自分の思うカッコいいってのを詳しく説明できるようにって試行錯誤してるらしいのよ。」

「そういえばあこ、この前そんなこと言ってたような…」

「そのカッコいいって中には巴先輩も含まれてるらしくて…自分は協力できないけど何とかしてやりたい…そこで俺に相談したらしいのよ。」

「それで、優は引き受けたんだ？」

「まーな。これでも一応男だしな。だから、巴先輩も俺に相談したんだと思うし。」

「なるほど、だから唸ってたんだ。」

「え？俺そんななってた？」

「うん。あーとか、んーとか言ってたよ。」

「それは忘れて。」

だって難しいんだもん。

「あ、ちなみにこのこと宇田川には内緒な。」

「わかってる。」

「でさーなんか良さ案ないかなあ…」

「うーん…難しいね。」

「あこちゃん、この前はRoseliaのカッコよさを伝えられるようになって言ってたよね？」

「そうだね。」

「となると、カギになるのはRoseliaか…。」

うーん、困った。

非常に困った。

俺、Roseliaのこと何も知らねー。

「おはよー!」

そんな中来てしまった物語の主人公。

宇田川あこ。

こいつの執筆した小説読んでみたいわ。

擬音祭りになること必至である。

ドーン!とかバーン!とか

「…宇田川、最近いつものアレやらんなあ。」

「え?アレって?」

「…ふっふっふ、皆の者!待たせたな!

闇より顕れし大魔姫あこさんじよー!

ドーン!

…みたいなヤツ。」

刹那、教室の音という音が消え、俺の声だけが虚しく響く。

数名の女子が大丈夫?保健室行く?みたいな顔してたのは納得が
いかん。

なんで示しあわせたかのように黙るねん

お前ら。

それで、宇田川には寛容なくせに俺には
理不尽なんだなお前ら。

「あこね、カッコいいっていうのをもつともつと色んな人に知ってもらうにはどうしたらいいかなーって考えてる最中なんだ!」

「そ、そうか。」

誰か、誰か俺のメンタルケアを早急に!

ちなみに戸山達は察してくれたのか、席をはずしてくれた。

「それでね、あすかやろつか達をびっくりさせてあげるんだ!」

「うんうん。」

「モカちゃんにも協力してもらってるんだけど、中々うまくいかないんだー。」

「モカちゃん?」

「うん!おねーちゃんと同じクラスの人。」

そうか、幼馴染にも協力してもらってるって言ってたっけ。

「もしかして、aftergrowってバンドの人か?」

「うん!そーだよ!優、おねーちゃん達のこと知ってたの?」

「ま、まあ噂くらいはな。」

モカちゃんって人ともコンタクトを取る必要があるか…。

「…俺も協力してやろうか?男子の意見も取り入れる価値はあると思うぞ。」

「ホント!?ありがとー優!」

手を握るな手を。男子なんだからな一応!

「題して、超カッコいい追求大作戦ってとこか。」

お前の言うカツコいいってやつを

俺にとって、平日の昼飯というのは戦争である。
すなわち購買のパンを買うこと。
学食はあるにはあるのだが値が張るので
基本却下だ。

俺のお小遣いでは手が出ない。
食うより寝ることが好きな俺だが、腹減りのまま寝るのはイヤだ。
弁当を作ってくれば済む話なのだが、母ちゃんは作ってくれんし、
俺もギリギリまで睡眠したい勢なのでこれも却下。

前置きが長くなつたが、ここでパンを奪取できるかどうか俺の今
後を左右するということになる。

だが、よく考えてみてほしい。
当たり前だが売店は混雑する。

女子が殺到する。

そんな中俺が割って入れる隙があるだろうか？
結論。ありません。

だつてさ、うっかり女子の身体に触れてみ？
セクハラだ変態だなどと糾弾された日には俺の居場所がなくなっ
ちやうのよ。

俺のモットーは平和に過ごすこと。

最近がちよつと色々な人と交流を深めていつてる気がするが…そ
こはブレちやいかん。

結果、昼飯⇨運ゲーと化す。訳ワカメ。

大抵は残りモノがあつてくれるんだが…

「…ない。」

「いつも大変だねー。」

「はは…」

売店のおばちゃんの励ましにも乾いた笑いしか出ない。

くそ…今週の戦績は3勝2敗か。

誰だよ残りモノには福があるとか言ったヤツ。

なんもねーわアホたれ。

「お困りかね〜？ 青少年よ。」

「はい？」

泣きそうになっていると後ろから間延びした声が聞こえてきた。

誰だ…今の俺は気がたつて…

「つて多っ!？」

立っていたのは両手いっぱいパンを抱えた女子生徒だった。

いや、両手いっぱいパンを抱えたって

何やねんってツツコミが入るだろうが、

これマジな？

ただだけ買ってんだよ!

ただいま絶賛お困り中ですよ…アンタが

たくさんパンを買ったせいだな。

そもそも食いきれんのかそれ。

「一つ差し上げよう。モカちゃんからのプレゼント、ありがたく受

けとるがよいぞー。」

そう言つて一つパンを差し出してくる。

「えっ…いいんですか？」

「もちろんだとも。」

マジで？この人女神か何か？

「…ありがとうございます。」

さつきは悪態ついて申し訳ない…モカちゃんとやら…

ん？モカちゃん？

「えっと…いきなりつかぬことをお伺いするんですが…宇田川あこつ

て女子生徒の子知ってますか？」

「あこちゃん？もちろん、知ってますとも。」

やっぱり…宇田川の言つてたモカちゃんって恐らくこの人のことだ

な。

「もしかして、aftergrowってバンドのメンバーの方ですか

？」

「ご名答ー。aftergrowのギタリスト、青葉モカちゃんとはあたしのことよー。」

「…ギタリスト。」

「…およ？どうかした？」

「…ああ、いえ…何でも。」

「君かね？トモちんの言ってた優君というのは？」

トモちん…巴先輩のことかな？

「ええ、宇田川あこのクラスメイトやってます。星川 優です。」

「よろしく。」

「あ、こちらこそ。」

なんか、この人の喋り方といい声といいクセになる。

良い意味で。

しかし、ギタリストとは。

人は見かけによらないな。

ギターを持つと性格が変わったりするのだろうか。

「最近あの子、カッコいいを伝えたいとかなんとかって張り切っちゃってましてねー…先輩も相談に乗ってるとか聞きましたけど…」

「うむ。モカちゃんは国語が得意だからね。」

全然そうは見えんが、失礼ながら。

「なんだかんだ、俺も協力することになりました…先輩に会いたいは思ってたんですよ。」

「モカちゃんに会いたいは…なかなか

情熱的ですな。」

「や、そういう意味ではなくてですな…」

なんちゆう勘違いしとんねん。

「ていうか、パン抱えたまま話すのもアレですし…またの機会にしますか。」

「そうですな。またね〜優ちん。」

…優ちん？

「よー何描いてんだ？」

「…ふっふっふ…我「なになに…超カッコいいロゼリア！大饗宴の始まり？」」

「もー！言わせてよー！」

「いやー、ついやつちやうんだよ。わりーな。」

お約束ってやつだよ。

宇田川のやつスケッチブックに何描いてるのかと思ったら…そこまで真剣だったとはな。

「あすかやろつかには内緒だよ！」

「わかってるって…で、どうよ？形になりそうか？」

「うーん、もう少しで形にはなりそうんだけど…」

「ふーん、お前本当にRoseliaが好きなんだな。」

「うん！あこ、Roseliaのみーんなが大好き！」

「そうかそうか。」

Roseliaのことは全然知らねーけど、こいつがRoselia好きーってのはめっちゃ伝わってくるんだよなあ…。

「じゃあ、見せつけてやろうぜ。」

「え？」

「お前の言うカッコいいってやつを。みんなにさ。」

「いいね！それいい！」

「やるんならド派手にだな…お前も好きだろ？」

「うん！」

「aftergrowの人達とか戸山や朝日に声かけてさ、どっかに集まってもらおうや。」

「そこで我が大魔姫あこの真なる饗宴が始まるというわけか…」
それは知らねーけど。

「わかった！あこ、休日でのスケッチブック仕上げてくる！」

「ま、頑張れな。」

「うん！りんりんにも協力してもらおうから！たぶん大丈夫だよ！」
りんりんって、確かRoseliaの…。

ということは少なくともこいつのこれはRoselia公認ってわけか。

一体どんなバンドなんだよRoselia。ちよつと気になってきたわ。

「ありがとね！優！」

「別に、俺何もしてねーけど…」

巴先輩に頼まれたからだかな。

そこんとこ勘違いするなよ。

ちよつと嬉しいとか思っていないからな！

大饗宴という名の公開処刑

月曜日の昼休み。

学園の曰く付きの井戸がある場所。
そこが饗宴(?)の場となった。

「おい、みんな来たっぽいぞー。」

戸山に朝日に巴先輩、モカちゃん先輩。

…と、あと一人知らない人がいる。

誰だろ？

黒髪の一部に赤いメッシュを入れた
女子生徒。

ぶつちやけるとめつちや怖い。

あの人もAftergrowの人…だよな？

「ふっふっふ…」

「えー皆さん、お時間のない中お集まり

頂き誠に感謝です。」

「もー…言わせてっばー!」

ばかたれ。打ち合わせしただろうが。

変なアドリブ入れずにその通りにやらんかい。

時間ねーんだってばよ。

「モカ、あの人は?」

「あこちんのクラスメイトの優ちゃん。」

「へえ…男子なんていたんだ。」

ですよねー。すみません。

異物が紛れ込んだんじゃないよ…。

「大丈夫。優ちゃんは健全な

男の子だよ。」

モカちゃん先輩、言い方。

どちらとも取れるからねその発言。

「誤解だからね？名も知らぬ赤メツシユ先輩。」

まあいい…気を取り直していくか。

「…えーと、ああ？」

宇田川が作成した（恐らくりんりんという人も協力したと思われる）台本に目を落とすが、内容を見て思わず固まる。

俺の役目はこの台本を読み上げること。

なのだが…しかし、これは…

これを俺に読めというのか？

継るように目配せするも返ってきたのは清々しいまでのドヤ顔であつた。

おのれ…覚えているよ。

「万古不易の闇より命ずるは共鳴——

我が叫——こえ——に共鳴せし、青薔薇の誇りを持つ者達よ——今ここにその姿を顕さん！

…友希那さんのカツコいい呪文で Roselia の皆がババーン！とさんじょー！」

「仮初めの衣を脱ぎ、真なる姿を！

えーつと…さ、紗夜さん？リサ姉、りんりん、そして大魔姫あこが雷と共にドーンと出てくる！」

「ごめん…やっぱりもう帰っていい？」

メンタルに計り知れないダメージを負いそうなので…ていうかも
う負ってる。

赤メツシユ先輩なんかはもうドン引きしてるもん。

ついでに言うとうと戸山と朝日もドン引きしてる。

そういう目で見られてもゾクゾクしないからね？

追い討ちにしなければならないからな？

なんてこった…大饗宴とは名ばかりの公開処刑じゃねえか。

頼まれたって二度とやらんぞ畜生。

その後もメンタルにダメージを負いつつも

俺は厨二病全開な台詞を効果音を交えつつ

精一杯朗読した。

詳細は割愛する。

俺のメンタル面を考慮して。

「はあ…むっちゃ疲れた。」

「…でね、紗夜さんのギターがジャーン！ってなって…あこの中の闇
の力が覚醒してドーン！ってなってね…それからあこのドラムがド
コドコドコドコダーン！って感じで締めるの！」

「あ…盛り上がってるとこ悪いけど

ちよつといいか？」

「なにになに？」

「ツツコミ不可避。カオスすぎるわ。」

他でもない俺が置いてきぼりをくらってる。

「えー！」

「お前なあ、結局ドーン！とかダーン！

とか擬音ばかりじゃねえか…Roseliaの

カツコよさを具体的に表現したかったんだろ？」

「うん！だからあこね！あこのカツコいいを形にするにはRosel

iaのライブのカッコよさを伝えるのが一番かなーって思ったんだ！

いや、だからな…それじゃいつも通りだよって話をしとるわけ…
こう、何て言うのかな？くそ、もどかしい…。

「皆さんはどうでした？Roseliaのカッコよさ、伝わりました？」

「何か…闇の力がヤバいことだけはわかった。」

わかったのかよ!?赤メツシユ先輩…

あんた何者？

「あこちんワールド全開だったね。」

優ちゃんも気合い入ってたし。」

そこは触れないでくれ…。

「でき、結局あこの言うカッコいいって何？闇の…力？」

だよな？そうなるよな戸山？

ナイスツツコミ！

「えーっ!?それを今説明したのにー！」

うん、だからできてなかったんだよ…残念ながら。

「でも、Roseliaのカッコよさは何となく

伝わったかな…。」

そう言いながらもフォローは入れる。

そういうところしっかりしてんね戸山は。

確かにな…何となく…本当に臍気だけど、

カッコよさみたいなのは伝わったっちゃ

伝わったかな。

Roseliaのライブは観たことないけど。

「ん？…っていうかRoseliaのライブを観たことないのって…
もしかして俺だけ？」

「そうだったの？優ちゃん。」

「まあ、お恥ずかしながら…」

「アタシ達は一緒にライブしたこともあるぜ。」

「そうだったんですか…」

何だよ…あんだだけ息巻いといて俺だけがあまりピンとこないってオチかよ…なんじゃそりゃ。

「優も今度ライブやる時は観に来てよ！」

「あーわかった…結局、この目で直接観ないことにはわからないってことね。」

「そういうこと。」

「モカちゃん！おねーちゃん！蘭ちゃんも

聞いてくれてありがとね！」

赤メツシユ先輩、蘭ちゃんっていうのね…

「優もありがと！」

「いや、俺は別に…」

黒歴史増やしただけやぞ。

「みんな！次の時間移動教室！」

あ、そうだっけ？やべ。

「次の科目の先生、遅れると怖いよ！」

しーない走るか。

カツコいいに真摯に向き合うお前はほんのちよつとだけカツコよかったかな。

口には絶対出さないけど…。

願わくばそのままのお前でいてくれ。

生徒会長がアイドルだった件

「しっかし、びっくりしましたよ。」

まさか、つぐ先輩がAftergrowのメンバー
だったとは…」

「うん。あと1人ひまりちゃんって子が

いて、5人でAftergrowなんだ！」

「名前かっけえっすね…Aftergrowって誰がつけたんですか
？」

「それは、巴ちゃんが。」

なるほど、納得。

「先輩はちなみに何の楽器です？」

「私はキーボードだよ。」

「へえ、キーボードですか。」

キーボードってピアノと似たような楽器だっけ。

その辺りの違いは詳しくないからよくわからんけど。

つぐ先輩のキーボードか…絵になるな。

ただいま俺がいるのは生徒会室である。

氷川日菜会長の襲来以来ちよいちよい

ここにお呼ばれるようになった。

殆どが雑談まがいな内容だが。

仕事せんでいいのかと毎回思う。

「はい、お茶どうぞ。」

「あ、いつもいつもすいません。」

そんな気を使わんでもいいのに

…つぐ先輩。

ああ、うまい…優しさが染み渡るわ。

つぐ先輩の優しめ。俺には勿体ないくらいだ。

まじ尊い。

癒し。

失くしてはならないこの空間この時間。

「あたしもバンド組んでるよ！」

「ぶっ!？」

…そう、この自由人さえいなければの話。
ていうか、バンド組んでるって言った？

「大丈夫!？」

「ああ、いえ…ちよつとびっくりして。」

生まれて初めてだわお茶噴き出したの。

「バンドですか？会長が？」

「うん！pastel*palettesってアイドル

ユニットなんだ！」

アイドルでバンド!？」

まあ、確かにこの人美人つちやあ美人
だけどき…アイドルだなんて…

「またまたー盛りすぎでしょ。」

ねえ、つぐ先輩?。」

「あはは…。」

…あれ？

苦笑い？

つぐ先輩？

…否定しないの？

「…まじなんですか？」

「…うん。」

「ホントだつてばー!」

アイドルでバンドで生徒会長で?

ただ者じゃないとは思つてはいたが、

予想に違わぬハイスペックガールだったわ…この人。

「じゃあ…テレビとかに出てたりするんですか?」

「うん!」

「…じゃ、じゃあ楽器とか弾いたりも?」

「うん!あたしはギターだよ!」

ギターかよ…よりにもよつて。

「先輩…ギターつて思いの外難しいんですよ?」

弾けるんか?

「えー?あたしはすぐ弾けたけどなあ…」

弾けたのか!すぐ!?!いや、弾けてたまるか!

なんなのこの人?天才か何かの類?

恨めしいわあ、その才能。

「あたしのおねーちゃんもね、ギター

弾いてるんだ!」

「はあ…お姉さんいるんですか?」

姉妹揃つてギターとは…それはそれは仲がよろしいことで。

「うん!Roselliaのギターやつてるんだ!」

「は!」

Roselliaの!?

えつと…氷川先輩がパステル何とかのギターでアイドルで…お姉

さんがRoselliaのギター?

情報量多杉内。

「お姉さんつてことは…さよさんつて人ですか?」

「うん!そうだよ!」

宇田川がいつも話してるわ。

さよさんつて人の話。

しかし、それが氷川先輩…日菜先輩の

お姉さんとはね。

日菜先輩のお姉さんか…
大体想像つくわ。

日菜先輩以上の大物ってことだろ？

『るるる〜ん♪ってきちちゃった！』

多分、こんな感じか…やっべえ。

ぜってえ関わらないでおこう…。

いのちをだいにが俺のモットー。

「でもさー良かったよ、優君も学園生活に慣れてきたみたいで。」

「まあ、慣れるもんなんですね…

この異空間にも。」

昔っから言われてるけど慣れてって怖いね

やっぱし。

俺も感覚麻痺しつつあるもん。

「あ、そうだ！優君！週末に大きなライブイベントがあるんだけど

さー優君も来てよ！」

いや、唐突だな！

週末って…

「明後日じゃないすか!？」

「うん！」

うん！じゃなくて。

「もしかして、先輩のバンドも出るんですか？」

「そ、あたしたちの晴れ舞台！」

すげーな、さすがアイドル。

「頑張ってくださいね。」

「えー！観に来てくれないのー？」

「いや、もう間に合わんでしょ？」

色々と…あれとかこれとか。

間に合っても行かんけどさ。

「じゃあ今度！あたしたちがライブやる時は観に来てよ？」

「わかりました、わかりました。」

何だかどんだん逃げ場がなくなっていくてる気がする俺。

pastel*palettes

v.o. 丸山 彩

Ba. 白鷺 千聖

Gt. 氷川 日菜

Dr. 大和 麻弥

key. 若宮 イヴ

からなる5人組のアイドルバンド。

今回のWIF（ワールドアイドルフェス）では

デビューライブでの苦い経験を払拭し、

真の意味での新たなpastel*palettesの活躍を期待したい。

「へえー…結構有名なのね。」

デビューライブの苦い経験って何かあったのか？

「は、日菜先輩マジでギターなんだ…」

あと、この白鷺千聖って…

一般常識に疎い俺でも知ってる。

女優さんじゃなかったか？

テレビドラマでよく見かけたことあるし。

バンドなんかやってたのか。

「そんなに楽しいのかねえ…バンドって…」

女優業の傍らバンドやってるってことだろ？

忙しさの極みじゃねえか。

そうさせる何かがあるのか？

そのバンド、pastel*palettesには。

わからんなあ…。

当然か、ずっと一人で誰かと何かを

分かち合って成し遂げたことなんて

何もないんだからな。

ま、頑張ってくださいや。
アイドルとして、バンドとして。
陰ながら応援していますよ。

バンドがやりたくて

「もう6月になるのか…」

季節は5月も終わりを迎えるかという頃。

羽丘に入学しておよそ2ヶ月が経とうとしていた。

何だかんだで早いものですねあ…この調子で夏休みまで一気に月日が経ってくれないものだろうか。

無事(?) 中間テストも終わり(結果はさておき) 残る大きなイベントは文化祭を残すのみとなった。

これを楽しめれば念願の夏休みなのだが…それがまだまだ遠い。

「すこやかゴーゴー祭り?」

そんな中もう一つの大きなイベントの話題があがっていた。

6月始めの土曜日に商店街で大規模な祭りをやるらしい。

何でも地域の商店街の活性化を目的とするお祭りだそうだ。

…名前には突っ込まんからな。

「うん! それでね、音楽発表会っていうのがあって、おねーちゃん達のバンドも演奏するんだー!」

「へー、Aftergrowが…」

「おねーちゃん、和太鼓も叩くんだよ!」

和太鼓…想像だけどめちやめちや似合うな

あの人。

何となく祭り好きそうだし。

「そりやまた、一大イベントだな…宇田川

お前絶対見に行くだろ?」

「うん! あすかと優も行くようよ!」

「ごめん、その日は塾あるんだ。」

「俺も予定ある。」

本当は何もないんだけど。
人混みは嫌いなんだな。

「そっかー…」

「朝日と行けばいいじゃん。」

「ろっかはGalaxyのスタッフだからダメなんだ。」

「Galaxy?」

「六花、ライブハウスのGalaxyっていうところでバイトしてるんだよ。」

「ライブハウス!?!」

あいつ、そんなところでバイトしてたのか…

「と、噂をすれば。」

その朝日が大量のプリントを抱え戻ってきた。

また先生にパシられたのだろう。

よくやるわ。

「ああっ!」

「ごめんね!朝日さん!」

あーあ…やると思った。

「何しとんねん…ほら。」

「あ、ありがとう…」

「一体何のプリントだこれ…文化祭の出し物?」

うわあ、めんどくせーのきた。

「うん、帰りのHRが終わった後に少し

時間を取るんやって。」

もうめんどくさい…早く帰りたいのに。

「で、先生…何で俺が文化祭の実行委員なんかやらないかんですか?」

「イヤだった?」

「はい、もの凄くイヤです。」

「はつきり言うね。」

「だって、完璧な人選ミスやないですか。仮にやるにしても最低あと一人はつけてくれないと。」

「それなら、やってくれるの?」

「まあ…それなら…」

もし、断ったら後が怖いだろうし。

相方つけてくれればそいつに丸投げすれば

いいっていうね、ゲス思考ですよ。

「話が早くて助かるわー!星川君。」

「先生、最近キャラ崩壊してませんか?」

最初の真面目系敬語キャラはどこいったんですか?」

「堅苦しいのは疲れるから…」

「なるほど、大変なんすね。」

至極どうでもいい。

「って相方は戸山かい。」

「私じゃダメだった?」

「丸投げできないじゃん。」

「…ダメに決まってるでしょ。」

畜生、嵌められた。

あの先公まじでふざけんなし。

「えーとじゃあ早速、文化祭の出し物決め始めていききたいと思いまーす。」

もうちやつちやと終わらせよう。

「はい、じゃあ何か案ある人挙手。」

「お化け屋敷かなー」

「プラネタリウムは？」

「迷路とか？」

「薫様のクラスは薫様カフェっていうのやるらしいよ。」

「えっ！薫様が給仕って絶対似合うよ！」

「楽しみー！」

君らさあ、挙手って意味わかるかな？

それに俺、聖○太子じゃないからね？

そんないつぺんに言われてもわからんわ。

最後のほうとか話脱線してなかったか？

薫様って誰？

あと、戸山は何で全部列挙して書いてんの？

あれ全部聞こえたのかよ。

「じゃーもうめんどくさいからメイドカフェってことでいい？」

「何でそうなるのー？」

「メイドカフェって言ったら定番だろうが…」

もうお前らつべこべ言わずメイド服着ろよ。」

それで、ある程度の男性客は釣れるだろ。

「それじゃ星川も着るんだよ？」

「は？ちよまつ…何でそうなるんだよ!?!」

何その道連れ理論。

「いいと思うよ、メイドカフェ！」

「賛成ー！」

「賛成の反対！お前らただ俺にメイド服

着せたいだけだろ！」

目的と手段が入れ替わってんじゃねーかよ！

「星川が言い出したんだよ？」

「それに関しては…すみません。」

謝るから勘弁してください、まじで。

「いいよ！メイドカフェやる！」

「良い案出してくれたよー！」

「さすが実行委員！」

何なのお前らのその無駄な結束力。

「戸山、どうすればいいと思う?」

「諦めたほうがいいと思うよ。」

おいおい。

「宇田川!何か案ないか?」

「…ふっふっふ、よくぞ聞いてくれた…」

魔界より舞い降りし…大魔姫あこが其方の「あーごめん却下で。」
聞いた俺が間違ってたわ。

「えー!でも、あこもいいと思うよ!

メイドさん!」

お前こら。便乗すな!

くそっ…こうしてまた黒歴史が増えるのか…

仕方がない、元々は自分で蒔いた種だ。

ボルテージは下がる気配がないし、受け入れるしかないか…

「あ、あの…」

「ん?」

そんな中おずおずと手が拳がる。

「朝日か?どうした?」

まさかお前…救世主になりうるのか?

俺の。

「朝日、何かある?あるよな?いいぞ!

遠慮せず言え!」

頼むぞ!朝日!メイド服なんか着てられるか!お前の案にかかっ
てるからな!

もうおたんちんとかバカにせんから!

「セ…セッションカフェっていうのは…どうかなって…」

「…セッションカフェ?セッションって

音楽やるってことか?」

田舎娘のわりに難しい言葉知ってるじゃねえの。

「うん、お客さんと一緒に楽器弾けたら

楽しいかなって…」

「セッションカフェかー…面白そうだね！」

「ね！いいかも！」

朝日、よくやった！お前まじ救世主。

「でも、楽器やら機材やらどうすんだ？」

自前の使うのか？それとも、音楽室の使ったりとか？」

「そつか…じゃあ音楽室の機材も使わせてもらおうよ！」

「星川、お願いね！借りられるか聞いてみて！」

「俺かよ…」

早く帰りたいんだってばよ。

「わかったよ、任しとけ…じゃあ会議終わりねー散会。」

放課後に音楽の先生に事情を説明し、無事許可を貰うことができた。

「ったくよー…何で俺が実行委員なんか…」

大体こんなつもりじゃなかったんだよ。

目立たず、誰とも関わらず、のらりくらりと立ち回るはずが…

「はあ…らしくねえ…」

どうしてこうなっちゃったんだか。

「ん？」

あそこにおられるのは…救世主朝日様では？

「よう、どうしたんだ？」

「あ、優くん。」

「今許可貰ってきたぞ。機材貸してくれるってさ。」

「あ、ありがとう！」

「いいってことよ、お前があそこで案出さなかったらどうなっただことやら…」

「でも…本当に良かったんかな？」

セッションカフェって…」

「好評だったじゃねーか。それに楽器弾けるやつらだっただって結構いるだろ？そこら辺はお前らに任せるけどさ…」

あとは勝手にやってくれ。

「そういや、Galaxyってライブハウスでバイトしてるんだってな。」

「うん。一応機材とかは一通り扱えるから。」

「何だってそんな大変そうなところで

バイトしてんだ？」

「えっと…それは…」

「それは？」

「わ、私…バンドがやりたくて…」

バンド…こつちへ越してきてから一体何度聞いたかわからないその単語。

まさか、こいつもか…。

「バンド、やりたいのか？」

「うん…親に無理言つて上京させてもらったんやけど…メンバーが全然集まらんくて…」

え？ちよつと待て？

「上京させてもらった？親の転勤とかじゃなくて？」

「うん…私、バンドがやりたくて…東京まで来たんや。」

そう言い切る朝日はいつもとは別人に見えて…

何だよお前…そんな顔もできるんじゃないやねえか。

「親御さん反対しなかったのか？」

「最初はされたんやけど、東京に行っても絶対大丈夫って認めさせてやるんやって頑張ったら…何とか認めてもらえて…」

…自分の意志で来たってことかよ？

バンドをやるために？

たったそれだけのために

見知らぬ土地に足を踏み入れたつてののかよ？

「それでわざわざ岐阜からね…で、肝心のメンバー集めがうまくいってらんと…」

「そうなんよ…」

「ふーん…楽器は？何やるの？」

「私は、ギターやけど。」

…まじかよ。

お前、ギタリストだったのかよ。

「そうか…ギターか…」

「優くん？」

「いや、なんでもね…頑張れよ。」

「うん！」

少し、ほんの少し…お前と会うのが早ければ…また違った未来があつたのかもしれない。

お前と…お前達ともっと音楽について語り合えた日が来ていたのかもしれない。

けど、ごめんな。

それはもう無理なんだ。

欠けているもの

寝た時に見る夢ってのは罪作りなやつだと俺は思う。自分が見たくもないものを

わざわざ引つ張り出してきて強制的に観賞させるからだ。

夢なんだからもつとこう非現実的な

ファンタジックな夢を見せてくれてもいいと思う。

何故、現実にあつたことをリアルに再現してくるものかと毒づいた。

「優、起きた？」

「ああ、おはよう…じゃねえな…悪い、晩飯作るよ。」

大抵夢ってのは起き抜けに忘れていて、思い出せないことが多いのだが、今回ののは

格別に最悪だ。

まだ鮮明に残っている。おかげで気分は最悪。

「大丈夫？あんた顔色悪いよ？」

「どうやら顔に出ているらしい。」

「大丈夫。ちよつと今日はバタバタして疲れてんだよきつと。」

「そう？それならいいけど…何か行事とか？」

「ああ、今度、学園の文化祭があつてね。」

「へー文化祭…懐かしいねえ…。」

やはり、思い出に残るもんなんだろうか？

「母ちゃんは何か思い出とかあるの？」

「父さんがステージでギター弾いてね…その後すぐだったかねえ…俺の歌どうだった？…って。というか付き合ってくれ！…ってどさくさ紛れに告白されたのよ。」

そうだったのかよ…。初めて知った。

あの親父ギターボーカルやってたのか。

告白の結果は推して知るべしか。

俺がいるんだから。

「あんたもギター弾けばいいじゃない。」

「何でさ、イヤだよ。」

「楽器のこととかはよくわからないけど、父さんより全然うまいと思うよ。」

「…いいんだよ。」

「そうかい、もったいない。」

もったいなくなかないさ。

俺よりうまいやつなんかいくらでもいる。

いや、うまいへタ以前の問題か。

「いつからだだったつけね…あんたがギター弾かなくなったのは。」

「もういいだろ、その話は。」

さつき見た夢の内容がフラッシュバックする。

俺がギターを弾いていた頃の夢。

悪趣味な編集が施されたくそつたれなりリアルな夢。

「ごちそう様。」

「食器洗つとくから、今日はもうゆっくりに寝なさいよ。」

「ああ、ありがとさん。」

といつても、夢の続きを見せられそうで

寝るのも億劫だ。…いつから弾かなくなつたか…去年の夏の終わりだよ、母ちゃん。その時に俺は大事なものを失ってしまった。

情熱を失ってしまった。

だから、俺は眩しく感じるのかもしれない。

俺に欠けているものを持っているあいつらが。

クラスの連中。

自分の好きなものに全力な宇田川。

明確な目標を持って、頑張っている戸山。

バンドがやりたくて数々の障害を乗り越え、未開の地に足を踏み入れた

…静かな情熱を内に秘めた朝日。

「どうしてだ？何でそんなに頑張れるんだ？」

疑問に答えてくれるものはいない。

眩きは虚しく虚空に消えるだけだった。

文化祭が何故か他校と合同になりました

「みんなー！花女と文化祭やりたい
かー!?」

「おおー!」

「はいはい。」

現在、生徒集会の真っ最中。

羽丘は本日も平和です。

花女って学校と合同で文化祭を
やるんだと。

理由？聞くだけ無駄だと思う。

「花女と文化祭やるぞー!」

「おおー!」

日菜先輩、あんたのカリスマ性は
大したもんだよホントに。

周りからは楽しみーという声が
ちらほらと。

いやさ…他校ですよ？皆さん。

何が楽しくて見知らぬ人達と文化祭なんかやらなきやいけない
だつちゆう話だよ。しかも花女…正式には花咲川女子学園

というらしいが…よりにもよって女子校かい。

「はあ…」

女子の分母だけ増えるとか…俺に対する
いじめですか？そりゃあ女子だけって

部分を切り取れば楽園に見えるかもしれないけどさ…実際は地獄
よ?

「ありえねーわー…」

「えー?あこは楽しいと思うけどなー?」
お前の意見は聞いとらんわ。

ていうか、いつの間になんだお前は。

「俺は楽しくないの。大体向こうは賛成してんのか?」

「生徒会長がりんりんだから、たぶん

大丈夫だよ！」

「りんりんって確かRoseliaの…」

りんりんって人、生徒会長だったのかよ。

大丈夫なのか？

向こうは向こうで自由人だったりしないよな？

カオスだぞ？そうだったら。

「紗夜さんもいるし、あー、すっごく楽しみ！」

紗夜さんって日菜先輩のお姉さんか。

同い年なのか…双子だったんだな。

もしかして、お姉さんがいるから合同とか言い出したのか？

あり得る…あの人なら。

あの人の姉好きは俺も知っているし。

るんっ♪てすることおねーちゃんが頭の大半を占めているからな。

あれが二人いるのか…震えが止まらんわ。

「やっぱり、姉ちゃんが好きなように

できてんのかねえ…妹ってのはさ。」

「そうだよー！ね、あすか？」

「えっ、私は…」

「ん？戸山も姉ちゃんいるの？」

「…うん。」

へえ、意外だな。どつちかっていうと

姉ちゃんっぽかったから。

こんなしつかりした妹さんを持って

お姉さんも鼻が高いだろうな。

「私のお姉ちゃん…花女の生徒なんだ。」

「まじで？嬉しい偶然じゃないの。」

「別に…」

「もー照れんなって…な？」

「照れてないし…」

そりゃあ、知り合いとかいる人はいいだろうけどさ、俺なんか数えるくらいしかないぞ？

「あ。」

「どうしたの？」

「いや、そーいや…小さな頃からの

知り合いがいるんだけど…越してきてから未だに会いに行つてねーな…って…」

「前に話してた人？」

「あれ？話したっけ？」

「うん、一個上の先輩でしょ？」

「ああ…うん。」

「まじでどうしよう。」

「なんやかんやで…もう2ヶ月以上も経っちまったよ。」

「かといって、このまま会わんわけにもいかないしなあ。」

「その人と連絡は取つてないの？」

「ああ…家は知ってるんだけど…」

「じゃあ、会いにいけばいいじゃん。」

「いや、心の準備がだな…」

「もしかしたらさ、近くに住んでるなら

花女に通つてるかもよ？」

「いやいや、まさか…」

「会いたいよ？会いたいけどさ…。」

「会いたいけど会いたくないっていう

ジレンマってやつ？」

「…そもそも忘れ去られてたりしたらどうしよう。」

「万が一彼氏とかいたら…そいつはぶつとばそう。」

「ああ、くそっ…被害妄想ばかりが広がる…。」

「いつから俺はこんな女々しくなったんだ？」

「何ぶつぶつ言ってるの？」

「なんでもない…」

「そういえば、ろっかは？」

「わかんない。どこ行っただら？」

「また、先生にパシられてんだろ。」

「それか、バンドのメンバー集めかな？」

「ああ、そういやこの前そんなこと言ってたな…バンドがやりたくて東京来たって…」

「うん…軽音部の体験入部に行ったり

してたんだけど、うまくいかなかったみたい。」

あいつ、意外と行動力はあるんだな。

少しばかりだけ見直した。

けど、現実は甘くないんだよな。

この時期っていったらもうある程度

バンドは組み上がってるだろうし

…仮に今組めても文化祭に出るのは

無理だろう。練習時間が足りない。

そんな中、意気消沈した顔の朝日が教室に入ってきた。

恐らく、メンバー集めがうまくいかなかったのだろう。

諦める…とは言えない。

あいつの…あの時のあの目は本気だったから。

情熱を宿した目…それが、俺とお前の違いなのか。

いつか、お前の弾いている姿も見てみたいもんだな。

「はあ…」

ため息ばかりついてんな俺。

だって人使い荒いんだもの。

うちのクラスの女子達。

何故に俺一人で備品の買い出しなんか

せにやならんのだか。

「もう無理、ちよい休憩。」

手近なベンチに腰掛ける。

もう夜じゃんかよ。

街灯がなけりや真つ暗だぞこれ。

「大体、準備期間が短すぎるんだよ…」

急に女子校と合同になるしき、実行委員

やらされるわ…挙げ句パシられるって…俺、前世で何かやらかしました…？」

誰か教えてクレメンス。

「何か、悩み事？」

「えっ？」

見上げると、どえれー美人さんがおった。

「星川優君…だよね？」

しかも…俺を知ってらっしやる!?

えっと…どちら様ですか？

思わぬ再会

考えろ、思考をフル回転させろ俺。

いつだ？いつ、こんな美人さんとフラグをおっ立てた？

よくやったと思う反面、心当たりがない

もどかしさも感じていた。

「ごめんね？急に話しかけて…私のこと、覚えてるかな？」

覚えてない…と言ってしまえばそれまで

だが…それでは格好がつかない。

思い出せ。知り合いはそう多くないはずだ…自分で言っていて悲しくなるけど…。

ギターだろうか？それともベースだろうか？楽器を背負ってるところを見ると

バンドをやってる人なんだろう。

…もしかして、ミュージックスクールに

通ってた頃の知り合いか？

だとしたら…

「あ…ああー！」

思い出した、思い出した。

そうだ、やっぱりミュージックスクール

時代の…いっつも俺の演奏を隅っこで

聞いていた子…名前は…

「もしかして、和奏レイ…さん？」

「うん、久しぶりだね、優君。」

こりや驚きだ。どれくらいべっぴんさんに

なったもんだ。

「いやーびっくりした…どこぞのモデルさんかと思いましたよ…」

「ふふ、そんなことないよ。」

初見の人は大学生かなんかと間違うと思う。

俺の「コ上とはとても思えん。

「優君、引越したって聞いたけど、また東京に？」

「ええ、3月の中頃に。」

「そっか、私と同じだね。」

「レイさんも？」

「うん、私も親の転勤で離れてただけど…春先にこつちに来たんだ。」

「へえ、そりやまた偶然。」

この人とは専攻も違ったし、話したことも数えるほどしかなかったけど何故か印象には残っていた。

「私、好きだったな。」

「えっ!？」

ちよ、なんて!?

ここにきて何かミングアウトしてるんですか貴方は!?

「優君の弾くギター。」

「ああ…」

びっくりしたわー。

まあ、そうですね。

勘違いですよね…すみません。

「今も続けてるの?」

「あー…今は…ちよつと…」

「そっか…」

レイさんは察してくれたのか、それ以上は聞いてくることもなかった。

そして、沈黙。

残念そうな顔を見ると少しばかり心苦しくなった。

「レイさんは?その背負ってるのって…」

話題を変えねば。

俺の話なんか聞いたところで何にもならんだろうし。

「ベース。始めたんだ。」

「映えますね、レイさんが背負うと。」

「そうかな？」

「ええ…バンド、組んでるんですか？」

「…うん、最近スカウトされてね…。」

「スカウト？」

すごいな…スカウトなんて創作の中の話

だと思ってたけど…本当にそんなことあるんだな。

「じゃ、練習帰りだ。」

「今日は違うんだ。バンドのサポート。」

サポートまでやってんのか。

「いいっすね、充実してて…」

「充実か…そうかも。」

あの頃とは違うんだな、この人も。

いや、根っこは変わっていないのかな。

「優君は？何か悩んでいるの？」

「え？」

「ため息、ついてたから。」

「別に、大したことじゃないんですけど…周囲との温度差に戸惑ってるっていうか…」

「温度差？」

「俺の通ってる高校にもバンドやってるって人達が結構いて…詳しくは知らないんですけどね、みんなたぶん全力なんです…」

「……」

真剣に聞いてくれている。

そういえば、誰かに感情を吐露するのなんて久しぶりな気がする。

吐き出した感情はあまりに

女々しく、弱々しいものだった。

「それに比べて俺は…何やってんだろうなって…」

「…悩んでるってことは一生懸命な証拠だよ。」

「そんなもんですかね？」

「うん…優君にも一生懸命になれるものはあったでしょ？」

「一生懸命…ね。」

「ギター…嫌いになっちゃった？」

「それは…」

わからない。

俺は奏でるのをやめた。

奏でるのを忘れた…つもりだった。

嫌いに…なったのだろうか？

…答えはやはり出ない。

「…バンド、楽しいですか？」

「まだわからない…かな？でもね、見えてくる景色は確実に違うものになると思うんだ。」

「見えてくる景色…ですか。」

「うん、まだ探り探りだけど…バンドの

フロントとして頑張っっていけたらなって…」

まったく…自己嫌悪が加速するだけだぜ…

そんな顔されちゃあさ…。

「いつか聞いてよ…私達のバンドの歌。」

「ええ、機会があれば。」

「ごめんね？ちよつと語っちゃったかな…。」

「とんでもない…おかげでちよつと楽になりました。」

「私も…励まされたから…優君の演奏で。」

「ええ…？あんなんですか？」

「うん。」

「そう…ですか…。」

わからんもんだな。

ただ、あの時のあの拙い演奏が誰かの力になっていたことは嬉しくもある。

「好きなものはそんな簡単に

嫌いになれないものだよ？」

「えっ？」

「それじゃ。」

「え、ええ…また。」

嫌いになれない…か。

俺にもくるのだろうか。

またあの頃のように。

ギターを奏でる…そんな日が。

5人の夢

「くっそー、あいつら…ここぞとばかりにこき使いやがって…」
文化祭の準備も本格的になり、今日も今日とて俺は肉体労働に励んでいた。

「頑張ってるねー!」

「ど、どうもです。」

花咲川の生徒も羽丘に出入りするようになり、度々声をかけられるようになった。

すんなり異性に話しかけられるコミュ力は羨ましくもある。

しかし、慣れねえ。

他校の生徒さんがいるつてのは。

せいぜいカオスな文化祭にならぬよう

祈るばかりである。

「俺は肉体派じゃないって何回言わせんだよ…ったく。」

「あ、ゆうー!」

「おー宇田川。」

「頑張ってるね!」

「まーなー。宇田川からも何とか言ってくれよ。あいつら、俺のことこき使いきすぎなんだよ。」

よく見ると隣には花咲川の生徒さんが。

知り合いだろうか?

「こ、こんにちは…」

「こんにちは…えっと、宇田川の知り合い?」

「うんー!りんりんだよ!」

ああ、この人が。

しかし、思ってたより全然イメージと

違う。

どんなはっちゃけた人物かと思えば…

蓋を開けてみれば大人しそうな優等生タイプの人だ。

「あの、いつもこの子がお世話になります。」

「いえ、そんな…あこちゃんにはいつも

助けてもらってますし…」

すぐく礼儀正しいな…俺なんかに敬語で。

良かったな…宇田川。

こんな人そうはいないぞ？

生徒会長ってタイプの人ではなさそうだけど。

日菜先輩には振り回されてんだろうな…

…御愁傷様です。

「じゃー俺行くな。」

「うん…またねー!」

もう夕暮れ時か。

あつちゆう間だな時間経つのがつて。

ちよつと休憩でもしようか。

座れる場所を探していると朝日を見かけた。

あいつ…俺がひーひー言ってる時に何を

やってんだ？

「んーと…なになに、バンドやりませんか？」

「あ、優君。」

「メンバー募集？」

「うん…」

まだやってたのか。

「仮に、集まったとして…文化祭には出るのか？」

「うん、そう思つとるんやけど…」

出る気なのか。

もう期間は一週間もないんだぞ？

と、そんな野暮なことを言うつもりはないが。

俺が口を出せることでもないしな。

「そーいや、ギターは？いつから弾いてるんだ？」

「えつと、中学校の時から。」

中学からか、結構やってたんだな。

「バンド組んだこととかは？」

「一応、地元では組んでたんやけど…」

「へー、あるのか。」

意外や意外。バンド経験があったとは。

「六花じゃん。」

「ん？」

「あ、リサ先輩。」

リサ先輩って…もしかしてRoseliaの？

楽器を背負ってるところをみると間違いなさそうだ。たぶん、ベ
スだろう。

「どうも。」

「あ、もしかして…星川優君？」

「え、ええ…そうです。」

あれ？何か認知されてるっぽい？

宇田川のやつが話したりしたのかな？

「あの…Roseliaの？」

「そ、アタシはRoseliaのベーシスト、今井リサ。よろしくね
！」

「ええ、よろしくです。」

見た感じギャルっぽい見た目の人だけど、不思議とイヤな感じはし
ない。どちらかというと面倒見のいいお姉さんといった印象を受け
た。

しかし、最近よく会うなー…ベーシストとかギタリストとか。

「六花はバンドメンバーの募集？」

「はい…けど、全然集まらんくて…」

「そっかー…ずっと探してるよね。」

「リサ先輩は、文化祭バンドの練習ですか？」

「うん。」

文化祭バンドね。

そういえばあったな。

羽丘、花咲川合同でバンド組むって話。

じゃあ、Roseliaとしては出ないのかな？

「Roseliaの皆さんは出ないんですか？」

少しばかり気になり、聞いてみる。

「うーん、出たいんだけどね…友希那…」

ウチのバンドのボーカルの子が真面目でさー…そういうのやらないんだ。」

「…なんていうか、ストイックっすね。」

「あはは、そうだねー。」

文化祭は絶好の機会だと思っただが…。

それとも何か他に目指しているものとかがあつたりするんだろうか？

「何か目標とかがあつたりするんですか？」

いかんなあ。

柄にもなくお喋りがすぎている気がする。

何故ここまで踏み込んだ質問をしたのだろうか。

リサ先輩は一瞬キョトンとした顔をしたが、すぐに表情は真剣なものへと変わる。

「うん、あるよ。」

そう、眩く様はどこか遠くを見ているようだった。

「FUTURE WORLD FES. (フューチャーワールドフェス) : : つていう大きなフェスがあつてね。」

「FUTURE WORLD FES. ですか。」

「うん、そのフェスにトップの成績で出場すること…それが、目標かな。対バン出るのも主催ライブも全部そのため。」

「なるほど…そのフェスのための通過点に過ぎないと…」

「まあ、そうなるかな…最初は友希那だけの夢だったんだけど…今は5人の夢。」

5人の夢か…。

それぞれが同じ目標を共有していると。

力強い眼差しだった。

ああ、この人は本気で夢を追いかけているんだなと…そう思わせるには十分だった。

「…何て語っちゃったかな？」

「いえ！素敵です！」

「即答かよ。」

そうか。

きつとたくさんしてきたんだろう。

挫折も…後悔も…葛藤も…：努力も。

それらに裏打ちされて今の Rosealia があるんだろう。

リサ先輩の言葉に触れて、なんとなくだが、それがわかった気がした。

『みんなー！文化祭バンドの公開リハやるよ！講堂までお・か・しだよー！押さない、駆けない、知らない人について行かない！』

押さないし、駆けないし、知らない人にもついて行かないからご安心を。どうやら、文化祭バンドの公開リハをやるらしい。

「日菜のやつ、リハとは聞いてたけど公開ってのは聞いてないぞー。」

「本当、自由っすよね…発想といいそれを実行する行動力といい。」

「あはは、ま、そっちのほうが面白そうだしいいじゃん？それじゃあねー！」

「は、はい！」

夢のためか。

まさか、そんな壮大な答えが返ってくるとは思わなかったなー。

「宇田川のやつがあればほど気に入る理由がわかった気がするわ。」

「うん…でらカツコいいわあ。」

「朝日は？」

「え？」

「どうして、バンドやりたいんだ？」

「私は…憧れのバンドさんがおって…」

ああいう風にキラキラしたいなって思ったの。」

キラキラねえ…。

そう言うお前の目だけはキラキラしてっけどな。

バンドに憧れてか、それがこいつのバンドをやりたい理由。まったく…眩しいったらありやしねえや。

「そんじや、そのためにもバンドメンバー集め、頑張らんな。」
「うん、頑張る！」

「お、おお…頑張れな。んじや。」
「え？リハは？」

「リハだろ？別に観なくてもええやんか…それに、頼まれごと終わつとらんしな。」

バンドなんて俺には縁のない世界だ。

音楽っていうのに人生の大半を尽くしたのは事実だが…何も残らなかつた…

いや、残つたのは虚しさ…虚無感だけだった。

ひたむきで真っ直ぐなその姿は、捻じ曲がった俺には眩しすぎる。

「始まるってー合同リハ！」

「お前ははしやぎすぎなんだよ！」

「えー、リハだよ！リハ！有咲だつて楽しみでしょ？」

「そりや、楽しみだけど…」

ん？

今聞き覚えのある声が…それに、ありさつて言ったか？

「いやいや、まさか…」

振り返るがもう誰もいない。

まさか…そんなことあり得るのか？

「まじで…？」

いるのか？

花咲川に？

あの『あーちゃん』が？

「ウソだろ？」

講堂に引き返すか？

いや、でも人違いだったら恥ずかしいし、大体世の中に何人ありさつて名前の人間がいるって話だよ。

「偶然…だよな？」

幼馴染

『今日の1位は水瓶座のあなたー！』

昔の顔馴染みと再会できるかも？

ラッキーアイテムは傘です！』

「雨、降ってねーけど。」

思いつきり晴れてるし。

…昔の顔馴染みと再会ね。

占いのほうはもしかすると、もしかするかもな。

「優、のんびりしていると学校遅れるよ。」

「ん。」

いよいよ、明日。

早いもんで文化祭の開幕前日となった。

「形になったもんだな…セッション

カフェも。」

揃えられた機材の数々。飾り付け。思えば初めてかもしれない。

こき使われたとはいえ、これほど頑張ったのは。

「いよいよか…」

「星川、明日は頼んだよー。」

「わーってるって。」

まったく、どこまでこき使えば気が済むんですかねえ。この子らは。

「お前らこそ頼んだぞ。セッション

しなきゃ始まらねんだからな。」

「わかってるって。」

しかし、楽器を構える姿はなかなか様になってるな。

あの朝日ですら少しばかり補正がかかって見える。それにしても…

「朝日、ヘッドレスギターって…ずいぶんマニアックなの使ってたんだ

な。」

「え、何？星川ってギター詳しくかったりするの？」

「へ？いや、そんなことねーけど。」

しまった…と思うがもう手遅れ。

つい、口をついて出ちゃった。

俺のあほ。ばか。おたんちん。

「常識だろ？そんなくらい。」

「うそー？知ってる風な口調だったけど？」

「ギターやってるの？」

「やってねーよ。」

くそ、水を得た魚のようにお前らは。

「とにかくだ、明日は頑張ろうぜ。」

これ以上喋ると更に墓穴を掘りそうだ。

なので、強引に話を打ち切る。

「どっか行くの？」

「外の空気吸ってくる。」

「はー…良い天気ですな。」

外は清々しいまでの晴れやかさであった。

いいねーこの空気。

至福だわー。

文化祭前日ということもあり、今日は簡単な仕上げ、謂わば最終
チェックの段階。

なので、予定としては比較的楽だ。

「頑張ったなあ…俺。」

うん、褒めてやりたいよ。今回ばかりは

頑張った。だからかな、文化祭を良いものにしたっていう気持ち
も出てきたのは。

「って、これからだよな。」

そんな時である。

独り呟く俺の前を見覚えのある姿が横切った。
やっぱり、間違いない…！

あの人は…

「ちよ、ちよっ…！」

声をかけようとしたがやめた。

このままじゃ、味気ない。

どうせなら何かドラマチックな劇的な再会を果たしたい。

しかし、何たる偶然か。

合同で文化祭をやることになった他校に

昔の幼馴染がいるとは。

「勿体ないなーせっかく作ったのに、捨てちゃうなんて…」

「仕方ないよー」

お？良いところに…おあつらえ向きなものが。

「それ、頂いてもいいですか？」

「え？いいけど。」

「すみません。」

手に入れたのは般若（？）のような顔をした

被り物。なんでこんなの作った？

それはさておき、これで驚かせてやろうって寸法だ。

待っててくれよ、あーちゃん。

すげーもん見せてやるから。

「あの一すみません。」

「はい…っつてうわあああつ!!」

はは、良いリアクションだ。

「ふ、不審者?! 曲者?! 変質者!!」

なんつー三段活用だよ、全部似たような

意味だし。あーウケるわ。

弄りがいがあるのは変わってねーな。

「そのどれでもないですよ。」

「いやー久しぶりですねって…あれ、ちよっ

…あれ?」

「……取れねえ。」

「すっぽりおさまっちゃまったのか?」

「ま、待ってる!今通報してやるから!」

「ちよ、通報はシャレにならない!先輩!俺ですよ!俺!」

「誰だよ!アンタみたい不審者に知り合いはいねー!」

「だって取れねーんですもん!ちよっとだけ時間くださいって!」

劇的な再会がカオスな再会へと変わった瞬間である。どっちもテンパって会話が噛み合わない。

「ほら!羽丘の制服!俺、羽丘の生徒!」

「羽丘は女子高だろ!下手な嘘つくな!」

「違うんですって!今年から変わったんですよ!」

ダメだ、このままではキリがない。

せつかくの再会が台無しだ。

…自業自得ってやつか。

「ああ、もう!昔よく遊んだじゃないですか!」

「…え?」

「覚えてませんか?あーちゃんって呼んでた子のこと。」

「お前…もしかして…優?」

あ、やつとわかってくれたかな。

「星川 優か!」

良かった。忘れ去られてたらどうしようかと。

「あつたりー…あーやつと取れた。」

「お前…何でこんなところにいるんだよ!」

「言つたつしよ?羽丘の生徒ですよ、俺。」

「そうじゃねえ!静岡に引っ越したんじゃねーのかよ?」

「まあ…色々とありまして…でも、びっくりしましたよ…先輩が花咲川にいただなんて。」

「そりや、こっちのセリフだ。」

「ですよー。」

「ま、なんだ…久しぶりだな。」

「ですね。」

占いってやつも案外当たるもんなんだな。

こうして幼馴染と再会できたわけだし。

「何か変な感じだな。お前に敬語使われるとき。」

「だって、俺らもう高校生ですよ？」

さすがにあーちゃんはまずいでしょ。」

同級生に上級生を渾名で呼ぶやつもいるがな。

「そうか…お前ももう高校生か。」

「これからは、市ヶ谷先輩って呼びますね。」

「…気持ちわりー。」

「何で!？」

「しかし、でかくなったなお前も。」

「そういう先輩は、その…あんまし変わってないですね。」

「余計なお世話だ。」

いや、でも…

「…成長はしてるか。」

「やっぱり通報するか？変態がいるって。」

「冗談です。」

やっぱり、俺も男だし視線が自然とそこにいくのには抗えないわけ

ですよ。

言ったら本当に通報されかねるので口には出さないが。

「…つといけね！これから生徒会なんだった!」

「生徒会？先輩がですか？」

「ああ、悪いな。これ以上お前には構ってらんねーんだ。」

「なんだー残念。」

「それじゃあな。」

「ええ。」

生徒会だなんて、いつの間にそんな…

成長したなあ。ちよつと涙腺が…

「あ、そうだ。」

「ん？」

「あのさ、優。」

「どうかしました？」

急に恥ずかしそうにして…

まさか…。

「愛の告白とか？」

「ねーよ。」

そんな速攻否定せんでもええやん…

「私さ、学校の友達同士でバンド組んでんだ。」

「バンド？」

先輩もかよ!?

みんなさあ、バンド組みすぎちやう？

それとも偶然？

「ああ、でさ、ウチら文化祭で演奏するんだよ。」

「え、演奏!？」

何それ。

絶対観るわそんなん。

「だから、その、お前にも観てほしいなって…」

「…何とかして最前列確保します。」

「いや、そこまではしなくていい。」

「そうか…バンドか…変わりましたね…先輩も。」

「そうか？」

「ええ。昔なら絶対考えられなかった。」

何だよ、俺の心配は杞憂だったわけか。

バンドか…あのあーちゃんが。

友達つくって、生徒会入って、バンドもやって…

俺の知らない間にちゃんと青春してんじゃないの。

この人もこの人で、前に進んでたんだな。

「止まっているのは俺だけか…ってな。」

「は？何か言ったか？」

「いえ…演奏、楽しみにしてますよ。」

「ああ、一応トリつてことになってるから。」

「トリですか…了解。」

「じゃあな。」

「じゃ、頑張ってくださいね。」

やべーと急ぐ先輩はどこか遠くの世界の人に見えた。誰よりも近い距離にいたはずなのに。

あの様子じゃ、バンドの人達ともうまくいってるのだろう。

「変われば変わるもんだな。」

成長を嬉しく思う反面、少し寂しくも思う。

「それに引き換え…俺は何をやったんだろうな。」

そう言いつつも心のどこかでは思ってるんだ。

もう、変わることはないのだと。

俺はこのまま、無気力に人生を消化していくのだと。

何かきっかけがほしい。

前に進むきっかけが。

何でもいい。

俺の人生観をひっくり返すような…そんな出来事が…起こってくれたりしないだろうか。

文化祭開幕

「今日は待ちに待った文化祭！みんなー！最高にるん♪ってしよーねー！」

「おおー！」

「盛り上がってますなー！」

始まった文化祭。

始まってしまった文化祭。

スタートの合図は鳴った。

あとはゴールまで突っ走るだけ。

「楽しんでなー！」

花咲川へと行く戸山、朝日、宇田川らを

見送り教室へと入る。

俺は初日からがつりシフト入ってるもんでね。

ま、展示なんて見て回るつもりはないけど。

っと最初のお客さんだ。

「よし、やるか。」

改めて気合いを入れ直す。

「星川、3番席にこれ持ってって！」

「りようかーい。」

「5番席、注文何だっけ？」

「アイスティー、抹茶ラテ、タピオカドリンクな。」

「ごめーん！終わったら入り口の受付事務お願い！」

「へいへい。」

何コレ。

客の入りが予想以上にやべえ。

正直パネえ。泣きそう。

肝心のセッション組のほうはは滞りなく

やってるようだ。さすがに楽器経験者揃いだけはあ。

「はあー、何とか落ち着いたかな。」

「休憩、入っていいよ。」

「おー、そうさせてもらうわ。」

「っていつても回るところとかないんだよな。」

「一緒に回るやつもないし。」

「ぼっちは辛いね。」

「大丈夫？」

「う、うん…ちよつとくらつとしたただけだから…」

「少し、休んだら？」

「大丈夫。」

「はあ、何で無茶するかねえ。」

「保健室、行つてこいよ。」

「え、でも…」

「俺が代わりに入るからさ。」

「休憩中でしょ？」

「いいから、暇でどうしようかと思つてたところだよ。連れてつてやつてくれ。」

「う、うん。」

「ごめんね。」

「いいつて言つてんだろ。こういう時ぐらひは男を見せさせろ。」

女子が無茶させて休憩なんかしてられるかつてんだ。

客入りも落ち着いてきたし、何とかなるだろ。

「星川ーあつちにも注文取つてきてー！」

「はいはい。」

「ごめーん！ー1番席の注文なんだっけ？」

「言うから復唱せーよ。」

「あの一すみません。」

「はいはい、何でしよう？」

「ごめん、何とかかないかも。」

普段の運動不足のツケが回つてきたか。

あいにくと気合いとか根性とかいう便利なものは俺の中には搭載されてねえ。

けれど乗りきらなければ。文化祭のトリを飾る幼馴染のバンドの演奏のためにも。

ここで燃え尽きるわけにはいかない。

「も、燃え尽きた…。」

「お疲れー。」

「助かったよー本当に。」

「…終わったんだな。」

「うん、明日は星川のシフト無しにするってみんなで決めたから、文化祭楽しんできなよ！」

「いつの間に…。」

「まったく、いらん気遣いしやがって。」

けど、せつかくのこいつらの厚意を無下にもできないし、お言葉に甘えておきますか。

ともかく、1日目終了。

「ゆうー！お疲れー！」

戸山達も戻ってきたようだ。

「おー、お前ら楽しんでできたか？」

「うん！楽しかったよー！」

「明日は頼んだぞ。」

「ふっふっふ…よかろう、この大魔姫あここに任せるがよい！」

「優、だいぶ疲れてるね。」

「体中ガツタガタだわ。」

ともかく明日はフリー。

先輩のバンドの番まで適当に時間潰すでしょう。

しかし、2日目波乱の文化祭となることをこの時の俺はまだ知らない。

アイドル×女優×おねーちゃん

文化祭も2日目。

俺は空いた時間をどう潰すか思案していた。

「シフト入ってないっていつても、回る

ところもないんだよな。」

花咲川にでも行くか？

でも知り合いとかないし…

市ヶ谷先輩は生徒会で忙しいだろうし…

さて、どうすっかな。

「Aftergrow、ライブやるんだって！」

「いいね！行こう！」

丁度よく耳寄りな情報が。行ってみるか？

「あ、優君！」

おっと？いきなり氷川ラスボス日菜と遭遇して

しまった。

たたかうとにげるってコマンドは

存在しないけどな。つまりは無理ゲー。

「今からおねーちゃんのとこ行くんだけど、優君も行く？」

「いや、俺は…」

「決まり！行こ！」

「だと思った。」

強制イベントだものね。

そりゃ、まあ、こうなるよね。

はいはい。わかってましたよ。

遂に、ご対面か…氷川姉。

「おねーちゃんー！」

「ちよ、何も走ることないっしょー！」

「こっちは全身筋肉痛なんだっつーの。」

「あ、日菜ちゃん。」

「花音ちゃん！おねーちゃんいる？」

「う、うん。」

「つ、疲れたー…」

「ふええー!!」

「ふええー!?!?ってそんな怖がらんでも…」

「どうしたの花音…って貴方、大丈夫？」

「は、はい…何とか。」

「やつほー！千聖ちゃん。」

「え？」

「千聖ちゃんって…白鷺千聖さん!?!」

「この人、花咲川の生徒だったのかよ…」

「初耳なんですけど。こりやさすがにびっくり。」

「日菜ちゃん？駄目じゃない、無理矢理」

「連れてきちゃ。」

「えー!」

「えー!じゃないわ。」

「ほぼ引き摺り回されてたからな？」

「こっちは。」

「ごめんなさいね？日菜ちゃんに無理矢理連れて来られたんでしよう？」

「あ、いえ…」

「董色の引き込まれそうな瞳が俺を」

「覗き込む。」

「やべえ、今俺は女優さんと会話をしているのか。」

「普通にテンパるわ。」

「すみません…うちの日菜がご迷惑を。」

「え？」

「声のしたほうへ向き直ると、日菜先輩と」

「瓜二つの顔があった。いや、瓜二つなんて」

レベルじゃない。

制服取っ替えてもわからないレベルだ。

この人が、紗夜さんか。

「また貴方は…大体、生徒会の仕事はどうしたの？」

えっと…何か俺が抱いていたイメージと

全然違うんだが。

というか真逆…品行方正といった感じが

正しいか。

下級生の俺にも敬語を使う辺り、育ちの

良さが伺える。

日菜先輩…一体どこで間違えた？

「もう大体終わらせてあるし、いいじゃん！」

「そういう問題ではないでしょう。」

「あ、この子優君！あこちゃんと同じクラスなんだよ！」

お姉さん…貴方でも無理なんですね…

この人の制御は。

「終わったら一緒に回ろーね！」

「はあ…」

本当に好きなんだな、姉のことが。

この年代の兄弟姉妹つーのはもつとこう、ギスギスした感じだっ

てのが常識だろうに。

この人もこの人で、ちよつと特殊なだけで

本質は真っ直ぐだからな。

俺には兄弟姉妹はいないけど、こういう

やり取りもいいのかもしいれないなとほんの

少しばかり思ってしまった。

展示のテーマは花女の歴史。

正直言うとかつそつまんねえ。

今すぐにも夢の世界へいきたいぐらいだ。

しかし、この二人が醸し出す圧力が

半端なくやばいので寝るに寝られない。

何かオーラ見えてね？俺だけ？

結局、解放されたのは一時間ほど

経ってからであった。

何か授業受けた気分。

「えー！一緒に回ろって言ったじゃーん！」

「風紀委員の仕事があるの。貴方も

生徒会長でしよう？白金さんばかりに

任せてはダメよ。」

ぐうの音も出ないほどの正論。

俺もそう思うわ。

日菜先輩、もうちよつと自分の立場を考えてな。

「もしかしたら、つぐ先輩があたふたしてるかもですよ？」

「そっかー仕方ないかー。優君は？」

「せっかく来たんで、俺はもうちよつと回ってみます。」

「わかったよー！じゃあねー！」

台風みたいだなー本当に。

「自由ですねー。」

「ええ、自由すぎです。もう少し周りを

顧みてくれると嬉しいのですが…」

そこはまあ、同意。

「あの人、いつもお姉さんの話ばかりしてて、よく俺も聞かされるんです。」

「そう、ですか。」

何だかんだで照れ臭そうな顔をしている。

真面目そうな印象を受けたが、やはりそこは姉妹なんだなと一人ながら納得した。

紗夜先輩と別れ、別の展示などを見て回ったが、特にこれといったものはなかった。

時間もそれなりに過ぎたことだし、羽丘に戻るか。

あいつらちゃんとやってんのかも気になるしな。

あつたはずの青春

中学の頃は文化祭というものにはそれほど思い入れはなかった。友達と呼べる存在もいなかったし、俺自身どうでもいいと感じていた部分もあつたから。だから、思い出なんか何も無い。

『優も、ギター弾けば?』

そう、何もなかった。

『せっかくの文化祭だよ? 私も歌うからさ!』

だから、やめろ。

忘れろ。

思い起こすな。

それはお前なんか思い起こしていい記憶じゃない。永遠に記憶の奥底に閉じ込めておくモノだ。

『一緒にやろうよ!』

くそつ、何でだよ?

何で今更になつて――

「優?」

「…え?」

戸山の心配そうな声が俺を現実へと引き戻した。

「凄く怖い顔してたけど、具合でも悪いの?」

「あ、ああ…ちよつと、腹痛くてな…」

「大丈夫?」

「大したことねーって。それよりほら、姉ちゃんには会えたのか?」

「うん。うちのクラスに来たよ。」

「へー、良かったな。」

うまく、誤魔化せたか?

にしてもそんな顔してたのか…俺。

「そっかいや、戸山の言ったこと、当たってたわ。」

「当たってたって?」

「幼馴染がさ、花咲川にいたんだよ。」

「へえー、偶然だね。」

「生徒会やってるみたいで忙しそうだったけどな…」

「でも、良かったじゃん。」

「まーな。あ、それからバンド組んで、文化祭で演奏するって言うってたな。」

「バンド? 何て名前?」

「やべ: 聞き忘れた。」

「: ダメじゃん。」

でも、トリって言うてたし、プログラム

見りやわかるかな。

「あつたあつた。えーつと: ポツピン:

パーティー…?」

何だか随分とかわいらしい名前だな。

「え、ポピパ!」

「ポ、ポピ?」

どうした? 戸山。急に変な呪文唱えて。

お前だけはバグらないと信じていたのに。

「: その人の名前って?」

「ん? 市ヶ谷 有咲って人。ピアノが

これまたお上手なのよ。」

「市ヶ谷さん!」

なんだよ、リアクションでかいな今日は。

文化祭でテンション上がってるのはわかるけどさあ。

「知ってるの?」

「: お姉ちゃんの友達。」

「うそお!」

…そうだったのかよ。

まさかまさかの繋がり。

しかし、あの堅物不器用ツンデレはそう

簡単には他人に心を開かないはずなんだが…実際俺も最初は苦労したし。一体どうやって攻略したんだ？

「市ヶ谷さんと幼馴染だったんだ。」

「うん。でも、変わったなあ…」

生徒会やったり、バンドやったり…」

「昔の市ヶ谷さんってどんな人だったの？」

「人見知り…で、泣き虫。いつも優君、

優君って後ろひっついて来てたな。」

「へえー、意外。面倒見の良いお姉さんって感じだったから。」

「あの人が？」

「うん。」

そうなのか。

そつちのが意外だけど。

にわかには信じられん。

「いつの間にか俺の口調が移って、言葉使いも乱暴になってき、名前も呼び捨てになったりしたけど…俺が引越すってなった時はそりやもう泣きまくって大変だったな。」

「ふーん…でも、本当に良かったね。」

また会えて。」

「…だな。」

運命なんてのは信じないけどな。

運命論者でもロマンチストでもねーし。

「なんにせよ、良かったよ。元気そうで。青春してんなーって感じ？」

「おじさんくさいね…優はしてないの？」

「俺？俺はそういう柄じゃねーよ。」

そんな資格もないしな。

俺はそんなキレイな人間じゃないんだよ。

お前らと同じステージに立って青春を謳歌するなんてのは許され
ない。

あつてはならないんだ。

俺は、一人の少女のあつたはずの青春を
引き裂いた——最低最悪な男だから。

心を震わせる音

思えば初めてのことだったのかもしれない。
他人のギターの演奏に魅せられたのは。

ぶっ飛んだ演奏をしたとあるギタリスト。

…それは俺が知るどんなに有名で、どんなに偉大なギタリストよりも輝いて見えた。

俺は、あの時のあの演奏を…

一生忘れることはないと思う。

合同文化祭も終盤。

羽丘・花咲川の合同バンドの演奏が始まろうとしていた。

バンドメンバーは見知った顔が多かった。

つぐ先輩にリサ先輩、モカちゃん先輩。

あとは…ふええー!? って言ってた人。

名前は知らないが。

「みんなー? まだまだいけますかー?」

今、司会進行をしているボーカルであろう

ピンク髪の人もどつかで見たことは

あるんだよなあ…どこだったっけ?

考えていると、演奏が始まった。

バイトする人への応援エールソングらしいのだが…思ったよりもちゃんとバンドしている。

ていうか、普通に上手い。

練習時間もそうはなかっただろうに

息もぴつたりと合っている。

何よりも皆、楽しそうに演奏している。

「高校最後の文化祭で、最高の思い出が作れました！皆さん！」

ありがとうございます！」

もう終わりか、あつという間だったな。

最高の思い出ね…

良かったな、ピンク髪のボーカルさんよ。

あなたの歌もなかなかのもんだったよ。

「さて、次はいよいよこのバンド！」

トリを務めるのは結成一周年の…」

きた。

市ヶ谷先輩の晴れ舞台。

何だかこつちが緊張してきた。

「え…」

どうした？

ボーカルの人、急にフリーズしたけど。

「ええーっ!?!」

どうしたんだよ。

急にテンパリ始めたぞこの人。

「えと、一周年で…一周年はー365日で…

つまり、えーつと…」

それどころかバグリ始めた!?

大丈夫か？

「頑張れー！彩ちゃん！」

そうだ、頑張れよ。

彩ちゃんとやら。

高校最後の文化祭なんだろう？

グダグダで終わる気か？

「それじゃあ、一周年繋がり綿菓子屋

さんの話をしようかなーと…」

「いや、何でだよ!?!」

全然関係ねーじゃん。

思わずツッコんじまったわ。

「つて、あれ？」

あそこにいるのって…朝日？

そうだ、間違いない。

いつの間にか壇上には朝日の姿があった。

あいつ…あんなところで何やってんだ？

「羽丘一年！朝日 六花です！」

「え？」

あ、朝日さん…？

ギターを持って何をする気？

まさか…演奏する気じゃ…？

「ギターを弾きます！」

「はあ？」

そのまさかかよ!?

バンド組めなかったから悔しかったのか？

…どうなつても知らねーぞ？

しかし、そんな心配はすぐに吹き飛んだ。

いや…吹き飛ばされた。

朝日 六花の演奏に。

「…嘘だろ…!？」

思わず声が出た。

俺は、その姿から目が離せなかった。

あいつのギターを奏でる姿は

普段のあいつとはまるで別人で

俺はその演奏に

朝日 六花の演奏に――

「すげえ…」

――心を奪われた。

歓声で我にかえった。

誰もが朝日の演奏を称賛していた。

これは…何だ？

沸き上がるこの得体の知れない感情は…

一体何なんだ？

すげえよ…お前。

聞こえるだろ？

これ、全部お前に向けての歓声なんだぜ？

なあ、朝日？

お前は今…どんな気分なんだ？

そこからは、どんな景色が見えているんだ？

「アンコール…アンコール！」

あ、パニックになって、目回してたわ。

いつものあいつだ。

何も見えてなかったな。

歓声の中、ドラムの音が鳴り響く。

「宇田川？」

お前までどうした？

ここぞとばかりにはつちやけるつもりか？

それに、生徒会長のりんりんさんまでいる。

「もしかして、Roseliaが演奏するの!？」

「マジ!? ヤバくない!？」

Roseliaが!？」

待て待て、一旦整理させてくれよ。

頭が状況についていってないからさ。

続いてリサ先輩が出てきた。

それから、紗夜先輩に：あの人は：湊さん？

：そういうことかよ。

ゆきなつて湊さん：あんたのことだったのか。

それにしても、次は市ヶ谷先輩のバンドの番じやなかったのか？

これは、サプライズ的な感じ？

サプライズライブ？

何か語呂いいな。

「誰か、ギターを！」

紗夜先輩、ギターを持ってないってことは

演奏する予定はなかったってことか？

てことはサプライズってわけでもないのか。

一体どういことだ？

「おねーちゃん！使って！」

日菜先輩？

何でギターなんか持って来てんだよ。

「日菜先輩、これって…」

「おねーちゃん達、演奏するんだよ！

優君も一緒に観よ！」

「いや、あの…」

「少しだけ、私達にも付き合ってもらえる？」
湊さんがマイク越しにカツコいい口上を
述べる。

その瞬間、割れんばかりの歓声があがる。
人気すげえな…！

改めてRoseliaの知名度の凄さを思い知る。
しかし、ちよūdい機会だ。

Roseliaさんのお手並み拝見といきますか。

「友希那ー！」

「友希那さぁーん!!」

「カツコいいー!!」

どうでもいいけど、落ち着け君達。

「おねえちゃあぁん!!」

あんたも落ち着けな。

蒼いスポットライトに照らされ、それが
合図となり演奏が開始される。

そして、すぐに思い知る。

Roseliaの凄さを。

「…何コレ？」

開いた口が塞がらんのだけでも。

いや、ヤバくない？

この人達プロの方々？

俺視点だとプロと遜色ない演奏なんです。

Roseliaの奏でる演奏に、その一体感に俺は圧倒されてい
た。

宇田川ごめん。

お前にドラムは無理だと思ってた。

鼻で笑ってた。

めちやくちや叩けてるやん。

めちやくちや楽しそうやん。

白金さん…だっけ？

…俺、結構ピアノ関連にはうるさいんだけどね、満点をあげたいぐらい。

淀みない指づかいをしていらっしやる。

リサ先輩。

イケイケって感じ。

ギヤルにベースっていう新ジャンル。

当然ながら上手い。

で、湊友希那さん。

透き通るようで力強いその歌声はなるほど、Roseliaの知名度も頷けるほどの完成度。

さつきからコメントが良くわからない感じになってるのは申し訳ない。

そして、紗夜先輩。

恐ろしいほどに正確なストローク。

ストロークというのは常に一定の動作を

求められるものなのだが…

いや、それにしても正確すぎるだろ。

「たくさん、練習してきたんだろうな…」

わかった…わかってしまった。

何十回、それこそ何百回と…ギターを

弾かなきゃあんな演奏はできない。

そして、それは紗夜先輩に限った話ではないのだろう。

努力という言葉が霞むほどの研鑽を経て、今あの場所に立っている。

「これが…Roselia（ロゼリア）か…」

その凄さに、周囲の熱気に俺は圧倒されるばかりであった。

演奏が終わっても、熱は冷めることはなかった。
そして、羽丘・花咲川の合同文化祭は終わりを迎えた。
待ちに待ったバンドの演奏は：始まらぬまま。

もうお前とは

「はあ…」

『羽丘一年！朝日 六花です！』

まだ、あの音が脳裏に焼きついていて
頭から離れない。

「朝日 六花…」

つたく、とんでもねーことしてくれやがって…
おかげで感情がごちゃ混ぜになって
自分でも訳がわからなくなっている。

「あー！何なんだよもう…」

あてられたってのか？

あいつの演奏に？

同じギターリストとして。

あるわけがない。

大体、俺はもうギターリストじゃない。

「優？さつきから何騒いでんの？」

「ああ、わりい母ちゃん。」

でも、いきなり入ってくんなの。

「何か悩み？もしかして、恋とか？」

「…かもしんねえ。」

「えっ!?あんたが!?!」

「冗談だよ。真に受けんなって。」

これが恋であってたまるか。

「びっくりしたあ。」

そんなびっくりすることか？

あんたは、実の息子を何だと

思ってるんだよ。

悔しがつとけ、そこは。

「とりあえず風呂沸かしといたから、今日はさっぱりして寝なさい。」
「そうする。」

「皆さん、ありがとうございますーございましたー」

後夜祭。

白金生徒会長が締め挨拶を行っていた。

「それでは…乾杯…!」

「かんぱーい!!」

色々あったけど、無事に終わって良かった。

一つだけ、心残りはあるが。

市ヶ谷先輩…いねーな。

やつぱ、シヨック受けてんのかな。

ライブ…できなかつたんだもんなあ。

日菜先輩曰く、Poppin, Partyのギターの人が別の場所
でライブをしていたらしく

それが押してこつちに來るのが遅れたらしい。

残念ではあったが、やはり今はそれ以上に先輩が心配だ。

「星川！乾杯の音頭とつてよ。」

「は？今さっきしたろ。ていうか俺？」

「うん。一番頑張ってくれてたから。」

「ありがとう。」

「星川のおかげだよ。」

お前らなあ…

「ずるいよなあ、女子ってやつはよ…」

これじゃ、こき使われたこと怒るに怒れないじゃねーかよ。

「ま、悪くはなかったかな。」

「そこは、楽しかったでいいじゃん。」

「ホント、ツンデレだよな。」

「ちげーよ！ほら、アホなこと言っていないで、乾杯すんぞ。」

…ああ、確かにそれなりに楽しかったよ。

そこは認めるよ。

口には絶対出さねーけどな！

「そんじゃ、羽丘・花咲川合同文化祭の
成功を祝って——かんぱーい。」

「かんぱーい！」

俺には思い出を作る資格なんかない。

でも今だけは浸らせてくれ。

この想いはなかったことにしたくはない。
終わるのが寂しいだなんて思ったのは…

これが初めてだから。

「はー染みるわあ…」

良い湯だ。

このまま寝落ちしそう。

それにしても…元気なかったな、あいつ。

あんだだけの演奏かましたってのに、朝日のやつどこか浮かない顔を
していた。

結局、声をかけることはできなかった。

って恋する乙女か…俺は。

「何であんなにあいつのことばっか気にしてんだ…」

…本当に恋してんのか？

いや、ないない。

ありえない。

そんなことは。

けど、今一番気になるのはP o p p i n , P a r t yよりも…あ
い
つ
なんだよなあ。

本当に、どうしちまったんだか。

今日はもう寝よう。

先輩は近々励ましにでも行つてやるとするか。

というか、連絡先聞き忘れてたな。

「はあ…」

明日になれば、また普通の日常か。

『ギターを弾きます！』

いきなりステージに乱入して、弾いた曲がまさかの俺の好きなロックミュージシャンの曲とは…ホントにおもしろいな、あいつは。

「ごめんな…相棒。」

そんなところに閉じ込めて。

思えばお前は俺がランドセル背負う前からいたんだよな。

親父を抜かすためにがむしやらに頑張つたよな。

幼馴染に褒められたくて一生懸命やったよな。

いつだって俺の傍にいてくれたよな。

「楽しかったよな。」

お前は悪くないんだよ。

悪いのは、俺だ。

「ごめんな。」

俺はもうお前とは一緒に演奏できないんだ。

黄昏ブラックコーヒー

合同文化祭も無事に終わり、学校はいつも通りの日常を取り戻した。

「川君：星川君。」

「あ、はい。」

「聞いてなかったんですか？この問題の

答えは？」

「：聞いてなかったです、すみません。」

「期末試験も近づいてますから、気を抜かないように。」

「へーい。」

「返事はしつかりと。」

「はい。」

俺はというと、この有り様である。

どうにもエンジンがかからない。

文化祭で燃料を使いきっちゃまったのだろうか？

「来年はうちらも演奏しようよー！」

「そうだねー！」

もう、来年の話してるよ。

でも、来年はさすがに合同じゃないと思うけどな。

日菜先輩も卒業するし。

「朝日さん、ホントに凄かったよね！」

「あれ、何て曲なんだろう？」

凄かったなんてモンじゃねえ。

明らかにあれは高校生のレベルを超越していた。

しかも、恐らく即興での演奏だろう。

あの影響で羽丘ひいては花咲川での注目度も高まったはずだ。

：しかしながら、当の本人は何か元気がない。

何かあったのか？

「苦つ…。」

カッコつけてブラックコーヒーをチョイスしたのが間違いだった。ベンチで優雅にブラックを飲み佇む大人な優君を演じてみたかったが、失敗に終わる。

くそダセエことこの上ない。

「どうしたのー?」

「あ、リサ先輩。」

「やつほー☆」

声をかけてきたのはリサ先輩。

相変わらぬ安心と信頼のギャルっぷりである。

これ、褒め言葉な。

「優、何だか元気ないじゃん。」

「ちよつと…文化祭気分が抜けきらないっていうか…」

「あはは!わかるわかるー!だよねー…」

「アタシもだよ。」

まったくそうは見えないんですが…

「…凄かったです。Roseliaの演奏。」

「ん、ありがと。」

「想像以上だった…見事に圧倒されましたよ。」

「照れちやうなー…そこまで褒められるとき。」

主催ライブ、観に行けば良かったかもしれないと今さらながらに後悔する。

「優は?楽器とかやってたりしないの?」

「俺は…今はやってないです。」

「今はってことは…昔はやってたんだ?」

どーしてこう口を滑らせちやうかなあ…

俺は。

「…ギターを…一応。」

「へえーそうなんだー!優、ギタリストだったんだ。」

「昔の話っすよ、昔の…今は違います。」

「…そっかー。」

…気を遣わせちまったかな。

何だか申し訳ない。

「でも、昨日のあいつの…朝日の演奏を

聞いてから何かおかしくって…」

「凄かったよねー！アタシもびっくりしちやった。」

「自分でも訳がわかんなくて…ギターはやめたはずなのに…この感情は何なんだろうって…」

「…きつとき、優はギターがやりたいんだよ。」

「俺が…ギターを？」

否定は…できない。

どこまでいっても、たとえ腐っても俺は

ギタリスト…ってことだろうか？

「アタシもさ、一回ベースやめてるんだ。」

「え…そうだったんですか？」

「うん、ブランクあるから…技術も経験もRoseliaで一番劣ってるのはアタシなんだよねー。」

「そんなことは…」

「…ありがと、優しいね優は。」

そうか。

挫折から何が原因かはわからないがこの人も…

「…どうして、またベースを？」

「それは、友希那のため…かな？」

「湊さん？」

「うん。アタシと友希那って幼馴染でさ、昔からよく一緒に遊んでたんだけど…いつからか友希那、全然笑わなくなっちゃって…」

幼馴染のため…か。

「だから、アタシがRoseliaで演奏するのは友希那の笑顔をもう一度見るためでもあるんだよね。」

「なるほど。」

「ごめんね、また語っちゃったかな？」

「いえ、わかりますよ…俺も、幼馴染に

褒められたくってギターやってたクチですから。」

「そうなんだ。」

「今は花咲川でバンド組んでて、昨日も

演奏するはずだったんですけどね…残念ながらトラブったみたいで…」

「え、幼馴染ってポピパにいるの？」

ポピパって…P o p p i n , P a r t y の略称か…ようやくわかったわ。

「市ヶ谷 有咲って先輩なんですけど…」

「有咲？優と有咲って幼馴染だったんだ！」

「え、ええ。もしかして、知ってます？」

「知ってるよー。アタシ達の主催ライブにも出てくれたんだ。」
「へ？」

主催ライブに出た!?

P o p p i n , P a r t y が!?

それ…それ…早く言ってくれよ…。

「うわあ…じゃあ尚更行けば良かった…」

「あはは、残念だったねー。でも、近い内にポピパも主催ライブやるって言ってたよ。」

「え、まじですか!？」

「うん、アタシ達も呼ばれたんだよねー

ゲストとしてさ。」

あの人…何でそんな大事なこと言わなかったんだよ。

主催ライブだなんて。

一大ビッグイベントじゃねーか。

「じゃあ今はその主催ライブに向けて練習してるんですか？」

「うん、セトリとか衣装とかあと新曲も作ってるんだ♪」

「新曲か、良いですね。」

「でも、ちよつと心配なんだよね…」

「心配？」

「主催ライブがあつた日にき、友希那が

ポピパのみんなに言ったんだよね…

『主催ライブをする覚悟が足りていない』ってさ…」

そりやまた、手厳しいなあ…湊さん。

Poppin' Partyの皆さんも、あの演奏の

クオリティを見せつけられただろうから

何とも言えんわな。

「覚悟か。」

耳が痛い話だな。

結局、俺は未練たらたらだつたつてことか。

断ち切る覚悟が足りていなかった。

だから、揺らいでいるんだ。

心のどこかで燻りがあつたんだ。

「強いですね。湊さんは…リサ先輩も。」

「アタシ？そんなことないよー。」

「ありますよ。また立ち上がったじゃないですか…先輩は。」

「優は？もう一度やってみればイイじゃん。」

「俺は、そんな資格ないんです。」

「資格？」

「何より、あいつに申し訳がたたないんで…」

「…ごめん、何か無神経だったね、

アタシ。」

「いやいや！悪いのは俺の方ですよ。何かすみません、湿っぽくしちゃつて。」

罪悪感が半端ねえ。

誰もこんな女々しい野郎の言うことなんか聞きたくねえつつうんだよな。

「可愛い後輩の悩みを聞くのも先輩の役目じゃん？」

「可愛い後輩なんですか？俺も。」

「あはは！そうに決まつてんじやーん！」

「そうですか…じゃあ、また相談してもいいですか？」

「もちろん☆」

優しいですね、リサ先輩は。

下手したら惚れてんぞ。

「それじゃあ、またね！」

「練習、頑張ってください。」

俺も帰るかね。

立ち上がり、残ったブラックを飲み干す。

「やっぱり、苦い…」

やっぱり、人間背伸びなんてするもんじゃねーな。

幼馴染の不安

文化祭も終わり、何だかんだで一週間。落ち着くかと思いきや、期末試験まであと二週間ちよいつていうね…

本当に退屈しない所だな、ここは。

中間試験は慈悲深き戸山様のおかげで赤点は免れたが（ギリギリ）今回はさすがに自力で何とかしないとイケない。

夏休み補習とかさすがにやってられないんでな。

それもあるが、そろそろ市ヶ谷先輩の所にも顔を出さないと。あの時はバタバタしてて話も全然できなかつたし…主催ライブとやら のことも聞きたい。

夕飯の買い物がてらちよいと遠出して行ってみるとするか。

「久々だなーここに来るのも。」

てなわけで、やって来ました市ヶ谷家。

一体何年振りだろうかね？

「いらつしやい…おや？」

「どうもー…」

祖母の万実さん、全然変わってないなー。

何だか安心する。

この人の作る卵焼きがこれまた美味しいんだ。

「もしかして、優君かい？」

「はい、ご無沙汰してます。」

「大きくなつたね、有咲に用かい？」

「ええ、まあ…そんなところです。」

「ごめんね、有咲、今来客中で…」

「ありや、そうですか。」

なるほど…じゃあ仕方がないか。

後日、出直すとするかな。

「買い物がてら寄っただけなので、出直しますね。」

「ごめんね。」

「いえいえ、連絡もせずに来たんで、お構い無く。」

友達とでも遊んでんのかな？

でも、来客って言い方はしないか…

まあいいや。

「…つたく、何でいつも低脂肪牛乳だよ…

たまには普通のも飲みたいっての…」

我が家の母親の謎のこだわりである。

別にどつちでも変わらないと思うけど。

「うーん、迷うな…」

肉じゃがにすっか、カレーにするか。

どちらも捨てがたい…

「家にカレー粉あったっけか…いや、待てよ…ここはあえて…」

「優。」

「っ!？」

い、市ヶ谷先輩か…びっくりしたなあ。

ってあれ? どうして?

「婆ちゃんからお前が来てたって聞いたからさ、待ってりや会えると
思っ…」

って買い物帰りか?」

え、律儀に待っててくれたの?

何て良い子。

「来客中って聞いたんで、後日出直そうとしてたんですけど…もう用
は済んだんですか?」

「…ああ。」

「じゃあ、ちよつと話でもしませんか?」

「でもお前、買い物帰りじゃ…」

「大丈夫ですよ。母親が腹すかせるだけなんで。」

「いや、大丈夫じゃねーだろ。」

「先輩と話す時間のほうが大事だし。」

「つたく、相変わらずだなお前は。」

再会した時は大して話せなかったからな。

主に俺のせいだけど。

「…悪かったな。」

「どうして謝るんです?」

「いや、バンドの演奏するからってお前に言ったのに、できなかったわけだし…」

「別に、誰が悪いつて話でもないんでしょ?仕方ないことじゃないですか。」

「…まあ」

「それよりも、近い内に主催ライブってのやるんでしょ?どうして言ってくれなかったんですか?」

「ああ…悪い、言い忘れてた。」

何だろ?

さつきからどうにも歯切れが悪いな。

「…何かあったんですか?」

「え?」

「どうにも、元気がないように見えるから…」

「そうか?そんなことは…ねーけど…」

相変わらずはあなたもだよ。

隠すのが下手だ。

そんなんじやバレバレだよ。

離れてたとはいえ伊達に幼馴染やってねーよ先輩。

「バンドの人達とケンカしちやったりとか?」

「…ケンカつてわけじゃねーけど…」

何かはあったということか。

「良かったら話してくださいよ。少しは楽になるかもですよ?」

「……………」

「第一、幼馴染がへこんでんのは見過ごせねーし。」

「幼馴染か…お前、和奏レイって覚えてるか？」

レイさん？

同じスクールには通ってたけど、この二人って接点あったっけ？

「レイさんなら、この前会いましたよ。」

めちやくちや美人になつてて初見じゃわかんなかったんですけどね。」

「や、そこまでは聞いてねーよ…」

「そういや、バンドにスカウトされたって言ってたな。」

「…その、和奏レイがウチらのバンドのギターのやつと幼馴染でさ、それでその和奏レイのバンドのサポートに入ってたんだよ。」

なるほど…それで文化祭には間に合わなかったのか。

しかし、幼馴染ねえ…何かイヤな予感がするな。

「先輩、さっきの来客って…もしかして？」

「…バンドのプロデューサーが来たんだよ。ポピパのみんなにも集まってもらってさっきまで話してた。」

「プロデューサー？」

プロデューサーって…

何か胡散臭いな。

「おたえ…ウチのバンドのギターをくださいって…」

「はあ？スカウトってことすか？」

「…うん。」

プロデューサーか何か知らんが、滅茶苦茶なヤツもいたもんだな。要は引き抜きってことじゃねーか。

「で、先輩方は何て返事を？」

「とりあえず、主催ライブが終わるまでは向こうが待つって話になったんだよ。」

おいおいおい。

俺が予想してたよりもずっと重い話

じゃねーかよ。

てか、これ…俺じゃどうにもならんくね？

プロデューサー引き摺り回して諦めさせるしか手段ねーぞ？

「ライブも観に行っただけど、すげーレベル高かった。」

「ライブ、あつたんですか？」

「ああ、ウチらのギターのやつもまるで別人みてーでさ…」

サポートで呼ばれるくらいだから、相応の腕はあるんだろう。ギターってのはバンドの花形とも言われているから…腕が良いとなれば尚更需要も高まる。

「そつちで演奏するほうが、そいつの為にもなるんじゃないかって…」
きつとそのギターの人も揺れているんだろう。

過去の幼馴染か、今か。

気持ちはわからないでもない。

同じ立場だったら、俺も迷うと思うし。

それぐらい幼馴染って存在は大きいもんだ。

「先輩自身の気持ちは？その人になくなってほしいんですか？」

「そんなわけねーだろ！」

「だったらもう答えは決まってるじゃないですか。引き留めるべきですよ。」

「そんな簡単な話じゃ…」

「居てほしいんですよ？なら、言うべきですよ。本人に直接。」

「…そういう…もんか？」

「ええ、でないと後悔しますよ。言えるうちに言っとかないと…言いたくても言えなくなっちゃまう。」

「…優。」

「バンド楽しいんでしょ？もうちよつと

素直になんなさいよ。」

「は、何だそりゃ…」

良かった、ちよつと笑ってくれた。

やっぱりこの人には笑っててくれないと。

沈んでるのは似合わねーよ。

「そっだよな…」

「偉そうなこと言いましたが、俺自身バンド組んだ経験ないんでこれ以上言えることはないんですが…」

「そういうお前は？」

「え？」

「ギター、やってんのか？」

あー、やっぱり来ちやうか…その質問。

できれば聞かれたくはなかったが…

「…やめました…ギターは。」

「そうか、あんなに好きだったのにな…」

「…俺にはもう…弾く資格がないんですよ。」

「はあ？弾く資格がないって…何があつたんだよ？」

「…つまらない話ですよ。ごくごくつまらない話。」

聞かせる話でもない。

それに、聞いたらきつと幻滅する。

「主催ライブっていつやるんですか？」

「今月の最後の土曜日だ。」

「今月ですか、じゃあもうすぐだ。」

「…観に来てくれんのか？」

「ええ、先輩にそこまで言わせるPoppin, Partyの皆さん

のことも知りたくなつたんで。」

「そつか…優…ありがとな。」

「え、デレた？」

破壊力がやべえ。

「バツ…デレてねーよ！」

「またまた、照れちやつて…」

「照れてもいねー！さつさと帰れ！」

「ちよ、いきなり酷くないすか!？」

でもま、元気出たみたいだから良しとするか。

「そうだ、連絡先教えてくださいよ。」

「ああ、そういや交換してなかったな。」

これで、いつでも連絡が取れるようになったわけだ。

「何かあつたらまた、連絡くださいね。ていうかします。」

「ああ。」

「じゃ、また。」

「…ああ、またな。」

しかし、この人にここまで言わせるとは。ちよつと嫉妬しちまうな。

他のメンバーの人のことは知らないが、この人達なら大丈夫だろう。どんなことがあっても乗り越えられる。

根拠はないが、何故かそんな確信めいた予感があった。

主催ライブ、行くか。

そこで何か…見つかると思じて。

過去と向き合う時

「へえ、弾き語りか。」

初めて見た。

中学生ぐらいの女の子だろうか？

路上に座り込み、熱心にギターを弾き、歌っている。

歌も演奏もそれほど上手いとはいえなかったが、惹き付けられるものがあつたのか、俺の足は自然とそちらへと向かつていた。

まったく、どういう心境の変化なのやら。

以前までなら確実にスルーしていたはずなのに。

女の子は熱中していたせいか、暫くは俺に気づいていない様子だった。

が、気づくと驚いたようで、演奏が中断された。

「悪い、邪魔したか？」

「ううん、ちよつとびつくりしただけ。」

「気にせずに演奏してくれよ。」

「うん。」

終盤だつたのかほどなくして、演奏は終わった。

「いいね、ちよつとしか聞いてないけど、良かった。」

「ありがとう。」

「それ、何て曲？」

「んー…決めてない。」

「自作楽曲かい。」

それを路上で弾いてたのか。

何て度胸してんだか。

「飲み物買ってくるけど、何かいる？」

「ついでに買ってきてあげるけど。」

「いいよ、お金持ってないし。」

「良い演奏のお礼だって。気にしなくていいよ。」

「じゃ、ブラックコーヒー。」

「飲めるのか？見栄は張らんほうがいいぞ？」

「…甘いので。」

「了解。」

「へえ、半年か。」

「うん、だからそろそろいいかなーっと思って。」

「それで、路上ライブを。」

色々ぶっ飛ばしすぎだろうとは思ったが、口には出さないでおく。
やり方は人それぞれだ。

「うん、でも全然誰も来なくて…お兄さんが初めての観客。」

「そうか、俺は記念すべき観客一号ってわけね。」

「そうなるね。」

「でも、大したもんだ。半年でそこまで

弾けりやあさ。」

「わかるの？」

「まあね。」

「ってことは、ギターやってたの？」

「昔ね。今はやってない。」

「…どうして、やめちゃったの？」

「…大切な人を傷つけたから…かな。」

「えっ？」

「ははっ、冗談だよ。色々忙しくってさ、暇がないだけ。」

「そうなんだ。高校生？」

「うん、高校一年。君は、見たところ中学生かな？」

「そう、中学二年生。」

「じゃーまだまだ伸び盛りだ。」

「そうかな？」

「ああ。」

「でも、周りの子達は下手くそって言う。」

「言わせとけ。練習しまくってさ、上手くなってそいつらの度肝ぬいてやればいいじゃん。」

「…文化祭あるから、そこで演奏したいって思ってるんだ。」

「へえ、いつ?」

「9月。」

9月ってことは、後3ヶ月くらいか。

「一人で弾くの?」

「うん。」

「バンドは?組みたいとか思わない?」

「いい。それに、楽器やってる人とかいないから。」

「そうか、まあ、ギターソロでもやれるっっちゃやれるからな。」

「…やっぱり、女の子がギターやってるのって変かな?」

「…全然、変じゃねーよ。」

「本当?」

「ああ、この前な、俺の通ってる高校でも文化祭があつて、そこで君とそんな変わらない女子高生がソロでギターを弾いたんだ。」

「へえ…」

あの時のあの衝撃。

今でも鮮明に思い出せる。

「…正直言つて、凄かった。圧倒されたよ。それまで自分が抱いてきた価値観とかを全部ぶっ壊された。」

「…そんなに凄かったんだ。」

「…ああ、だから周りの視線とか声とかは気にすんな。」

その熱意があればきつとできる。

俺はそう思う。

こっつ恥ずかしく口には出さないが。

「ありがとう。そんな風に言われたのは初めて。」

「どういたしまして…さてと、邪魔したな。俺はそろそろ行くから。」

「待って!」

「ん?」

「名前…教えて。」

「ああ、優…星川 優ってんだ。」

「私、由佳莉って言うの。」

「由佳莉か、良い名前じゃねえの。」

「…優の音も聞きたい。」

早速下の名前、しかも呼び捨てかい。

まったく、最近の女子はもう…

「ああ、いつかな。」

「約束だよ！」

「ああ、頑張れよ由佳莉。お前ならできると。」

何か俺も色々と決心がついたよ。

今さらだけど。

そうだよな。過去は変えられない。

罪は決して消えない。

だからって、それを理由に逃げ続けるなんてのはいけないよな。

自分より小さい女の子が頑張ってたんだ。

いい加減俺も、前に進まなきゃな。

過去に向き合わなければならぬ。

辛くとも、傷つこうとも。

あいつは俺の何倍も傷ついたらはずだから。

過去と向き合おう。そして、進もう。

それが俺のできる、あいつへの贖罪だから。

ギタリストとして

「そのあなた！ちよつといいかしら？」

振り返るとあら、驚き。

絵に描いたような美人さんがおりました。

花咲川の制服を着てるけど、見たことはないな。

ド金髪だし、外人さんかな？

そう、思っているのとチラシを手渡された。

「えと、ぽぴぱ…パピポ…ぱーていく？」

何か口に出すだけで舌噛みそう。

「ええー今度ライブがあるの！是非あなたも来て頂戴！とくつても笑顔になれるわよ！」

笑顔ねえ…つてライブつてこれ

Poppin' Partyの主催ライブつてやつやんか！

本当にやるんだな…疑ってたわけではないが。

「あの、これって…つて居ねえし。」

あの人瞬間移動でもしたん？

影も形もないけど。

「そうか、いよいよか。」

ライブハウスGalaxyつて…確か朝日が

バイトしてるとこだったつけ。

そこでやるみたいだな。

つか地図がアバウトすぎる。

駅から200歩で、本当に歩いてやろうか。

「〜♪♪」

「ウッキウキやないかお前。遠足前の小学生か。」

「ひゃあっ！」

翌日、詳しいことを聞くため、朝日に話しかける。
ていうかびびりすぎだろ、こっちがびびるわ。

「…びっくりしたあ…」

ていうか、こいつと話すのも何だか久しぶりだな。

「鼻歌なんか歌って良いことでもあったのか？」

「週末にライブがあるから、楽しみでつい…」

「ぽぴぱピポぱーていっってやつ？」

うん、やつぱり舌噛みそう。

「うん！ポピパさんの主催ライブ！」

「っ!？」

そう言うのと急に身を乗り出してきた。

ちよ、近い近い近いつて！

急にテンション爆上がりしたんだけど

こいつ…どうしたんだ一体。

「朝日のバイト先の Galaxy でやるんだろ？」

「うん！もしかして、来てくれるの!？」

「いや、まあ、行こうかなーとは思ってはいるんだけど…幼馴染の晴れ舞台だしさ…」

今までにないぐらいグイグイ来るな、こいつ。そんなにライブが楽しみなのか？

「お…」

お？

「お、お、お…」

どうした？急に壊れたぞ。

朝日さん？

「おーい？どした？」

「お…幼馴染…?」

「ああ…市ヶ谷 有咲って人。ちっちゃい頃からの付き合いでな。」

「い、市ヶ谷先輩と…幼馴染やったん？」

「そうそう。バンド組んでるって聞いた時はびっくりしたなあ。」

「で、でら羨ましいわあー…」

「はあ?」

マジでどしたん？

目がものすごくキラキラ輝いとりますが…

「いやいや、羨ましいって…もしかしてお前、ポピパさんとやらのファンか?」

「…うん。」

「じゃあ、憧れのバンドって…Poppin' Partyのこと?」

「うん…去年の夏に、SPACEっていうライブハウスで、ポピパさん達のライブを観て…私もバンドが組みたいって思ったの。」

「なるほどねえ…で、肝心のバンドは?」

「そ、それは…」

「集まっとらんと…」

「はあ…私、何でこんなにダメなんやろ…」

「…ダメなんかじゃねーよ。」

「え?」

「お前、すごかったじゃねーかよ。あん時のお前のあの演奏、俺は今でも覚えてるよ。」

「あ、あれは…」

「羽丘一年!朝日 六花です!…ってな。マジでびっくりしたけど…あの時は。」

「い、言わんといて…」

「あれ、即興だろ?」

「じ、実は…」

「はあ?覚えてない?」

「う、うん…あの時は夢中で…」

マジでかよ…あんな演奏かましといて…

「…初めてだったよ、他人の演奏を素直にすげえって思ったのはさ。」

「…ありがとう。」

「ただ、凄すぎた。結果的にみんな、ドン引いちゃったんだよ、残念ながら。」

まったく、皮肉なもんだ。

意図したアピールではないにしても、存在を知らしめるには絶好の機会だった。

それを、不意にしてしまった。

「まあ、胸を張れよ。お前はすげえギタリストだ。それは俺が保証するよ。」

「ど、どうして?」

「ん?」

「どうして、そこまで言ってくれるの?」

「んー、どうしてか…なんていうかほっとけないんだと思う…お前のこと…一人のギタリストとして…さ。」

「え、ギタ…リスト?」

「ああ、こう見えても昔はギター少年だったんだぞ…俺。」

「優君、ギターやっとなん?」

「やっとなんよ…過去形だけだな。」

「バンド、組んでたの?」

「いや、バンドは組んでなかったけど、ミュージックスクールなるところには行かされてたな。市ヶ谷先輩と一緒に。専攻は違ったけど。」

「そ、そんな過去が…」

「意外だったか?でも、昔の話だよ。ギターもやめたしな…」

「…やめちゃったん?」

「ああ…もう弾くこともない…って思ってたんだけどなあ…やっばり、そう簡単にやめられないんだと思う…きつとどこかに未練があるんだよ。どれだけ、否定したとしても。」

「だったら、やったほうがいいと思う!優君、ギター好きなんやろ?」

「はは、お前に気づかされるとは…思っても見なかった。お前のおかげだよ。ありがとうな、朝日。」

「え?急にお礼なんて…」

「恥ずかしがんなよ…俺の素直な気持ちだ。」

今なら、向き合える。

過去に。罪に。そして受け入れよう。

それら全てを。

「頑張れよ。」

「うん、ありがとう。」

さあ、今こそ痛みを伴う過去に向き合う時だ。

R e m i n i s c e n c e

中学三年生の春。

それなりの時間を過ごした静岡を離れ、
新たな学校へと通うことになった。

あの親父は本当に急だから困る。

仕事の都合だから仕方ないのはわかるが。

とはいえ、別に親しかつた人間がいたわけでもないの、そこはど
うでもいいのだが。

「星川優です。よろしくです。」

素っ気ない自己紹介。

感じ悪いな。

何だアイツ。

そう思うんなら勝手に思え。

どうせお前らとなんて一年も経たずに

お別れなんだ。

関わるつもりもない。

何もしないから、ほっといてくれ。

「ほ、星川君。」

休み時間、早速クラスの女子の一人に話しかけられた。

「…何？」

「先生に学校を案内してくれて頼まれたんだけど…」

そういうのを異性にやらせるかね。

どっちもイヤだけど。

「ああ、別にいいよ。」

手を振って否定の意を示す。

「でも…」

「いいって。」

「……」

「何？その言い方。」

また一人何か女子が現れたよ。

こいつは何かめんどくさそう。

「あんた、自己紹介の時から思ってたけど感じ悪いよ。」

「そりゃ、どうも。」

「褒めてないし。」

鬱陶しいことこの上ない。

突っかかってくるんじゃないよ。

「はあ…だる。」

「は？」

「ちよ、やめようよ…里美ちゃん。」

「祥子、あんたお人好しすぎ。こういうのには一回言っちゃないとダメなんだって。」

「あの、行つていい？」

「あんたね…」

「ご、ごめんね！星川君…」

謝るくらいならこれからは話しかけないでほしいものだ。

もう、友達だのなんだのそういう時期じゃねーだろ。

そういう仲間意識みたいなものに

俺を巻き込むな。

孤独？

上等だよそんなもん。

プライドなんか何もない。

スクールカーストとかステータスなんか

くだらねーってことにお前らはいい加減気づけ。

おかげで一週間も経たずに俺は誰からも

話しかけられることはなくなった。

たまに、あの祥子だっけ？

小柄な眼鏡の女子が心配そうな顔してチラチラと見てくるのがうざったいが。

概ね、望んだ結果になった。

あとは教師に睨まれないように最低限のことをこなすだけだ。

こんなもんだろ、学生生活なんて。何も起きない。

「退屈な日常と生産性のない会話を繰り返すだけ。」

「そのループ。」

「俺にはギターさえあればいい。」

「それ以外はいらない。」

「あーあ、早く帰って弾きてーな。」

「あ、そういえば…」

「この学校、吹奏楽部つてもものがないらしい。」

「そのわりに、音楽室にはたくさん楽器があった。」

「もちろん、ギターも。」

「：ワンチャン弾いてもバレないんじゃないか？」

「音楽室に行くやつなんてそうそういないだろうし。」

「最悪、音楽担当の教師に言えば楽器ぐらい使わせてくれんだろ。珍」

「しい種類のギターもあったし、帰りに寄ってみるか。」

「失礼しますよーっと。」

「鍵はかかってないみたいだ。」

「おお、あるある。ちやつかりエレキも置いてんじやんかよ。もった」

「いないなー置いてるだけなんて。」

「ちよつくら弾いてみつか？」

「と、そこへ…」

「おお、人がいたのか！」

「やべ。」

「早速バレた。」

「見たところ音楽担当の教師だろう。」

「30代後半つてところだろうか？」

「しかし…頭頂部が残念なことになってんな…御愁傷様です。」

「新入生？」

「あ、いえ…3年です。」

「見ない顔だな…もしかして、転校生か？」

「はい…何かすんません、勝手に入っちゃって。」

「いやいや、全然構わんよ。あ、俺は音楽担当の山田、よろしく。」

「星川です。」

「そうか、星川君。唐突だが楽器に興味はないか？いや…ギターを弾こうとしてたな…経験者かい？」

「ええ、一応。」

「そうか！じゃあ軽音楽部に入ってみる気はないか？」

「はい？」

急になんだ…このハ…おっさん。

この前ウチに来てた訪問販売の人と同じテンションなんだが…一言で言うとう暑苦しい。

「軽音楽部の顧問もしとるんだが、いかんせん部員がない。それじゃ、寂しい！」

というわけでどうだ？」

何がというわけでだ？」

部活とかだるいんですけど。

断ろ。

「来たい時にくればいいし、別に強制はしない！もちろん楽器とかその他諸々は好きに使ってくれて構わない！破格の条件だろ？」

あんだ、教師より営業のほうが向いてるよ。

でも、まあ…確かに、ちよつと魅力的ではあるかな。

機材も揃ってるし…。使いたい放題か。

「来ても来なくても構わないんすね？」

「ああ、さつきも言ったが強制はしない！」

「音楽室に誰か来ることは？」

「基本ないな。」

それなら…良い環境じゃないか。

「先生も基本は干渉しない。自主性を重んじる。」

なんだ、この先生良い人じゃん。

「じゃあ、入ってもいいですよ。」

「本当か！じゃあ、先生は入部届けの用紙持ってくるから…ちょっと待っててくれ。」

「お願いします。」

「ただだけ必死なんだよ。」

別に俺一人入ったぐらいで…そんな変わらんだろうに。

暇だし、さっきのギターでも弾かせてもらいますか。

やっぱいいわ、こいつ。

俺の相棒もカッコいいけど。

フイーリングって大事だね。

どうせなら、見た目良いの使いたいじゃんよ。

ギターリストの性ってヤツかね？

いい！いい！

素晴らしい！この重厚なサウンド！

家では出せない。

でかいアンプがあると違うね、やっぱ。

久々にテンション上がるわ。

騒音とかも気にする必要ねーもん、ここなら。

しかし、人間そうになると視界は狭くなるもので…

「良い音出すね。」

「まーな、何せ設備が段違い…」

ん？

「!？」

今、女子の声しなかった？

恐る恐る目を開ける。

「…えっと、どちら様？」

「それはごっつちの台詞だよ？キミは新入生かな？」

これが、出会い。

俺と彼女のファーストコンタクト。

淡い思い出の序章。

逢沢優歌

「あ！もしかして、入部希望の人!？」

「違います。」

つい、反射で答えてしまった。

誰だよ、この女。

「違うの？」

「違います。失礼しました。」

そう言い、退室しようとするが、腕を掴まれる。

「待って！」

ああ、うるさいな。何だよ？

睨み付けてやるが、まったく効果はないみたいだ。

「ギター、教えてよ！」

「はあ？」

「じゃなかった…まず自己紹介だよね。」

いや、意味わからん。

そもそも何なんだよお前は。

もしかして、部員の人じゃないよな？

コホン、と咳払いをするとその女は勝手に自己紹介をし始めた。

「私、逢沢^{あいざわ}優歌^{ゆうか}っていうの。キミは？」

「名乗るほどの者じゃありません。用事あるんで、これで帰ります。」

「いやー待たせたね、星川君！」

今度こそ帰ろうとするが、最悪のタイミングで先生が戻ってきた。

あんた、タイミング悪すぎだろ！

しかも、騙しやがったな！

「あ、せんせー！こんにちは。」

「おお、逢沢。喜べ、新入部員だぞ。転校生の星川君だ。」

「ホントに!？」

勝手に決めんなよ。

俺は帰る。

「唯一の部員の逢沢だ。星川君、仲良くしてやってくれよ。」
いや、だから勝手に…

「よろしく！星川…何ていうの？」

「はあ…優、星川 優だ。」

「ゆうってどういう字書くの？」

別にいいだろ、そんなの。

かったるいわ。

「優秀とか優勝の優。」

「そっか…優しいの優か…私と一緒にだ。」

どうでもいい。

「良い名前だね。」

「そうか？」

女の子みたいとかよく言われたけどな。

どうせなら勇ましいの方の勇が良かったわ。

「改めて、よろしくね！優！」

早速下の名前呼びかよ。

しかし、名前褒められたのは初めてか。

何だろう…悪い気はしない。

結局断りきれずに俺は軽音楽部（部員二名）に半ば強引に入部させられてしまった。

転校早々災難だ。

しかも、部員が女子一人かよ。

おまけに俺の一番苦手なグイグイ来るタイプだ。

この逢沢 優歌ってやつは。

「ね、ギター教えてよ。」

「断る。」

「何でー？」

「教えんのが絶望的に下手だし、ぶっちやけめんどくさい。」
「ぶっちやけたね。」

「てわけだ。弾きたきや自分で頑張れ。」

「じゃー何か弾いてよ！それならいいでしょ？」

「はぁー…リクエストは？」

「何でもいいよ！」

「りようかーい。」

他人に演奏聞かせるのは数年振りだ。

幼馴染とのお別れ以来か。

そういえば、元気にしてるのかな。

今となつては懐かしい…あーちゃん。

「うん！やっぱり良い音…」

「わかるのか？」

「んー…なんとなく…でも、ちよつと悲しそうだったな。」

「あぁ…ちよつと昔を思い出してな。」

感情が表に出ちまったか。

「ノスタルジーってやつ？」

案外、難しい言葉知ってるんだな。

「たぶん、それだ。」

「転校してきたんだっけ…友達と別れて

寂しいでしょ？」

「別に…そんなのいなかったし。」

「ふーん…寂しいね。」

「ほつとけ。」

「ギターは？昔から？」

「かれこれ7、8年くらいはやってるかな。」

「そんなに!？」

月日が経つのなんてあつという間だよ。

十代も折り返し地点。

あつという間に二十歳になって、あつという間にオッサンになってくんだらうな。

「ね、やっぱりギター教えてよ！」

「断つただろ。」

「いいじゃん！一緒に弾いたらもつと面白くなるよ！」

「つーか、今までの活動は何してたんだ？」

「んー…歌ったり、ピアノ弾いたり？」

「一人でかよ？」

「んーん、もう一人いたんだけど…転校しちゃった。」

「なるほど。」

まあ、暇だしな。

俺の音を褒めてくれたし、悪いやつではなさそうだし…多少騒がしいけど。

いいかもしれないな。

こいつの口車に乗るわけじゃないけど。

チヨロいとか言うな。

「…本当に下手だぞ？」

「え？教えてくれるの!？」

「それでいいんなら。」

「やった！ありがと！優！」

「お、おおっ…わかったから揺らすな。」

「師匠って呼ぶね。」

「呼ぶな。」

俺は、無意識の内に求めていたのかもしれない。

誰とも関わりたくないと思いつつも…

同時に誰かといいたいという相反する感情も

抱いていたのかもしれない。

とにもかくにも、これが始まり。

大切なこの時間

「はあー…」

「いつにも増して不機嫌だね、アンタ。」

…えっと、誰だっけかこいつ。

ていうか何で絡んでくるんだよ。

「白鳥 里美。いい加減覚えなよ。」

すみませんね、他人に興味が薄いもので。

「で、あっちは？」

ちっこい眼鏡の女子。隠れてるつもりかは知らないが、バレバレだからな？

「佐々木 祥子。アンタのこと気にしてんだよ、色々とき。」

「ちよ、里美ちゃん！」

「ふーん…で、何で懲りずに俺と関わろうとするわけ？」

「別に、あたしらの勝手じゃん。」

「哀れみとか、同情の類ならいらねーぞ。自業自得なんだからな。」

「アンタ、一匹狼気取ってるだけでそんな悪いヤツじゃないみたいだしや。」

なんだよ、それ。

俺のことをわかった気になるなってんだ。

「それで？ため息の理由は？」

「…お前らさ、逢沢 優歌ってやつ知ってるか？」

「ああ…E組の。」

「逢沢さんと…何かあったの？」

「いや、それがよ…山田って先生に騙されて軽音部に入部しちゃったんだけど…その逢沢つてのがテンションあり余ってんのか…元気すぎて手に負えねーんだよ。」

「へー、良かったじゃん。」

どこをどう聞いたらそういう感想が出るのかな？

愚痴ってただけども。

「逢沢さん…元気なかつたから。」

「え、あいつが？」

「うん…あんなことがあって…」

「ちよつと！」

何か言いかけた佐々木を白鳥が強い口調で止める。

「何かあったのか？」

「ご、ごめん！何でもないよー！」

「ふーん…ま、いいけど。」

さては、あいつ何かやらかしたな？

まったく困ったもんだ。

果たして俺に制御できるかどうか。

「星川…ちゃんと仲良くするんだよ。」

「お、おう。」

何なんだその妙なコメントは。

ちなみにそのコメントに対する返答は無理だ。

ほんつとに…何で引き受けちゃったかね。

誰かに何かを教えるなんてガラでもないし。

誰にも邪魔されずに至福の放課後を過ごす計画が台無しだぜ、まったく。

「ねえ、星川先生！」

「はいはい、何かね？」

逢沢はやかましかつたが、吸収力はあつた。

教えたことは大抵すぐにこなした。

挫折ポイントと呼ばれるFコードも難なくこなしやがった。

すぐに飽きてやめるかと思っていたが

予想に反してあいつはやめなかった。それどころか、下校時間ギリギリまで練習しているほどだ。

「だいぶ、様になったな。大したもんだ。」

「そう？」

「ああ、正直すぐやめるかと思ってたけど。」

「やめるわけないじゃん。すごく楽しいよ！」

「そりゃ良かったな。」

「誰かと何かするのって久しぶりだったからさ……」

「ま、俺でよければいつでも……は無理だけど、暇な時は付き合っ
てやるよ。」

「ありがと……優が来てくれて本当に良かった。」

はあ……そういう台詞を面と向かって言うかね。

「いきなり何だよ……」

「あはは、なんとなくそう思ったから言っただけ。恥ずかしがって
るの?。」

「がってねえ。」

「本当に?。」

「本当に。」

「よっ!青春してるとこ邪魔するぞ。」

いやいや、むしろナイスタイミングだよ

先生。ノリは腹立つが。

「どうだ?逢沢は。」

「悔しいですけど、俺なんかよりよっほど才能ありますね。簡単な曲
なら弾けるんじゃないですかね。」

「そうか、星川の指導の賜物だな。」

「別に……俺は何もやってないっすよ。」

「はは、謙遜するなって。何なら文化祭に出してみるのもいいかもしれ
ないな。」

「文化祭ですか?。」

「ああ、9月にあるんだ。」

文化祭とか良い思い出がねえ。

リア充限定だろ、楽しいなんてのは。

付き合わされるこっちの身にもなれっすよな。

「優もギター弾けば?。」

「は？イヤだよ。」

「だって、せつかくの文化祭だよ？」

「私も歌うからさー！」

「何故にそうなる。」

「ギターも弾くよ！弾いて歌う！」

「そうか、頑張れな。」

「えー！」

人前に出るのとかマジで無理。

緊張して縮みあがるから。

クソザコメンタルに定評あるから俺。

「ていうか、まだまだ先だろうが。」

「あつという間だよ。こういうん何とかって言うでしょ？」

「光陰矢の如しな。」

「そうだ、失った時間は戻っては来ない。無為に生きるべきではないって戒めの言葉でもあるんだぞ。」

「じゃあ、先生の若かりし頃も…髪の毛も…もう戻ってはこないんですね。」

「…言うな。最近、娘にも言われ始めてな…」

「娘さんいたんですか…」

「優、ダメだよ？せんせー薄いの気にしてるんだから。」

「お前フォローしてるつもりだろうが、追撃かましてるからな？」

オブラートに包みなさい。

…そもそもオブラートって何だ？

翌日の放課後、あいつはいなかった。

風邪でもひいたか？

まあいい…おかげで思う存分、暴れられるぜ。

「いやあ、上手いもんだな。」

「ああ、先生こんにちは。」

「逢沢は？」

「あいつ、今日は来てないみたいで。風邪でもひいたんすかね。」

らしくねーけど。

普段からあのテンションだろうから時には休息も必要だろ。

「寂しいだろ?」

「それでもないですよ。」

「けど、良かったよ…星川。お前が来てくれてさ。」

「どしたんすか?急に。」

「最近の逢沢は楽しそうだよ。ここだけの話、お前のことばかり話すんだ。」

「へえ、そうなんですか。」

なんかむず痒い。

「河合…前にもう一人部員がいたんだが、転校してな…それ以来すっかり元気がなくなってたんだ。」

あの、元氣娘が信じられねーな。

無理もないか、一人じゃあな。

俺は好きだけど…きつとあいつにとっては退屈で寂しかったんだろう。

「…これからは、もうちよい優しくしてやりますか。」

「助かるよ。お前を強引に引き入れた甲斐があったってもんだ。」

「いいですよ、それはもう。」

むしろ、感謝してる部分もある。

何もかも新鮮な時間は、そんなに悪くはない。

逢沢のノリとテンションは非常に絡みづらいが…それも最近が悪くはないと思っている。

充実している…のかもしれない。

大切かと言われるればそうなのかもしれないと答えられるくらいには…俺はこの時間を気に入っていた。

涙の理由は

「おーす…ってどした？」

「はあ…」

何だかものすごいダメージ受けてるっぽいんだが…普段のこいつからは考えられないほどの意気消沈っぷりである。

もはや答える気力もないのか逢沢は机に突っ伏しながら一冊の雑誌の記事を指差す。

なにになに？アイドルバンド、デビューライブにて口パク& a m p ;
当てフリがバレる…？

あちゃー…やっちゃったな、こりや。

要するに、楽器は弾いてないうえに歌は歌ってないってことだろ？
致命的すぎる。

それは一番やつちやいけないことだろ。

アイドルバンドだかなんだかは知らないが…アイドルはアイドルらしくやってりやいいってのに。

話題づくりかなんか知らんが失敗して本業にまで影響出てるようなら世話ねえって話だな。

「あー、その…御愁傷様…ファンなのか？」

「…うん、ボーカルの子が好きで…ライブには行けなかったんだけど…」

「元氣出せよ…もうバンドやるのは無理だろうけどな。」

あ、やべ…言葉のチョイスミスったか。

「でもよ、良い教訓にはなつたろ？楽器は演奏してナンボなんだよ。フリなんてのは音楽に対しての侮辱も良いトコだ。」

「うう…そうだけど…そうだけとお…」

よよよと効果音が聞こえてきそうだな。

すぐに立ち直れつてのは無理な話か。

「お前は頑張れよ。」

才能も気持ちもあるんだからな。

「優はなんでギターを始めたの？」

「何だよ急に。」

「聞いてなかったなーっと思って。」

「別に、大した理由じゃねーさ。」

親父がギター好きでよ、俺にもやらせようとして買ってくれたんだ。」

「そうなんだ、良いお父さんだね。」

「そんなことないけどな。」

「動機はともかくさ、ここまで続けてきたんでしょ？その想いは本物ってことじゃん。なら、感謝しなくちや。」

「そんなもんか。」

「そんなもんだよ。」

まあ、俺からギターを取ったら何も残らないってくらいには大事なものにいつの間にかなっではいたけど。

「お前は？」

「んー？」

「バンドとか組みたいと思ったりしないのか？」

「んー…どうだろ。優とならいいかも。」

「じゃあ、一生無理だな。」

「なんでー？一緒にやろうよ！」

「やだ。」

俺はバンドなんて柄じゃない。

そういうのは陽キャの特権だろうが。

勝手にやってくれ。

「組んだところですぐ受験シーズンだろ。そんなこんなであつという間に俺とお前もお別れだ。」

「そっかー…そうだよね…」

「組むんなら高校入ってからにしろよ。」

そんなくらいにならある程度上達もしてるだろうし。」

「じゃあ、大事にしようよ…この瞬間をさ！」

「なんだよ…やつすい青春ドラマみてーな台詞はきやがって。」

「いいの！安くても。」

「なんじゃそりゃ。」

「まったく、バカ話してたと思ったたら急に真理をつくようなことを言うからなこいつは。」

「最初は鬱陶しかつたけど、最近は悪くなくとも思い始めている。これって末期かな？末期かもしれない。」

「アンタってさ、逢沢と付き合ってたの？」

「んぐっ!？」

「ちよ、こいつ今何だった？」

「おまつ…お前ね…人が飲み物飲んでる時にそんな爆弾発言すんなよ。」

「ていうか誰だよお前…ミサトだっけ？」

「里美。二ヶ月経つても名前覚えらんないのは初めて。」
「心を読むな心を。」

「ていうか後ろのちっこい眼鏡。」

「お前はお前で何なんだよ。言いたいことあるならはつきり言えよ。」

「ご、ごめんなさい…」

「いや、謝ってほしいんじゃないやなくてだな…」

「っーか、どこをどう見たらそう見えるんだよ。」

「誰か噂流したりしてんのか？」

「もしそうだったらソイツ締め上げてやんよ。」

「祥子が気にしててさ、気になるのはあたしもだけど。」

「ちよ、ちよつと里美ちゃん！」

「答えは、そんなわけねーだろ…だ。」

「そつか…良かったね様子。」

「はあ？」

何でそこで良かったねなんだ？

「でも最近の星川、楽しそう。」

「そうか？」

「うん、最初の頃より良い顔になった。」

「ふーん。」

自分じゃわからんけど、そうなのか。

「星川君のおかげで…逢沢さんも元気が出たみたいだし。」

「そりゃ買い被りすぎだ。何にも特別なことはしてねーよ。」

「と、特別じゃなくても…星川君がいるだけで逢沢さんは救われてるんだと思うよ？」

「どうでもいいけど…何でお前俺から目を逸らして話すんだ？恥ずかしがり屋さん？」

「アンタにだけね。」

「もう！里美ちゃん！」

何か顔真っ赤にしてるし。

女子ってのはよくわからん。

わかりたくもないが。

救われてるねえ…それは俺も同じだよ。

強がっても平気なフリしてもやっぱりは嫌なんだ。

人間ってのはコミュニティの形成を前提として成り立っている生き物だから…きつと誰もそれからは逃れられない。

だから、俺は感謝してる。

あいつに…逢沢優歌に。

絶対に口には出さないけど。

「…遅い。」

何をやっとなだあいつは。

ちよつと褒めたとたんにコレか。

今日チラつと見かけたからいるはずなんだが…サボりつてのはあいつに限つてないだろうし。

顧問の山田先生も何も聞いてないみたいだし…どうしたもんか。

「帰るか。」

何だか気分が乗らないし、今日は帰ろう。

帰る途中で逢沢を見かけた。

やっぱりいるんじゃないかよ。

油売りやがって、まったく。

「おーい、こんなところで何やってん…」

そこまで言いかけて思わず止まる。

「優…っ？」

泣いていたから。

何で…

何でだよ？

「ご、ごめんね…お腹痛くてさ…いやー

やばかったー！」

そんなんじゃないやねえだろ、その涙は。

何で泣いてるんだよ？

「明日はちゃんと行くからさ…じゃあね！」

「お、おい！」

下手なウソつきやがって…ただ事じゃねえだろ。

何で俺に何も言わねえんだよ。

とりあえず、明日あいつに会つて話そう。

同じ部員の…それも女の涙を見て見ぬフリするほど俺も落ちぶれてはいないつもりだ。

もういいよ

翌日、あいつの姿は学校にはなかった。

クラスの奴に聞いてみたところ休みらしい。

「ちっ…あいつ…」

なんかモヤモヤするな…くそっ。

何かあつたんなら何で俺に相談しないんだよ。バレバレのウソな
んかつきやがって…

「さつきさあ、逢沢のこと聞かれたよ。」

「あー、あの星川君って人でしょ？」

「そうそう、でもかわいそうにねー。」

あいつに目をつけられてさ…転校してきたから何も知らないのは
当然なだけだよ。」

「…はっ。」

あいつら何を言ってるんだ？

「でも、バカだよなー逢沢もさ…河合のことを庇ったせいで今度は自
分が標的に

なるんだもん…結局河合も

転校しちゃったしさー…大損じゃん？」

「あはは、言ってるー！」

何を笑ってるんだ？お前らは。

頭お花畑かよ？

「ちよつといいか？」

「え!？」

「あ、ほ、星川君…」

「詳しく聞かせてくれよ…今の話。」

「え、あ、えつと…」

「いいからさつきと話せ。」

「ひっ…！」

俺の自制心が働いてる内にさっさと見え。
こいつらが女じゃなかったらとつくにぶん殴ってるけどな。

「……………」

「だ、だからさ、関わらないほうがいいんだよ！あいつとは…」

そうかよ。

そういうことかよ。

全部わかった。

何もかも。

あいつの涙の理由も…全部。

「くそっ!!」

怒りを押さえきれずに壁を殴りつける。

怒り：それは、誰に向けてのモノだ？

逢沢か？

逢沢を苦しめてる連中か？

…違うな。

自分に対しての怒りだ。

何も知らずに過ごしていた俺への怒り。

「ちよ…やばいって…この人。」

「も、もういい？星川君。」

「ああ、とつとと失せろ。」

あいつは苦しんでいた。

一人で。

理解者もいなくなった中…ずっと。

だからこそ何でなんだよ。

「気にいらねえ…」

何もなさそうに振る舞いやがって。

泣くぐらいだったら相談しろよ。

何も知らなかった俺がバカみたいじゃねえか。

とにかくあいつに会わなきゃ始まらない。

イライラしてもしょうがないのはわかりきってはいるが、どうにも感情の整理がつかない。

俺は携帯なんかも持ってないから連絡を

取ろうにも取れないし…できることは待つしかない。

翌日もあいつの姿はなかった。

風邪…らしい。

「お前ら知ってたのか？逢沢に何があったのか。」

「…聞いたの？」

「ああ。」

同じクラスの白鳥と佐々木を問い詰める。

その様子だと知ってたんだな。

「ぐ、ごめん…」

罪悪感からか、佐々木が謝罪する。

見て見ぬ振りをしてるって捉えられても

おかしくはないからな…実際そうなんだろうが。

「何で謝んだよ…別に責める気はねえよ。」

それに、謝る相手が違う。

「で、でも…」

「バカだよな…あいつも…くだらない正義感なんか出すから自分が損しちまう。」

平坂 由姫。

こいつが首謀者らしい。
成績優秀・容姿端麗・実家が金持ちと
お嬢様のテンプレ要素をどこまでも詰め込んだような奴だ。
気に入らない奴がいると取り巻きを使って徹底的に攻撃する。
その標的になったのが河合 美月って奴らしい。
あいつは、逢沢は見て見ぬ振りができなかった。
その結果がこれだ。
結局河合って生徒もいなくなり、あいつは見事に四面楚歌ってわけ
だ。

こいつらみたいに関心してるやつらはいらぬみたいだけど…

「…バカなこと考えてない？」

「俺の勝手だろ。」

手っ取り早いのは平坂って奴をシメることだが…さすがに女に手
をあげるわけにはいかない。

やっぱあいつと会って話すことが最優先だ。

何なら山田の先生も事情を話せば味方になってくれるだろうし。

どうせ、あいつのことだ。

心配かけさせたくないって心理が働いているんだろう。

ふざけろってんだ。

「…久しぶり。」

「おう、やっと来たか。」

「…優、ごめんね…風邪引いちゃってさ。」

そのまた翌日の放課後。

逢沢は姿を現した。

「…もういこよ。」

「…え？」

「全部話せ。何かあったら俺に相談しろよ。下手なウソなんかつくんじゃねえ。」

「…何言ってるの…何にもないって。」

「ないわけねえだろ…!!」

「…!!」

「いい加減にしろよ…そんなに俺が信用できないのかよ？」

ダメだ。

冷静になれ。

そう思ってもブレーキが効かない。

溢れだす言葉は止まらない。

「悲劇のヒロイン気取りかよ…お前にとって俺はその程度だったのか？ふざけんなよ…そんないらねえ気遣いされて…俺が喜ぶとでも思ったのか？」

「ち、違う…違うよ。」

そうだ、違う。

俺はこんなことを言いたいんじゃない。

何を言ってるんだよ。

他に言うことがあるだろ。

「…優は関係ないでしょ？ダメだよ、私なんかのために…」

「はっ、そうかよ…」

関係ない…か。

堪えるな、こりゃ。

「よーくわかったよ。」

「…え？」

「だったらもう勝手にしろよ。」

「…優？」

弱々しい声。

そして、継るような眼。

「もういいよ。心配した俺がバカだった。」

苛立ちは言葉を加速させていく。

良くない方向へと。

「俺とお前は他人だ。ズカズカと踏み込んで悪かったな。」

言いたいこととは裏腹に突き放すような言葉ばかりを紡いでしま
う。

もう…それは止められない。

「勝手にしろよ。どこへなりとも行っちゃまえ。」

「……」

その言葉が引き金だった。

「ごめん、ごめんね…優。」

そう言つてあいつは走り去つて行つた。

俺は今まで心の底から怒ったことはない。

そういうふう生きてきたから。

だから、抑制が効かなかった。

感情のコントロールができなかった。

「…言い訳してんじやねえよ…最低だな…俺は。」

今すぐに追いかけるよ。

追いかけて…

追いかけて…どうする？

今さつき怒りの感情のままに突き放す言動を投げ掛けた俺に…あ

いつを励ます資格があるのか？

一度出した言葉は引つ込められない。

俺はあいつを傷つけてしまった。

泣いていた…かもしれない。

いや、今も泣いているかもしれない。

どこへ行ったのか、帰ったのか、逢沢の姿はなかった。

違うんだよ…俺はあんなことが言いたかつたんじゃないんだ。短い付き合いだけど…それなりに大切だっと思って思えるような存在なんだよ。だから、関係ないって言われた時は…いや、もうやめよう。

これは正当化できるものじゃない。

俺があいつを傷つけた。

ただ、それだけだ。

そして俺は女を傷つけ、泣かせてしまった最低野郎だってことだ。

もう二度と

あいつは学校に姿を現さなくなった。
理由はわかってる。

謝らなければならぬ。

もう、無理かもしれないけど…取り戻すんだ。

あの時間を。

ただそれだけを思って学校に通い続けた。

「ねえ、星川君って君？」

「…誰だお前？」

「私、平坂 由姫っていうんだけどさ。」

ああ、こいつが…いかにもお嬢様って雰囲気だな。

世界で一番自分がかわいいって思ってたそうさ。

「で、俺に何の用だ？」

「ね、ね、逢沢に何したのー？全然学校来なくなっちゃったけど…あたしらが散々やっても耐えてたのにさー…すごいねー。」

それを堂々と言うのかよ。

いい性格してやがるなこの女。

「何の用だって聞いてんだ。俺を笑いにでも来たのかよ？」

「あはは！そんなんじゃないってば。」

「だったら消えろ。こっちはお前になんか用はねえんだよ。」

「はあ？何その態度。あたしに逆らったらどうなるか…」

「別に…どうにでもしろよ。」

「は、何それ。悔しくないの？」

「どうでもいいんだよ…何もかも。」

「つまんな…とんだ腑抜けちゃんだね。」

「そうかもな。」

「どうでもいい。」

お前らのことも。

俺のことも。

仮にこいつをぶん殴ったところで何も変わらないだろうし。ただ虚しいだけだ。

ただ意味もなく学校へ行き、無意味な

日々を過ごす。その繰り返し。

部活にもずいぶん顔を出していない。

先生にも事情を聞かれたが、俺のせい…とだけ伝えた。

「そうか…星川、あまり自分を責めるなよ。」

俺には、そんな言葉をかけてもらう資格もない。

責めるなど言われても無理な話だ。

俺も加害者なんだから。

あの平坂つてやつと何ら変わらない。

いつそのこと責めてくれ。

お前のせいだと糾弾してくれよ。

そうすれば少しは楽になるかもしれないから。

いや、楽になる資格すらないか。

「星川、アンタ逢沢と何かあったの?」

「関係ねえだろ…お前らには。」

「で、でも…最近の星川君…見てられないよ。」

「白鳥、佐々木。お前らももう俺には関わるな。」

「はあ?」

「もうほっといてくれ。」

「そ、そんな…。」

「アンタはそれでいいわけ?」

「ああ。」

一人になりたいんだ。

頼むから関わらないでくれ。

結局あいつが来ないまま夏休みを迎えた。

何もする気が起きず、ただただ部屋に引き籠っていた。

ギターすら…弾くことが億劫だった。

俺があんなことを言わなければ…まだあの時間は続いていたのかな？

たとえ、その時は辛くとも。

乗り越えることができたのかな？

今となってはたられればかりが浮かんでしまう。

いくつものあつたはずの未来。

それを壊したのは他でもない俺だ。

「けど、行かないやな。」

今さらだけど。

謝ろう。

あいつに。

最低男の最高に見苦しい謝罪だとしても。

夏休み中の学校。

野球部やらサッカー部、陸上部が部活動に精を出している。

よくやるな、あいつらも。

それらをスルーしつつ音楽室へと向かう。

山田先生はいるだろうか。

「失礼します。」

「ああ、星川。」

いなかったらどうしようかと思っただが杞憂だったようだ。

「…ちようどよかった。」

何の話だ？

「すみません、部活にも顔を出さずに。」

「ああ…それはいいんだ。」

「あいつは…来ましたか？一度でも…」

「…いや、来ていない。」

「そうですか…あいつの家の連絡先とか知りませんか？一言話がした

くて…」

「星川、それなんだが…」
「？」

「逢沢は転校した。」

「…は？」

転校？

じゃあ…あいつはもう…

「星川…すまない…!!」

なんで…なんで先生が謝るんだよ。

「顔をあげてくださいよ。先生。」

「何も気づけなかった…教師失格だよ…俺は。」

「もう…全部知ってるんすね。」

「ああ、聞いたよ。彼女の家にも行った。顔は見れなかったが声は聞けた。」

「…何て言っていました？」

「…お前に…会わせる顔がないと言っていた…。」

…バカ野郎。

あいつはどこまでバカなんだよ。

俺への恨み言でも言えよ。

そうすりゃ少しは気が晴れるだろうが。

苦しんだって叫べば少しは救われるだろう？

なんで…なんでなんだよ…!!

どこまでお人好しなんだよお前は。

少しは自分のことも考えろよ…!

「お前にも連絡するべきだった。本当にすまない…星川。」

「先生に言われたこと、そっくりそのまま返します。自分を責めないでください。責められるべきは俺なんです…言うなれば一番の加害者ですよ…俺は。」

「…お前がそんな人間じゃないってことは俺が知っているさ…だから
そう気負うな。お前という逢沢は本当に楽しそうだった。」

そうか。

もう二度と、あの時間は戻っては来ないのか。

謝ることも…言葉をかわすことすらかなわないのか。

「先生も今月いっぱいだ。」

「え？」

なんで…まさか…。

「先生が責任を感じることは…」

「もう決めたことだ。」

決意は揺るがない。

そう目が言っていた。

「すまない…私が誘っておいて。」

「いえ、感謝してますよ。あいつに会わせてくれて。」

「星川…」

帰宅した俺は久々にギターを弾いた。

「ごめんな…しばらくほったらかしにして。」

この時だけは忘れられるはずだから。

イヤなことも何もかも全部。

そうだ…いつだつてそうだったはずだ。

どんなにイヤなことがあつてもギターを弾けば忘れられたんだ。

だから今度も…

「なら…なんなんだよ…これは。」

この虚しさは。

この息苦しきは。

今の俺には…負の感情を吹き飛ばす力すらないのか？

だとしたら、なんて無力だよ。

また今度も乗り越えられると思っていた。

けど、思ったよりもキズは深かったようだ。
当たり前か。

人を傷つけたんだ。

自分も傷ついて然るべきだろう。

未来を奪ったんだ。

なら俺も失うべきだ。

好きなものを。

やめよう…忘れよう。

奏でることを。

もうやめだ

すべてを拒絶して…また一人になった。

これでいいんだ。

そもそも最初から誰とも関わるつもりはなかったんだ。

これで…よかったはずだ。

「星川、どうしたんだ？成績もどんどんあがっていったるし…これなら上位の高校も視野に入れて狙えるぞ！」

「…受験すから。勉強しないと。」

「優、アンタ本当にどうしたの？」

「母ちゃん…学生の本分は勉強だろ？なんで心配そうな顔してんだよ？」

「だって、ずっと勉強してるじゃない。それに

アンタ、ギターは？」

「ああ、もういいんだ。」

「いいって？」

「やめた。受験生だしさ…まあとにかく心配すんなって…こうなりや上の高校でも狙いにいくからよ。」

「……………」

なんだよ母ちゃん。

まだ心配なのか？

普段は口酸っぱく勉強しろ言うくせによ。

いざやると心配そうな顔しやがって。

わかってんだよ。

自分でもおかしいって。

代償行為っていうんだろ？

こういうの。

何もしたくてしてるわけじゃないんだよ。

どこへ向かっていいかわからないだけなんだ。

空っぽだ。
今の俺は。

コンコンとドアをノックする音がする。

「開いてるよ。」

「よっ！」

「…何だ、親父か。」

「ちよ、もうちよつとりアクションしてくれよ。久しぶりなんだから。」

「会えて嬉しいよ。」

「棒読み!？」

「そんで? どうしたんだよ。」

「いやあ、久しぶりに息子の顔でも見にな。」

「…母ちゃんから何か言われたのか?」

「まあな。」

「…つたく…余計なことを。」

「母さん、心配してたぞ。人が変わったかのようにだつて。」

「別に、普通だよ。」

「ギターはどうしたんだ? いつも置いてあったはずなんだが…久々に弾いてみせてくれよ。」

「弾かねえ。」

「懐かしいな…思い出すよ。」

「やめたんだ。もう二度と弾くことはないよ。」

「…何かあったのか?」

「別に。受験だから勉強するのはあたり前だろ?」

「無理しなくていいんだぞ?」

「何も無いって…しつこいな。」

「無理にとはいわないさ。何も無いんだつたらそれでいい…ただ、どうしても辛かったら俺や母さんに言ってくれ。」

「…わかったよ。わかったから出てってくれ。」

「優…お前は優しい子だ。きつと今も他人のために悩んでいるんだろ。」

？」

「優しい…ね。女を傷つけるやつが優しいか。

初めて知ったぜ。」

「的外れな言動についつい噛みついてしまう。」

「…そうか。」

もう、本当に出てってくれよ。

何が言いたいんだよ。」

「他人に寄り添える優しい人間になってほしい…そう願ってお前に優って名前をつけたんだ。」

「だったらそれは失敗だよ、親父。」

「俺はそんな人間なんかじゃない。」

「お前は…他人のために涙を流せる優しい子だ。そんなふうで育ててくれて俺は嬉しいよ。」

「涙なんか…流してねえよ。」

「お前は優しい子だよ。誰が何と言おうと俺が保証する。」

「…用件はそれだけじゃないんだろ。」

「はは、参ったな。お見通しか。」

「親父が顔見せる時は大抵何かあるからな。」

「東京の営業所の課長がな…戻ってこないかって。」

「…東京。」

「いつもいつも急ですまないな。」

「いいよ、別に。早くここから消えたいし。」

「…優、俺は信じているからな。優しいだけじゃない…お前は強い子だ。転んでも立ち上がる強さを持っている。」

「そりゃ買い被りすぎだよ親父。」

「信じているぞ…お前がいつの日かまたギターを弾く日が来るのを俺は待っている。」

「親父…」

「いいってことよー。」

「鼻毛出てる。」

「ありがとな…じゃないんだ!?!」
「はっ…おかげでちよつとは元氣出たよ。」
「…頑張れよ、お前はまだ若い。」
「親父のほうは今年でよんじゅう…」
「待って!それ以上はやめて!」
まったく、しまらないなこのおっさんは。

「こんなところかな…東京の高校っていったら。」
「ありがとうございます。」

「まあ、星川の学力ならば問題ないだろう。」

「色々あるんですね。」

「まあ、焦らずゆっくりと考えればいいさ。」

「…じゃあ、ここで。」

「え?もう決めたのか?」

「ええ、この羽丘ってところで。」

「羽丘か…しかし、そこは…」

「何か問題でもあるんですか?」

「いや、問題はないんだが…とにかくもう一度

ゆっくりと考えてみるといい。」

どこでもいいよ、高校なんて。

家から近けりゃいいんだ。

どこ選んだって同じだろ。

そんなもん結局のところ本人次第なんだから。

俺は高校生活になんて何も期待していない。

するだけ無駄だ。

ただ無駄な日々を無意味に過ごす。

それだけでいいんだ。

そうすれば何も傷つかないから。

退屈でいい。

変化なんていらぬ。

安い青春ドラマをやるならば勝手にやってくれ。

「優、早くしなさいよ！入学式から遅刻する気？」

「わかってるって！くそっ…なんでネクタイってこんな面倒なんだよ。」

入学式当日。

新たに始まる日々には胸を踊らせる者もいるだろう。

「優の写真、たくさん撮るからね！」

「別にいいよ…撮らなくなつて。」

どうせ入学式なんて、校長のくそ長い

何のありがたみもない話を聞いて終わりなんだ。

晴れ舞台でも何でもない。

「…じゃ、行ってくる。」

「いつてらつしやい！」

さて、くだらない冗長なだけの高校生活の始まりだ。

「…ふあ？」

「あ、やっと起きたー！」

「…あれ？宇田川？」

「もう下校時刻だよ。家に帰ってから寝ればいいのに。」

「ああ…」

また、寝てたのか俺。

「いや、戸山。これは準備運動みたいなもんでな…」
「まだ寝る気?」

「まあな。」

「…優君、泣いとるん?」

朝日が心配そうに訊ねてくる。

「え? ああ…別に。」

気づかぬうちに目から雫が出ていた。

「悪い夢でも見た?」

宇田川も心配そうに聞いてくる。

「そんな気もするけど…忘れちゃった。」

悪い夢…か。

「…帰ろうぜ。明日はライブだろ?」

「うん! あこ、頑張る!」

「朝日も頑張れな。」

「うん!」

過去は変えられない。

だからといって今あるものまで蔑ろにするわけにはいかないんだ。

こんな風に俺なんかを気にかけてくれる連中にも出会えた。何もないわけじゃなかったんだ。

失ったものもある。

けれど得たものも確かにある。

「救われてるんだな…俺。」

「え? 何か言った?」

「…なんも言っただけよ。」

逢沢、お前は今どうしてる?

人間って案外独りにはなれないもんだぜ?

願わくば、俺のことなんかは忘れて新しい仲間と楽しくやっていくれ。

俺も進むことにするよ。

過去を忘れることはしない。
けど、それに縛られるのはもうやめだ。

ライブハウスデビュー

「よし、こんなもんかな。」

万が一…いや、かなりの確率で知り合いに
会うだろうから軽く変装していかねばならない。

帽子と眼鏡（親父の）にマスクなんかしてたら
さすがにバレないだろ。

あとは不審人物に間違われないうよう祈るしかない。

「もう行くの?」

「ああ、早めに行っておかないとな。」

「まさか、優がライブに行くなんてねえ…」

「あーちゃんが出るんだ…それに個人的に興味もあるしな。」

「そうかい。」

「何か言いたそうだな、母ちゃん。」

「最近の優は楽しそうだな…って思っただけ。」

「そう見えるか?」

「うん…一年ぐらい前のアンタは見てられなかったからね…」

「いつの話してんだよ。」

「でも、良かった。優がそんな顔をするようになってさ。」

「まあ、最近はそれなりに楽しい…かな。」

日常はなんやかんやで俺を音楽へと引き寄せる。

今日という日は踏ん切りをつけるのには良い日なのかもしれない。

「それじゃ、行ってくるよ。」

「気をつけてね。」

「やっべー…緊張する。」

ライブハウスGALLAXY。

その建物の前で俺は立ちつくしていた。

中に入ってチケットを買うんだよな？

なにぶん初めてだからわからないことだらけである。

もう少し事前に調べるべきだったな。

「当日券、一枚でお願いします。」

「はい！」一枚ですね、1200円です。」

中に入り、チケットを買う。

とりあえず第一関門はクリア。

開場まで時間があるので少しばかりライブハウス内を散策する
ことにした。

「これって…」

色々と飾られている写真の中にPoppin' Partyという
文字を見つけた。

「へえ…前に一回ここでライブしてたんだな。」

写真には二ヶ月ほど前に行ったであろうライブの様子が写し出さ
れていた。

「なんか、みんな楽しそうだな。」

「ですよね！」

「うおっ!？」

不意打ちはやめろよな。

一体誰だよ。

「って朝日…」

しまった。

「えっ?」

くそ、やはりいたか。

だが俺が誰かまでは気づいていないようだ。

「あ、いや…今日は朝日が綺麗でしたねって…ハハハ…」

「え、えっと…」

なんか気の利いたりアクションせえや。

俺がスベったみたいだろうが。

「楽しみすぎて早く来すぎちゃいましたよ。」

「私も今から凄く楽しみです！」

お前はスタツフだろうに。

仕事そっちのけにするなよ？

さてと、ボロを出す前にテキトーに話合わせて

退散するでしょう。

「スタツフさんは何か楽器とかやっていたりするんですか？」

「は、はい…ギターを一応…」

何が一応だ。

ストランドバグなんてモンを引つ提げて、とんでもねー演奏する
モンスターだろうがお前は。

「そうなんですか…バンドとかは組んだりしないんですか？」

「組みたいとは…思ってるんですけど、なかなか集まらなくて…」

合わせられる奴がないんだよ。

とんでもなさすぎて。

外部に目を向ければ可能性もあるだろうが…都合よくギターが空
いている高いレベルのバンドが

はたしてあるかどうか。

「頑張ってくださいね。応援しますよ。」

「はい！楽しんでいってくださいね。」

いつまでも燻ってんなよ？

あの日のお前のギターは無駄なんかじゃ
なかったんだ。

確かに俺の心を動かしたんだ。

だからもう一度聴かせてくれよ。

お前の演奏を。

「ポピパピポパーティーにようこそー！」

「Poppin, Partyです！」

すげえ：ポピパポパーティーを噛まずに
言つてのけた：さすがは主催バンドの人な
だけはあるな。

ていうかあれ：変形ギターじゃね？

すげえの使つてんな：ビジュアルもバツチりつか。
しかし、ボディが赤色とはわかつているじゃないか。

「あれが、ポピパさんとやらね。」

ギターボーカルにリードギター、ベースにドラム：そんでキーボー
ドか。

思つたよりも普通のバンドだな。

「聴いてください：Returns。」

ちよ、待つて：もう始まんのか？

まだ心の準備ができていないんですが。

開幕はリードギターのギターソロから始まり
ボーカルが歌い始める。

なんつーか、静かな立ち上がりだな。

会場全体もシーンとしている。

もつとこう、盛り上がるもんかと思つていたが。

続いて聴こえてくるのはキーボードの旋律。

うん：久しぶりに聴いたがいつ聴いても綺麗だな先輩の音は。ピ

アノの発表会以来だったっけか。

ドラムの音が加わり演奏は激しさを増す：が

どちらかというとき哀しい曲調なのは拭えない。

観客の中には涙を流している人さえいる。

一発目から泣かせにくるとは：

しかし、そんな観客とは裏腹にバンドの人達は楽しそうに演奏して
いた。

Returns：たぶん、原点にたち帰るとかそんな感じの意味な
のだろう。それは俺が忘れていたものでもあった。

ステージが暗転し、曲の終わりを告げる。

良い曲だった。

観客は一樣に感動し、涙を流している人もいたがこれはこれで良かったのだろう。

けど、まだまだこんなじゃ足りない。

もっと聴かせてくれ、ポピパさんよ。

あと100曲くらいはやってくれ。

怒涛のゲストバンド達

「ハローハッピーワールド！」

あれ？

「みんなー！ハローー！」

「あの人って…」

俺にこのライブのチラシを渡してくれた

金髪美少女じゃないか？

なるほど、バンドの人だったんだな。

「とびつきりの笑顔で——」

笑顔か…

それがこのバンドのコンセプトなんだろうか？

ちなみに俺が笑顔を見せると決まって赤ちゃんが泣き出すんだが…なんでだろう。

あと、何か着ぐるみ(?)のピンクのクマさんみたいなおるんだけど…あれってデフォなのか？

「えがお・シング・あ・ソング！」

そうして始まった2曲目。

先ほどのポピパさんとは対称的な軽快でアップテンポな曲調だ。

あのピンクのクマさんDJだったのかよ。

一人だけ存在感がブツちぎってんな。

ボーカルの人が宙吊りになって浮いたり、バク転したりとかなりアクシヨンの激しいバンドだった。

「色々あるんだな、バンドにも。」

改めてそう思った。

さて、お次は…

「Pastel*Palettesです！」

出たな、通称パスペレ。

というかよくよく考えてみるとアイドルまで呼んでしまうなんて

凄いな…ポピパさんって一体何者なんだ？人脈すごすぎるだろ。

「きゅ〜まい*flower!」

ボーカルの人って…文化祭の時にテンパってグダグダな進行してた人だよな…確か彩ちゃんとか呼ばれてたっけ。

それから白鷺 千聖さんに、日菜先輩…ドラムの人は大和 麻弥さんだったっけか。何度か学園で見かけたことはある。あとの一人は見たことのない人だが…アイドルというより何だかモデルさんみたいだ。

「それにしても、キレツキレやないか動き…」

「ごめんなさい彩ちゃんさん。」

正直ちよつとバカにしてみました。

勝手に残念系美少女のカテゴリに入れようとしてました。

動きを見たらわかる。

たくさん練習したであろうということを振り付けが物語っていた。

他の四人もそれに遅れることなくついていている。

アイドルだからバンドは二の次…あくまでもプロモーションの手段にすぎないなんてことはないんだな。

みんな、全力なんだ。

日菜先輩が以前、アイドル活動が面白いって言ってたのがちよつとはわかった気がする。

「Aftergrowです！」

相変わらずかっつけえ名前だわ。

幼馴染同士で組んだバンドらしいが。

尊いよな…幼馴染って存在は。

大事にしなきゃいけないよな。

わかるわかる。

演奏するのは新曲だそうだ。

思ってたけど、どのバンドも皆フルスロットルすぎやしないか？体力持つのかよ…持つんだろうな。

演奏のほうは全員息ピッタリだ。

幼馴染なのだから当然だと言葉にするのはカンタンだがそれで実

現できるのなら世の中苦勞はしない。

ギターもベースもドラムもキーボードもすべてが高い次元でまつまっている。

本当にすげえよ…。

「良いね！GALAXY！」

美竹先輩：楽しそうだな。

いつも仏頂面なイメージしかなかったけど、あんな楽しそうな顔もするんだな。

ちよつと意外。

「次はRoselia。」

そうだった。

まだこの人達が控えていたんだった。

「Roseliaです…Poppin, Partyを祝してこの曲を…」

湊さん…この人は相変わらず表情が変わらない。

美人さんなのに、勿体ない。

「FIRE BIRD！」

などといらぬことを考えているうちに演奏が始まる。

FIRE BIRD…火の鳥。

不死鳥…フェニックスってことか？

何はともあれ相変わらずのハイクオリティだ。

地の底から音が響いてくるかのような錯覚すら覚える。疾走感がパネエ。

もうホントにプロと遜色ないと思うよあなたたち。

ポピパさん…自分たちが喰われかねないってリスクもある中でよくこの人達を呼んだものだ。

結果、どのバンドも甲乙つけがたいほどに素晴らしかった。こんなんだったら俺、毎回ライブ来るけどな。

大ガールズバンド時代。

誰が言い出したかは知らないが、それもあながち間違いではないんだと改めて認識させられた。

次もその次も何度だつて

「えー、次の曲で最後です！」

「マジかよ。」

もう最後か…本当にあつという間のライブだった。周りからもちらほらと終了を惜しむ声があがる。

あがる。

ハローハッピーワールドにパスペレ、AftergrowにRoselia…それぞれに個性があり、それを存分に

生かしきっていた。

けど最後はやはりポピパさんに締めさせていただかないとな。

「やれて良かったなつて思います！」

そりや良かった。

彼女達がどのような経緯でこの主催ライブを企画したのかはわからないが…そう思えたのならそれはもう成功したも同じだと思う。

「みんなとポピパで良かった！」

そんな中、ギターボーカルの人だろうか。

もの凄くこつ恥ずかしいセリフを言いよつた…。

市ヶ谷先輩顔真つ赤だけど…どうやらプチサプライズだったようだ。

あんなセリフを面と向かって言われりやあな…

思つていてもそうそう口には出せないぞ。

けど、良かったね…先輩。

それは愛されている証拠だよ。

そのセリフが聞けただけでも今日ライブに来た

甲斐があつたというものだ。

次の曲はそのギターボーカルの人が作曲した曲らしい。

ポピパさんのすべてが入ってる曲…だそうだ。

「Dreamers Go！」

軽快な音楽をバックに曲が始まる。

声だけではなく身振り、手振り、足踏みと
身体全体を使つての演奏だった。

気づいたら、俺自身もリズムに乗っていた。

…なんだか恥ずかしいな。

でも、音楽つて凄いやな。

魔力みたいなものがあるっていうか…気づいたら乗せられちまっ
てるんだもん。

「イキイキしてんなあ…みんな。」

終わってほしくない。

ずっと観ていたい。

願わくば、終わらないでくれ。

きつと喪失感がエグいことになる。

そんな願いも虚しく曲は終わりを迎える。

ああ…終わってしまった。

「ありがとうございますー！」

寂しいけど、しょうがないか。

「アンコール！」「アンコール！」

数人の客がアンコールを口にする。

すかさずそれは周囲へと伝播した。

アンコール…まだそれがあつたか！

つてことはもう一曲聴けるってことか！

「それじゃあ、もう一曲——」

ポピパさんもそれに応える。

さすが、わかつてらつしやる。

「——キズナミュージック！」

ポピパさん、本当にありがとう。

市ヶ谷先輩の…あーちゃんの居場所になつてくれて。あなた達に
は感謝してもしきれませんよ。

「敵わないな…こりゃ。」

改めて、そう思った。

だって、先輩のあんな楽しそうな顔…

初めて見るもん。

俺もすつかり彼女達の虜になってしまった。

朝日：お前がポピパさんを好きな理由、ちよつとだけどわかった気がするよ。

何かこう、勇気を貰えるよな。

最後の曲。キズナミュージックだったか。

曲名の通りの全員の絆が感じられる：そんな曲だった。

また機会があればライブをやってほしい。

次もその次も何度だつて——行きますよ。

あなた達のライブに。

「Poppin, Partyでした！ありがとうございます！」

案の定とてつもない喪失感に襲われる。

でも、来て良かった。

そう思えるライブだった。

「優君？」

あれ、何でバレた？

：そうだった、暑苦しくてマスクと帽子はずしたんだつた。

「つて、レイさん？」

まさかこんなところで会うとは。

「ライブ、観に来てたんだ？」

「ええ、レイさんも？」

「：うん。」

そういや、ポピパさんの中に幼馴染がいるつて

話だったつて。

「何だ、レイの知り合いか？」

「うん。」

「え？」

ええつと：誰だこの人？

金髪だしスカジャンだし目つきも怖いし：完全に見た目がアレな人なんですが。

「佐藤 ますき：コイツと同じバンドのドラマーやってんだ。」

なるほど、同じバンドの人か。

ドラマーなのかよこの人。

「星川 優です。」

「優っていうのか。よろしくな。」

「は、はあ…」

できればよろしくしたくはない。

「よ、良かったですね…ライブ。」

「うん…花ちゃん、とても楽しそうだった。」

「ハナちゃん？」

「リードギターの花園たえってやつ。ウチらの

バンドのサポートやってたんだ。」

「ああ…やってたってことは…」

「…うん。」

「…良かったんですか？そうそういないですよ…

あんな腕の良い人は。」

「うん、いいんだ…一緒に弾けただけでも十分。」

大人だなあ…この人は。

「お前、わかるのか？」

「一応、ギターを弾いてたクチなんで。」

「へえ…そうなのか。」

「ええ、過去形ですけどね。」

「何だよ、やめちまったのか？」

「まあ、色々とありました。」

「そつか…一緒にやれたらって思ったんだけどな。」

「でも…今はすげえ弾きたくてしょうがないんです。」

「そりや、ライブの熱にあてられたんだろ。」

熱か…そうだな。きつとそうだ。

それにしてもいつ以来だろう…こんな気持ちは。

とてつもなく晴れやかな気分だ。

「今度機会があったら、一緒にやろうぜ。大抵ここでドラム叩いてるからさ。いつでも来いよ。」

「…考えとききます。」

誰かとやるなんて考えたこともなかった。
だけどそれも悪くはないのかな。

「いつか、私達のライブも来いよ。すっげー音
聴かせてやるからさー！」

「楽しみにしておきますよ。」

レイさん達と別れ帰ろうかという矢先、朝日の姿を見かけた。せつ
かくだし、声でもかけてくか。

「お疲れ…つてうおい！」

めっちゃボロ泣きしてんだけどこいつ。

お前、スタツフだよな？

「優くん…」

「ああ、なんだ、感動しちゃったのか？確かに良いライブだったよな。」

「うん…ボビバさん…良いライブやっだ〜…」

「あーだから泣くなつて…な？」

ボビバさんってなんだよ。

「ほら、ハンカチ使えよ。」

「あ、ありがとう…」

「つたく、スタツフだろ？仕事残ってるんだろ？気持ちわかるけど
さ…」

「うん…でも、でも…ボビバさん！」

え、何？無限ループ？

ていうか、色んな人に見られてるんだけど…何か俺が泣かせてるっ
て誤解されてそうで怖いわ。

違うからね？フオローしてる側だからね？

「もう、いい加減泣き止めな？何か俺が泣かせてるみたいじゃん。」

「二人とも…何してるの？」

「あ、いや！違うんですこれは…って、何だ…戸山か…びっくりした。」

「六花…大丈夫？」

「うん…」

「ほら、機材の片付けやらなんちゃらあるんだろ？行ったほうがいいんじゃない？」

「うん、これ…ハンカチ」

「いや…お前の涙と鼻水まみれじゃねーか！そんな趣味はねーよ…いいよ、やるよそれ。」

「あ、ありがとう。それじゃ！二人ともまたね！」

「ああ、またな。」

いつかはお前もだぞ。

今度はスタツフとしてじゃなくてさ…バンドのメンバーとしてステージに立てよ。

その時は行くからさ。

あまり待たせるなよ？

「…優ってなんだかんだで六花の心配してるよね？」

「え、そうか？」

「うん。」

「なんかさ、ほっとけないんだよ…あいつ。」

せっかくあんすげえ演奏できんのに…バンド組めないなんて勿体ないじゃん。」

「メンバー…集まるといいね。」

「だな。」

「優は？ギターやってたんでしょ？バンド組みたいとは思わないの？」

「おいおい、誰だよバラしたやつ。」

「まあ、いずれはバレただろうけど。」

「早いか遅いかなだけの話か。」

「俺は…いいかな。周りと合わせるとか無理だと思うし。」

「ソロでやるほうが性にあってると思う。」

「でもさ、良いライブだったよな。」

「うん…そうだね。」

「またやらねーかなあ…ライブ。」

「そのうちまたやると思うよ。お姉ちゃん…また突然ライブやりたい

とか言い出しそうだし。」

「そうか…そのうちか。」

バイト、探さないとな。

俺の小遣いじゃ明らかに足りないし。

そのためには勉強も頑張らないと。

さすがに母ちゃんも許してはくれないだろうし。

…っていうかイヤなこと思い出した。

もうすぐ期末試験あるんだった。

まずはそれを乗りきらないとな。

「戸山。今度勉強教えてくれ。」

「どうしたの？急に。」

「いや、何か俺も頑張ろうかなーって思ってたさ。」

立ち止まるのはもうやめたからな。

…ん？

ちよつと待って。

「…お姉ちゃん？」

今お姉ちゃんって言わなかった？

戸山に姉ちゃんいるのは知ってるけどさ…まさか…

「お姉ちゃんって…もしかして、ポピパさんの人？」

「そうだよ。あれ？言ってなかったっけ？」

「…初耳っすよ、戸山さん。」

…そうだったのかよ。

そういうことは早く言えい。

「あーつと…あの香澄さんって人？ギターボーカルの。」

「うん。」

言われてみりゃ、ちよつと似てるかもしれない。

性格はなんか正反対っぽいけど。

「そっか…感謝しねーとな。」

「え？」

「いや、なんでもね。」

いつかはお礼を言わないとな。

市ヶ谷先輩のこともだけど。

俺自身の背中も押してくれた彼女達に。

これで漸く、最後の一步が踏み出せる。

「おかえり。」

「ただいま…ああ、母ちゃん。」

「何？」

「ちよつとうるさくなるかもだけどさ…今日だけは見逃してくんね？」

「…わかったよ。あんまり遅くまでやるんじゃないよ。」

「わかってる。」

思えばずいぶん長い間回り道をしていた気がする。

「ごめんな…。」

身勝手な理由でお前を遠ざけて。

これで許してくれとは言わないけれど…

「久しぶりに思う存分暴れさせてやるよ。」

小さな変革者

主催ライブから数週間。

念願の夏休み。俺は変わらぬ日々を過ごしていた。

いや、変わったことが一つだけある…。

日々を構成するルーティンの中にギターを弾くことが加わったことだ。

しかし、ブランク明けなこともあつてなかなか勘は戻らない。

こればかりは少しずつやっていくしかないか。

「けど、どうせやるならアンプに繋いで解放感のあるところでやりた
いよなー。」

ググってみるか。

近くになんかスタジオでもあればそこで…っていつても金欠だし
なー。

タダで弾き放題なんて場所なんかあるわけないし…やっぱバイ
ト探すつきやねーよな。

と、外に出てきてみたはいいものの…

バイトなんてしたことないし。

接客業はまあ…無理だな。

どうしたもんか…

このジャンルがつぶれた時点でほぼ詰みくさいんだが。

ていうか、そもそも選んでる場合じゃないか。

バイト求人誌とか募集中の張り紙してるところか見て、受けるしか
ないだろう。

「星川 優さん…ですね？」

「ん？」

一瞬、知り合いかと思つたが…誰だこいつ？

ネコ耳を模した黒いヘッドフォンをした…

小学生の女の子…いや、制服着てるから中学生か？

「でも、小学生にしか見えねーな…」

「失礼ね！小学生じゃないわよ！」

「あ、ごめん…地の文が口に出てたわ。」

で、何か用？と質問すると急に改まった感じになり、コホンと二つ咳払いをした。

「…失礼しました。私、わたくし こういうものです。」

そう言い、何かを手渡してきた。

名刺か何かだろうか。

見ると名刺のようだった。

綴りが英語と数字だけだったので読みづらいことこの上ない。

「PRO…DUCER…？」

プロデューサーか？

…このちびっ子が？

名前はCHU…？読み方がわからん。

「その顔は…信じていませんね？」

「え、いや、そういうわけじゃねーけど…これ、何て読むの？」

「チュチュ…私のプロデューサーネームです。」

「そのプロデューサーさんが俺なんかは何のご用で？」

「レイヤ…和奏 レイはご存知ですね？」

「ああ、知ってるけど。」

「彼女からあなたのことをお伺いしたものですから…個人的に興味が湧いてこうしてあなたに会いに来たというわけです。」

「てことは、お嬢ちゃんはレイさんが所属してるバンドのプロデューサーってことか。」

「YES！」

何で急に英語？

でも、ウソをついてるようには見えないな。

本当にプロデューサーなのか。

このちびっ子が。

「RAISE A SUILEN 通称RASと呼ばれています。」

「RAS…まさか、俺をスカウトしに来たとかじゃないよな？」

「ええ、話が早くて助かるわ。」

「そうなんかい…急展開すぎるだろ。」

「スカウト?マジで言ってるのか?」

「いやいや、ちよつと待て。俺にそんな腕はねーよ。」

「もちろんタダでは言いません。あなたの

ギター力が私の求めるモノに届かなければこの話はなかったこと
になります。」

「ギターぢから?何を言ってるんだ?」

「勝手に話を進めるし…プロデューサーか何か知らんが付き合っ
てられんな。」

「ま、待ってー!」

「悪いけどさ、スカウトなら他をあたってくれよ。だいたいお嬢ちゃ
んのバンドってガールズバンドだろ?男の俺が出る幕なんかないや
んか。」

「そんなの関係ない!」

その叫びに思わず足をとめる。

なんなんだ?その必死さはどこから来る?

お前もなのか?

俺が見てきたガールズバンドの人達と同じ…本気の眼だ。

「ひとまず聴いて!」

「これは…?」

「聴けばわかる!」

有無を言わせぬという感じだった。

渡されたのは音楽プレーヤーか?

…とりあえず聴けと?

「はあ…わかったよ。」

イヤホンを差して眼を閉じる。

聴けばわかる…その言葉の意味はすぐにわかった。

「…おいおい。」

なんだよ、こりゃ。

言葉では説明できない。

すごいとかヤバいとか…そんなお粗末な感想はとてもしゃないが抱けない。

それは失礼な気がしたから。

唯一つ言えるのは…聴く者…観る者を魅了する

圧倒的なサウンドパワー…それがこの曲にはある。

あの合同文化祭以来の衝撃を受けた。

最後まで聴くまでもない。

「…どうでした？」

「…この曲、お前が作曲したのか？」

「Of Course!」

わからないもんだな…世の中つてのは。

普段は気弱な地味なメガネっ子が…

ステージに立つと豹変してすげえギタープレイを魅せたりするし…。

かたや、どう見ても小学生にしか見えないこんなちびっ子が、こんなとんでもない曲を作曲したりもする。

「…曲名はR I O T。ライオット 暴動、騒動、騒乱などの意味があります。」

「暴動…ね。」

「私は、私のバンドが奏でる音で大ガールズバンド時代と呼ばれるこの時代を終わらせる！」

「いや、終わらせちゃダメだろ。」

でも本気だ。

本気で言ってるんだ…こいつは。

少しばかり興味が湧いた。

聴くだけでこれだからな。

実物は一体どんなものなのか。

「ガールズバンド時代にお前の奏でる音楽で

暴動でも起こそうっていうのか？」

「そうよ！そのためにはピースが一つ足りないの。」

「ギター…か。」

考えもしなかった。

俺がバンドで演奏するなんてことは。

「あなた自身の気持ちをまだ聞いていませんでしたね？あなたは一体どうしたいの？」

俺自身の気持ち？どうしたいか？

そりゃ、決まってるだろ。

俺だってギターリストだぜ？

こんな曲聴かされて何も感じないわけないだろうが。

「…でも、ブランクあるぞ？」

「ブランク？そんなものどうにでもなるじゃない。」

「言うじゃねえの…ちびっ子。」

「チュチュ…もし、あなたにその気があるのならこれからは私のことをそう呼びなさい。」

どうやら、のんびりはさせてくれないみたいだな。

止まっていた時は動き出したかと思えばものすごい速度で加速していく。

「ほのぼのの日常パートも悪くはねーけど…こっちはこっちで面白そうだな。」

「何の話よ？」

「いや、何でもねえ…俺も乗らせてくれよ…その

暴動ってヤツにさ。」

「…決まりね！」

「ああ、よろしくな…チュチュ。」

俺の奏でる音を

「……だよな?」

眼前に広がるは超高層ビル。

見慣れぬ建物に俺は圧倒されていた。

あのガキンちよ、こんなところに住んでるのか。

「お、お邪魔しまーす……」

おいおい、高級ホテルって言われても

信じるレベルだぞこれは…想像以上にぶっ飛んだヤツだな…あの
チュチュっての。

「お待ちしておりました!」

おっと、誰か迎えに来てくれたのか。

振り返れば、髪の毛を見事なパステルカラーに

染め上げたツインテールの女の子がいた。

可愛いってのを体現したかのような子だ。

上から下までコーディネートがパねえ。

「星川 優様ですな?」

「そ、そうです。」

「申し遅れました! 私^{わたくし}、チュチュ様のキーボードメイド、パレオと申
します♪」

「パレオちゃんね、よろしく。」

「よろしくお願ひします♪」

うん…名前に関してはつつこまないよ?

彼女に案内され、エレベーターへと乗り込む。

「えーと、パレオちゃんだったよね?」

「はい♪」

「すつげえところに住んでんのな、あのチュチュって子。親が何かやつ
てたりするのかな?」

「はい♪チュチュ様のご両親は音楽関係のお仕事をされていて今は海
外の方にいらっしやるんです! チュチュ様が高校生になられてから

はお一人でお住まいなんですよ♪」

「はえー…なるほどねえ。ていうか高校生って…俺とタメだったんか。」

あれで、高校生なんか。

もしかしたら2、3年生とか？

「正確には、飛び級されているので13歳です。パレオと同じ年なんですよー！」

ああ、だよな。

飛び級って本当にあるんだな。

「…え？…ちゆ、ちゆうがくせい!？」

チュチュ様と同じ年って…この子も!？」

ていうか、スルーしてたけどチュチュ様って何なん？そーゆー主従関係？

あとさ、パレオって水着の名前だよな？

俺は好きだけどさ…ってそうじゃねえわ。

「はい…中学二年生ですよ♪」

「中学二年生!？」

この子が宇田川よりも年下なの!？」

マジかよ！信じらんねえ！

「着きました♪」

色々と処理しきれぬまま最上階へと着いた。

「おお…プールサイドまであるよ。」

何でもアリだな、ホントに。

もう、何が出てきても驚きそうにないわ。

「来たわねー！」

「どうも。」

中へ入るとチュチュが偉そうに椅子にふんぞり返っていた。どうでもいいけど、サイズ合ってなくない？

「パレオ！」

「はい！チュチュ様！」

そう返事したパレオちゃんが取り出したのはビーフジャーキーだった。それをグラスへとぶち込む。

ジャーキーって…身体に悪いぞー。

そんなんばつか食ってたら。

「welcome！ユウ・ホシカワ！私のレコーディングスタジオへ！」

いや、確かにすごいわ。

ここで練習できたら、そりや最高だろうな。

「改めまして、プロデューサーのチュチュです。あちらがマスクینگ。」

「おう、よろしくな。」

この人は確か、ますきさんだっけ。

てか、キングで。

「あ、あのー…」

ますきさん？

顔、近いんすけど…距離感間違ってますん？

ドキドキよりヒヤヒヤするんですけど。

「ますき、優君困ってるじゃない。」

どうしようかと思っていたら、レイさんが助け船を出してくれた。

「ご存知でしょうけど…ベースボーカルのレイヤよ。」

「優君久しぶり…でもないか。」

「そつすね。」

「そつちがパレオ。」

手を振るパレオちゃん。

うん、かわいいな。

彼女もメンバーの一人だったのか。

キーボードメイドって言ったから、キーボード担当なんだな。なるほどね。

この中に割って入れるかどうかはコイツの言う

ギター力ってヤツを見せつけなきゃならないわけか。
はっ…おもしろーじゃん。

「お眼鏡にかなわなきゃ、このままとんぼ返りってこともあり得るわけね。」

「そうなるわね。」

「そりゃ困るな。星川 優先生の次回作にご期待ください！ってか？
冗談じゃねえ。」

「？」

「でも、いいじゃん…燃えるねそういうの。」

「ギターならたくさんあるから、好きなのを使っていいわよ。」

「いや…こいつでいい。」

こいつが一番しつくり来る。

長年の俺の相棒。

「なら、いいけど。じゃ、レコーディングブースに入って。」

「ああ。」

耳の穴かつぽじってよく

聴いとけよガキんちよ。

俺の奏でる音をよ。

「READY?」

「おう、いつでもいいぞ。」

さあ、暴れようか。

表舞台へ

「……………」

さあ、どうだ!?

全身全霊…今俺ができる最高の演奏をしたつもりだ。これでダメだったら…もうしようがないな。

「どうだった?俺の演奏は。」

「……………」

あ、あれ?

ちよつと?無言が一番怖いんですけど。

チュチュ様?

何か言つて?

「…クは?」

「ん?」

「…ブランクがあるって言つてたわよね?どのくらい?」

「んー、一年くらい…かな。」

「一年!?それほどの演奏力ちからを持ちながら…どうして一年も!」

「え、いや受験とか…その…色々とあつてですね…」

なんか、ご立腹?何でだ?

てか、それほどの演奏力って…

「えーつと…?」

「…合格よ。」

…合格。

「ユウ・ホシカワ。貴方のRAS入りを許可するわ!」

マジ?合格!?

「はあ…合格か…良かった。」

「ブランクを感じさせないSweetな演奏だったわ!」

Sweet?とりあえず、褒めてくれてるってことで解釈していいのかな?

「お前…なかなかやるな。」

マスクキングことますきさんからもお褒めの言葉がかかる。

「すごいです！マツスーさんが褒めるだなんて

花さん以来ですよ？」

どうもね、パレオちゃん。

…でもまだまだなんだ。

改良の余地はまだある。

これで満足なんかしちやいられない。

…そうだろう？チュチュ様よ。

「やっぱりすごい。昔のまま…ううん、昔以上に力強い演奏だったよ。」

「いやあ、まだまだですよ…レイさん。」

「ユウ…今日から貴方はRASのユウよ！」

「まんまやんか。」

「Shut up！」

「RAISE A SUILENの意味は御簾みすを上げろ…Japan eseでいうところの簾すだれね…」

簾すだれって…あれか？

なんか、部屋の入り口とかにあるぶら下がってる暖簾すだれみたいなやつ。

「それを掲げることが表舞台に立ち続けるって

意志の表明になる！」

「表…舞台。」

「YES！」

…表舞台か。

馴染みのない言葉だが…なんかいいね。

チュチュ…お前にホイホイついてきて正解だったぜ。

面白いモノが見れそうだ。

こいつは本気で大ガールズバンド時代を終わらせる気なんだ。動機はともかくとして、その熱量はおよそ中二のガキんちよが抱くモノ

にしちやデカすぎる気もするが…チュチュにはチュチュなりの信念があるのだろう。

「これで俺が女子だったらねえ…」

何も文句はないんだけど。

「まだ、そんなことを気にしているの？ 貴方の前にも何人ものギターストガールズ達をスカウトしたけれど…誰も私の求める音を出せる子はいなかった…タエ・ハナゾノと貴方ぐらいよ。性別なんて些細な問題なの。私の求める音が出せるかどうか…それが重要なよ。」

「そうか…」

ちびっ子とかガキンちよとかバカにしてたけど…こいつも色々と考えてんだな。

「数ヶ月後にはライブを計画しているから、それまでには完璧パーフェクトに仕上げなさい！」

「え、ライブ!？」

「当たり前じゃない！ ユウ…貴方も立つのよ！」

表舞台へ！そして、最強さいきょうの音楽を魅せつけてやるのよ！」

「…最強。」

わりと安っぽい言葉もこいつが言うと言説力がある。

「YES！最強！ガールズバンド時代は終わりを

告げ…ニューワールド新たな世界が始まるのよ！」

新たな世界ね。

是非とも見てみたいもんだな。

それにしても、トントントン拍子に話が進みすぎて実感がまるで湧かねえ。けれど、やるからには…こいつのいう最強の音楽を奏でてやるよ。

そうだよな…男だとか、女だとか関係ないよな。

時には俺のような異端児も必要だろう。

小さいことを気にしすぎていたようだ。

「チュチュ。」

「何かしら？」

「ますきさん…パレオちゃん…レイさん。」

「？」

「よろしくお願いします。」

血が騒ぐってこういうことか。

今、ようやくわかったよ。

ラーメン銀河にて

「らっしやい！おう、お嬢。久しぶりだね！」

「大将、久しぶり。」

「こ、こんばんは。」

練習帰りに俺はますきさんに誘われ、ラーメン屋のラーメン銀河へと来ていた。

やり取りから察するに常連さんなのかな？

お嬢つてのは？

「お嬢の連れかい？」

「まあ、そんなようなもんです。」

「大将、こいつギタリストなんだ。今回バンドでやってんだよ。」

つい最近まで廃業してましたけどね。

「へえ、そうなのかい。」

「優。お前バイト探してるって言ってたよな？」

「はい。」

「大将、こいつここで雇ってやってよ。」

「えっ!？」

「いいよ。」

「ええっ!？」

待て待て待て。

そんなあつさりと!？」

秒で決まったんだけど…いいのかわか?

色々過程すつ飛ばしてっけど。

履歴書とか面接とか。

「お嬢が連れてきた子だ。丁度人手も欲しかったところだし。」

…いいのかわか?

ただラーメン食いにきただけのはずが…バイトする流れになっちゃまったよ。

「あの、履歴書とかないんですけど…」

「今度で大丈夫だよ。名前は？」

「星川 優です。」

「優君、お嬢とバンドやるの大変じゃないかい？」

「え？いや、そんなことは…」

なくはないな。

この人隙あらばガンガン音を振じ込んでくるんだもん。ギタリスト泣かせてやつだよ。

今まで何人泣かされてきたことやら。

「お前が良い音出すからつい引つ張られてノツてきちまうんだよ。」

そうなるところらも負けじと…つてなっちやうわけで。

「最終的には揃ってチュチュに怒られちまうんですよね。」

「でも、やっぱりギターがいると違うな。花の

やつが抜けてからはずっと打ち込みだったからさ。」

そう言ってくれるのはありがたいですけども。

「昔は狂犬…なんて言われてたのにねえ…」

大将が感慨深げに呟く。

「狂犬って…ピッタリじゃ…あ、いや失礼なことを言う輩がいるもんっすね。」

「そんなウデで何で今までバンド組まなかったんだよ？」

「バンドってのに興味がなかったもんで。」

「というか純粋に友達がいなかったただけなんだけど。」

「私はさ、ずっと待ってたんだ。一緒にやれるやつ。全力を出してもついてきてくれるやつらをさ。」

それが今のRASってわけだ。

「恥ずかしながら、つい最近までガールズバンドってのがこんな本格的なものだとは思ってなかったんですよ。」

最初はバカにさえしていた。

女子が演奏なんかできんのか？って。

でも違ったんだ。

「ましてや、自分よりもすげえギタリストがいるだなんてのも思っていなかったし。」

まあ、それは自惚れってやつだったけど。

「お前よりもすげえギタリスト?」

「ええ：衝撃を受けたっつーか：ソイツは俺の中にある常識をブツ壊すには十分なくらいとんでもない演奏をしやがったんですよ…。」

「…そんなやつがいんのか。」

まだメンバー集めてんのかな。

あいつの演奏こそ陽の目をみるべきなんだ。

このまま終わるだなんて勿体なさすぎる。

「ラーメンお待ち!」

おっ美味そうだ。

インスタントじゃないラーメンなんて久しぶりだな。

「食うか。」

「そうっすね。いただきます。」

しかし、人生何が起こるかはわからないな。

何も期待していなかった高校生活。

この数ヶ月の間に色々なことがあったものだ。

数ヶ月前の俺に言っても信じちやくれなйдらうな。

「この大将もさ、ギタリストだったんだよ。」

「え、そうなんですか?」

「デスギヤラクシーってバンド。ウチの親父も

ドラマーでさ、大将と一緒にバンド組んでたんだ。」

ますきさんの親父さんもドラマーだったのか。

ていうか名前…攻めすぎだろ。

「頑張りなよ!優君。」

「はい、もちろん。」

今はまだ怒られて修正ばっかくらってますが…そのうち必ずあの口の減らぬお子様を唸らせてやりますよ。

「ぐちそうさまでした。」

食った食った。

「あいよ!これからもよろしく!スタッフとしてもね!」

「何か採用って流れになってるんですけど…」

「嫌だったかい？」

「とんでもないです！バイト探してたのは事実ですし…でもこんなあつさり決まっちゃっていいのかなって…」

「そりゃ、後日形式的な面接はするけどね…一生懸命頑張れる子ってのは話してみてもわかったからさ。」

「普段は冴えねーけど、演奏になると別人みてーになるんだよな。」

「…よろしくお願いします。」

幼馴染と再会して、朝日 六花っていうとんでもないギタリストに出会って、ガールズバンドというものを知って…過去にも一応踏ん切りをつけて、やめてたギターをやり始めて、初めてバンドにも参加して、バイトもやることになって……うん。

数ヶ月前の俺。

とんでもねーことになるから覚悟しとけな。

幼馴染のこれまで

「お邪魔します。」

「おー来たか。」

「へえ…」

久しぶりに蔵の地下にあるこの部屋に入ったけど、やっぱり広いな。

このアンプとかも懐かしい。

忍びこんでギター弾いてたら先輩のじいちゃんにクツソほど怒られた記憶あるわ。

「去年から許可貰ってな、この部屋使わせて

もらってんだよ。」

「なるほど。」

よく見るとドラムやキーボードなどの機材も

見受けられた。

「ここでもいつも練習してるんですね。」

「ああ。今日は練習もないから、たまにはお前にも構ってやらないと
なって思ってたさ。」

「…お心遣い痛み入ります。」

「…何で泣きそうなんだよ。」

『久しぶりにウチ来るか?』

市ヶ谷先輩から急にこんなメッセージが来た時はびっくりした。
こんな一秒でOKするに決まってるだろ。

この、素っ気ない文章も実は寂しさの裏返しか。

なるほど、本当はきてほしいのか。

素直に言ってくれりゃあいいのに。

「ライブ、良かったですよ先輩。」

「やっぱり来てたのか。」

「もちろんですよ。それにしても先輩…あんなに楽しそうな顔するんですね。」

「そ、そうか?」

「良い人達に出会えたみたいで…本当に良かったですよ。」

「ま、まあ…な。」

満更でもなさそうだもんなあ…もう。

「で、先輩はどういう風の吹き回しでバンドに入ったんですか？」

「それは…香澄のやつに…」

「香澄さんって…戸山 明日香の姉ちゃんでしょ？」

あの変形ギター使いの人。

「ああ…そうか。お前も明日香ちゃんと同じ

羽丘だったっけな。」

「ええ、同じクラスです。」

「じゃあ、ロックとも同じクラスか。」

「ロック？」

「朝日 六花って子だよ。」

「ああ。」

ロックとか呼ばれてんのか。

ロックと六花をかけてるのか？

「あいつ、ポピパさんの大ファンらしくてね…

ライブでも感動してボロ泣きしてましたよ。」

「ロックのおかげだったからな…ウチらが

主催ライブやれたのも。」

へえ…頑張ってたんだな、あいつ。

皆さんに感謝されるぐらいには。

伝えたら泣いて喜びそうだな。

「あいつ、バンドやりたいらしいんですけどね…

なかなかメンバーが集まらないみたいなんすよ。」

「みたいだな…あんなすげー演奏できんのに。

もったいねーよな…」

ほんとそれな。

どっかにいないもんかね…マジで。

まさか、俺が先にバンドに入ることになるとは

思ってもみなかったよ。

「お前は？またギター弾こうとは思わないのかよ？」

「俺ですか？まあ、最近はちよこちよこ

弾いてますが。」

「…やめたんじやなかったのかよ？」

「だったんですけどね…先輩達のライブに

触発されたというかなんというか…」

「何があつたんだよ？」

「え？」

「お前、前に言つてただろ？弾く資格がないとか何とか…好きだったギターをやめるよっぽどの何かがあつたんじやねーのかよ？」

はぐらかしてきたけど…やっぱり聞かれるよな。

「それは…」

「話してみろよ。別に無理にとは言わねーけどさ…少しは楽になるかもしれないだろ？」

「せ、先輩…あんたつて人は…」

「だから何で泣きそうなんだよ!？」

あんたが幼馴染で本当に良かったよ。

心からそう思った。

「…なるほどな…だいたいはわかった。」

はあ…と先輩は一つため息をつく。

「最低だな。」

「うぐっ…」

断腸の思いで話したのに…俺の精神に容赦なくダイレクトアタックかましてきおつたこの子。

まあ、当然の報いなんだけどさ。

「そうですね…女の子を傷つけるなんて…」

「それもあるけど…ギターは何も関係ないだろ。」

勝手に巻き込んでんじゃねーよ。」

「う…」

「それに、お前がギターをやめるのをその子が望んでるとでも思うか？」

「お、思いません…」

気づくと俺は正座していた。

椅子のうえで正座したのなんて初めて。

あ、どうでもいいですよね…すいません。

「やり続けるよ…その子のためにもさ。」

「…そのつもりです。」

今何してんだろ…あいつ。

ギターは…まだやってんのかな。

俺は大丈夫だぞって伝えてやりてえな。

それから…せめて一言だけでもいいから謝りたい。

「まあ、お前はお前で大変だっただろうし…」

乗り越えたみたいだからこれ以上は何も言わねーよ。」

てつきりもつと詰られるのかと思ったが。

俺のフォローもしてくれるあたりやつぱり

優しいんだよな先輩は。

「先輩、今俺…」

と、まだ言うべきじゃないか。

RASについてのことは。

知ったらどういうリアクションするのかは楽しみではあるけど…

その楽しみは後に取っておくことにしよう。

「何だよ?」

「いや、何かあったら俺も頼ってくださいよって。」

「ん、考えとく。」

それから、色々な話を聞いた。

戸山 香澄さんに出会ったこと。

ギター『ランダムスター』を譲ったこと。

他のメンバーの人達との出会いのこと。

文化祭で初めて『Poppin, Party』として5人で演奏したこと。

SPACEというライブハウスで演奏するまでの

波瀾万丈。

…そして、あまり学校には登校していなかったこと。

「色々あったんですね…先輩も。」

「ああ…色々とな。」

俺が懸念していた最悪の事態もありえたわけだ。

けど、そうはならなかった。

「はっ…」

「何笑ってんだよ？」

「いえ、別に。すげー人がいるもんだなー…と

思っただけですよ。」

Poppin, Partyは戸山 香澄さんと先輩が出会ったこ

とで始まったわけか。

あの人が…先輩を変えてくれたんだな。

「本当に感謝しかないな。」

「さつきから何言ってるんだよ？」

これからも先輩のことをよろしくお願いします。

…変わり者ですが根は良い人なので。

「…何か失礼なこと考えてんな。」

「いや…先輩のツンデレ具合だけは変わらねーなど。」

「お前はどれだけ私をツンデレ認定したいんだよ？」

「いや、事実だし？十人いたら十人がそう答えると思いますよ？」

「全員じゃねーか！」

「先輩…」

「今度は何だよ？」

「話したらすつきりしました。ありがとうございます。」

「ギター…続けるんだな。」

「もちろん。」

「じゃあさ、今度聴かせろよ。」

久々にお前のギター…聴いてみたいし。」

「…覚えてます？引越す前に俺が言ったこと。」

「ああ…また一緒に弾こうってやつだろ？」

イヤだけどな。」

「イヤなの!？」

「冗談だよ。」

「…それはまたいずれってことで。」

今はまだ感覚取り戻してる最中なので。」

だが、近いうちに取り戻せるっていう

確信はある。

スタートラインに再び立つ日は近いはずだ。

もう迷わない。逸れたりしない。

あとはまっすぐに進むだけだ。

あとは頼んだ

「チュチュ、邪魔するでー。」

「ってあれ？誰もいないのか？」

「そんなことある？」

「パレオもいないとは珍しいな。」

「おーい…っっているやん。」

「当の本人は俺が来たことにも気づかないのか
何かのライブの動画を熱心に見ていた。」

「Roseliaじゃねーかよ。」

「what!?!いたんなら声掛けなさいよ！」

「今まさにやったわそれを。」

「しかしなんだ…お前もわかってるな。」

「これもしかしてRoseliaがやったっていう

「主催ライブの映像？」

「YES。」

「マジか！ちよ、俺も見たいんだけど。」

「いや、しかし画面越しでもわかるわ。」

「圧倒的ハイクオリティな音楽は。」

「いいよな、Roselia。しかしお前もファンだったとは。」

「NO！そんなわけないでしょー！」

「は？何でキレられたん？」

「ファンでもないのに動画なんか見ないだろうが。」

「じゃあ何で見てんだよ？」

「決まってるじゃない…ブツ潰すバンドを目に

「焼き付けておいたためよ！」

「うん…一ミリもわかんねえわ。」

「てか、ブツ潰す言うた？」

「今にみてなさい…ミナト ユキナ…!!」

「湊さんが何したっていうんだよ。」

ま、いいや。色々とめんどくさそうだから何も聞かないでおこう。

万が一の場合は頭グリグリの刑に処すが。

「ところで、どうしたのよ？今日は個人練習レッスンのはずでしょ？」

「いや、ちよつと話があつてさ…」

「まさか、抜けるだなんて言わないでしょうね？」

「うっ…」

いきなり良いトコついてくんなコイツは。

切り出しづれえわ。

「…当たらずと雖も遠からずつてところだな。」

「…ライブまで一ヶ月を切ってるのよ？許されるハズないでしょ？」

「もちろん、ライブは全力でやるよ。俺が言いたいのはその後の話だよ。」

「その後？」

「俺もさ…色々調べたり、考えたりもしたんだよ。」

「…それで？」

「大ガールズバンド時代とは…よく言ったもんだよな。」

いや、ホント…誰が言ったかは知らないが。

「何の話よ？」

「今や行われているライブイベントの殆どが

ガールズバンドってのを前面に押し出したもの

ばかりだ。」

「当然でしょ？」

「なら、わかってるはずだろ？このままいきや

ダメだつてことぐらいはさ。」

チュチュの顔が僅かながら歪んだ気がした。

「お前はナンセンスな理由とか言うかもしんねーけど…やっぱり男の俺じゃ近いうちに限界が来るわけよ。ライブを主催する分には問題ないんだろうけどさ…さすがに毎回毎回主催ライブなんてやれんだけ。」

「…してよ。」

「ん？」

「どうしてよ!？」

「はあ!？」

今説明したやんか。

ていうか何か泣きそうなんだけどコイツ。

「あなたには奏でるPOWERがあるじゃない…!」

それなのに…どうして…そんな理由で…」

「あー…チュチュ様?」

いくら小生意気なちびっ子とはいえ、泣かせるのは罪悪感が半端ないわけで…泣かないでな?」

「…わかってたわよ。いずれ限界が来るって…」

レイヤからあなたの話を聞いた時も期待なんてしていなかった…

But、ユウのギター力は本物だった…逃す手はないと思った…」

そこまで俺のこと買ってくれていたのか。

その割にはスパルタだったがな。

「花園さんだっけ?あの人みたいにサポートギターっつーことでさ…

次のライブじゃやらせてもらうけど…その後は別のギタリストをスカウトすればいい。」

「…あなた達のようなギタリストがそう簡単に

見つかるとは思えないけれど…」

「いや、いる。」

とんでもないのがな。

「一人知ってる。安心しろ…そいつはたぶん

お前が求めていたであろう音を出すやつだ。」

「あなたがそこまで言うほどのギタリストがいるっていうの?」

「ああ、バンドをやりたいがってて、幸い今は

フリーだ。」

「どうして早く言わないのよ?」

ええ…理不尽。

「まあ本人がどう言うかはわからないし、無理矢理ってわけにもいか

「んだらうから保証はできないけどな。」

「NO problem!」

あ、無理矢理にでも入れる気だなコイツ。

「知り合いなのね?」

「ああ、同じクラスのやつ。だから話つけるのも簡単。もちろん女子だ。バンド経験もあるらしいし。」

「……………」

急に黙ったと思ったら、何か考えてんな。

「いいわ…ユウ、まだ彼女には何も言わないで

ちようだい。」

「え? いいのか?」

「YES! あなたは次のライブの準備に専念しなさい!」

急にテンション上がりやがった。

現金なやつだな…。

「サポートだからといって中途半端な演奏はOutrageous
!」

「わかってるよ。」

「それで? そのギタリストの名前は?」

「朝日 六花。間違いない俺以上のギタリストだ。」

「やけに推すわね。」

「あいつの演奏を聴いたのは一回だけけど…

何かこう…音にブン殴られたような気持ちになった。」

「…ふーん…ロツカ・アサヒね…面白そうなギタリストじゃない。」

新しい玩具を見つけたような顔してらっしやるわー。

チュチュ様、ご満悦のようで何よりです。

てわけで朝日…あとは頼んだ。

どうなるかはわからんが。

御簾を上げようぜ

「バンドリ?」

「うん! 決勝は武道館でやるんだって! あこも

出たかったなー!」

「Roseliaは出ないのか。」

近々ガールズバンドチャレンジというイベントがあるそうで、予選を勝ち抜いたバンド二組は

武道館行きの切符を手に入れられるのだそうだ。

それにしても武道館とは…

キャパ一万人は優に越えるドデカイ会場だぞ?

そんな中でやるってか。

「お姉ちゃんもその話ばかりしてるよ。」

「へー、ポピパさんは出る気なんだな。」

これはまた楽しみが増える。

Roseliaが出ないっていうのは少々勿体ない気もするが。

「楽しみや〜!」

目を輝かせているのは…最近ポピパさんの

ライブがなくて成分が不足している朝日 六花さん。

どこか別世界へ行っているようなので放置しておく。お前にはお前でサプライズな出来事が待ってるんだ…せいぜい頑張れな。

「げっ…!」

授業も終わり、帰ろうとした矢先にチュチュから着信があった。バイトもないし、練習もないからゆっくりしようと思ったのになあ…。

「もしもー!? なんぞ『ユウ! 今すぐ来なさい! 今すぐよー!』」

…用件だけ言って切りやがった。

まだ返事してないのに。

とにかく今すぐ来いつてか…仕方ない。

「おーつす。パレオ。」

「お疲れさまです。」

「来たわね!」

「来たわよ…で、どした?」

「Come on!」

ついて来いつてか? まったくもう…どこまでも

マイペースなお子様だこと。

「見つけたわ…ユウ…あなたの言うとおりでったわ!」

「何だよ? 見つけたって。」

俺、何か言ったつけ?

「ロツカ・アサヒよ! 面白い動画を見つけたの!」

「面白い動画?」

しかし、テンションたっけーな…こいつ。

モニターに映し出されたその映像は…

「これって…文化祭の…」

忘れもしない、あの時の。

文化祭の…朝日 六花の狂暴なギターソロの映像だった。誰か

撮ってたのか。

「Excellent! 言うだけのことはあるじゃない!」

「だろ!? あいつはすげえんだよ!」

「ちよ、ちよつと!」

「いったあ!」

な、何も手握ったぐらいで蹴ることないでしょうに…つい熱くなっ

ちまったのは認めるけどさ。

「ああ! チュチュ様! お止めください!」

「にしても…そうか。お前もわかったか。」

あいつのギター力ぢからってヤツがさ。

「OKよ! ロツカ・アサヒをRASにスカウトするわ!」

無事にプロデューサーのお墨付きも得られたことだし、あとは本人

次第といったところか。

まあ、断る道理もないと思うけど。

「あ、ところでさ…バンドリってイベントがあるの知ってるか？」

「Of course! 武道館だなんて私達にふさわしい

ステージじゃない!そこでRoseliaをブツ潰してやるわ!」

「えーと、チュチュ様?盛り上がっているとこ悪いんだけど…」

「何よ?」

「Roselia、出ないらしいっすよ?」

「なっ…Really…?」

毒気抜かれてやんの。

「うん、マジで。他ならぬRoseliaのメンバーから聞いたからな。」

「どういうことよ?!ミナト ユキナ…どこまで

私をコケにするつもり!」

あーキレてらっしやる。

てか、そのRoseliaに対する対抗心は何なんだよ。

「何でそないRoseliaに拘るん?何かあったのか?」

「ユキナは私のプロデュースを断ったのよ!」

「何だ…そんなことか。」

「…そんなこと?」

おっと?言葉のチョイスミスった説。

地雷踏んじやったかな?

「Sorry。飴ちゃんやるから許してな。」

「いらぬわよ!!」

はあ…つたく、小さいのは背丈だけにしろってな。

仕方ないからわかりやすく説明してやっか。

「例えばよ?例えばの話…俺がどこぞのプロデューサーだと仮定しようか。それで、お前のところに行って来て『私についてくればこのバンドは絶対に大成する!』とか言われたらチュチュはこの話受けるか?」

「それは…」

「受けないだろ?Shut Up!プロデューサーなんかNo Thank youよ!とか言いそうだもんな。」

「ぐ、ぬぬぬ…」

ぐぬぬって口に出す子初めて見た。

「湊さんは自分達の奏でる音で高みを目指したいのよ。そういうお人なの。根っこはお前に似てんだよ…きつとな。」

まあ、気概は買うけどな。

もうちよい情熱の向ける方向を考えてほしいけど。

「でもさ、良かったじゃん。ガールズバンドチャレンジって…案の定俺は出れなかったわけだ。」

「…そうね。」

「ユウさんとはもつと一緒に演奏したかったのですが…」

パレオが残念そうに言う。

「そう言っただけでもありがたいってもんよ…パレオ。」

本来ならばあり得なかったことだしな。

どんな形であれ俺が表舞台に立つってことは。

「ありがとな…チュチュ。」

「何よ？急に…」

「いや…なんやかんやお前にはつつかかったけどさ…感謝はしてるぜって話。こんな機会一生なかっただろうし。」

「礼を言うのは早いんじゃないやなくて？まだライブも終わっていないのよ？」

「そうでした…ライブ、頑張るからよ…」

共に御簾を上げようぜ。」

「はい。」

「…私の台詞を取らないで。」

疑いようがない。

このメンバーならば無敵だ。

必ず良いライブになる…。

それに、あいつが加われば…

「面白くなりそうだな。」

どんな化学反応を起こすのか…今から楽しみだな。

ライブ前夜

きつかけはあの演奏だった。

朝日 六花のギターは凍りついた俺の心に火をつけた。称賛と同時に、自分もあんな風に弾いてみたいと不覚にも思わされてしまった。

Poppin' Partyの主催ライブ。

あの人達は本当に楽しそうだった。

勿論、彼女達だけでなく他のゲストバンドの人達も同様だった。幼馴染とのいつも通りの時間を

過ごすため：アイドル活動のため：笑顔のため

：高みを目指すため：それぞれ目指すものがあり

それを実現するために切磋琢磨する。もし、ギターをやめていなかったら：俺にも一歩を踏み出す勇気があったのなら：バンドに対する憧憬と同時にいくつものもしも：が頭の中を駆け巡った。

そして：

「ユウ。明日は最高の音を奏でなさい。あなたならそれができる：私
が保証するわ。」

「わかってんよ。」

ボロクソ言われた日々も今や懐かしい。

早いもんだな。

チュチュ：こいつのおかげでまた一つ俺は殻を破ることができてる。

こいつのことに關してはまだまだわからないことが多いが：音楽に關する熱意や姿勢は本物だ。それだけはわかる。

「優、本当に抜けちまうのかよ：お前とはもっとやりたかったのにな。」とはますきさん。

「ま、音合わせならいつでも付き合いますよ。」

「：誘っても全部断りやがって。」

「いや、GALAXYでしょ？あいつに会う確率が

ほぼ確だったんで行きたくなかったんですよ。」

「頑張ろうね、優君。」

「ええ。レイさんも思いっきりやつちやつて下さいね。」
おそらくこれが最初で最後の機会。

「いよいよ、明日か。」

「何か言うことは？」

「チュチュが聞いてくる。」

「別に…何もねーよ。」

やるだけのことはやった。

あとはそれを出すだけだ。

明日のR A Sのワンマンライブは

d u b M u s i c E x p e r i m e n t

通称d u bと呼ばれるライブハウスで行われる。

キヤパは千人を超える大型のライブハウスである。

そんな客が来るところなんてのは聞いてなかったけどな。

「もしかして怖じ気づいた？」

「はあ？怖じ気づいてねーし！」

こいつ、今ちよつとバカにしただろ。

生意気な。

「見とけよ？明日のライブ…感動して

涙ちよちよぎれても知らねーからな？」

「期待してるわよ。」

いや、ぶつちやけ怖じ気づいてるけどね。

ライブなんてやるのは初めてだもん。

人前で弾いたことはあったけど、それとこれとはレベルが違いすぎる。

「しかし、明日で四回目なんだな…ワンマンライブ。」

バンド結成してから日も浅いだろうに…

すごいことだよな。

「そうよ…だから今まで以上の演奏を

オーデイエンスに魅せつける必要があるわ！」

かけるねえ…プレッシャー。

「あなたはタエ・ハナゾノにも負けないギター力ぢからを持つてる…できな

いとは言わせないわよ?」

「俺はあの人ほど器用じゃねーよ。」

以前やったというライブの映像を見たけど半端じゃなかった。特にレイさんとの息はピッタリだった。あの人といい、Roseliaの紗夜先輩といいレベル高すぎひんか?

「けど、お前がいるから大丈夫だろ。プロデューサーさんよ。」

「……………」

あれ? いつもなら自信満々に答えるはずなんだが…どうした? さすがのこいつも不安なのか?

「…そして、そこでロツカ・アサヒをスカウトする!」

「え、あいつ来るの?」

「はい! パレオがチケットをお渡ししました。」

六花様も来るはずですよ!」

「六花か…あいつ、そんなにすげーのか?」

「ええ、すげーんですよ…ますきさん。」

スカウトにしちや随分と大掛かりだが、ようやくあいつの念願が叶うわけだ。

「レイヤ、マスキング、パレオ。私のために最強で最高の音を奏でなさい! RASが頂点だということを認めさせるのよ!」

やたらと頂点てっぺんに拘るよな…こいつ。

承認欲求つてのは誰にでもあるものだけだ。

こいつのは執着てっぺんつーレベルじゃない。

執念のような何かを感じる。

実際カリスマ性みたいなものもあるし、作曲から何までこいつの才能は計り知れない。

「ユウ…あなたも! RASの一員として恥ずかしくない演奏をするのよ!」

「おう。」

けれど、どこか危うさもある。

それが何かはわからないが、何となくそんな風に思った。何事もなければいいが。

初舞台は大舞台

遂に来た…来てしまった…この日が。

10月7日。

RAISE A SUILENの4thワンマンライブ。

その名も『RAISE your RAGE』

ゲネプロ（本番同様の形式で行う最終リハーサル）を終えるまでは良かつたのだが…ここにきて

緊張しすぎて足の震えが止まらないという事態に陥ってしまった。

どうしよう…どうにかなんだろ！とか思ってた

数時間前の俺を殴ってやりたい。

「なんだよ優…お前、緊張してんのか？」

ますきさんが茶化すように言う。

「そ、そりゃあ…俺は皆さんのようにライブ慣れしてませんし…」

「そんなんじや困るわね。あなたはRASの

ギタリストなんだから、堂々としていなさい。」

「…やっぱり帰っていい？」

「No…今さら何言ってるのよー！」

「ですよねー…」

いや、だって…ライブの告知ポスターに

それぞれの担当パートの名前が書かれてんだけど…

G t . S e c r e t

ハードル上げてきますねえ…さすがチユチユ様…

集客にも抜かりはないってか。

それに…どうやら今日のライブ…Roseliaさんと

ポピパさんも来るらしいのだ。

どういう意図かは知らないがチユチユが招待したらしい。

心臓の鼓動がやばい。

こんな調子で果たしてまともに演奏できるのかどうか。

「ユウさんなら大丈夫ですよ♪」

…中学^バ二年生^レに励まされる高校生一年生の凶。

でも、ありがとうな。

ホント良い子だよこの子。

けど、演奏時のパフォーマンスはめっちゃド派手なんだよな…縦横無尽に動き回るっていうか…

そりやあもうピョンピョン跳ね回る。

ますきさんは言わずもがな。

狂犬の名は伊達ではなく、隙あらば即興のアドリブを入れてくる困ったちゃん。本人曰く楽しくなってきたらもうんだよな…とのこと。

レイさんは…昔からは考えられないくらい変わった。力強い歌声…それでいてベースの方もおぎなりではない…どこか自分を出しきれしていないあの頃とは違う。

「大丈夫だよな。」

この人達となら。

「吹っ切れたみたいだな。」

「ええ、ご心配おかけしました。」

「もうすぐ開場よ！準備はいいわね？」

「ああ！いつでもいけるぜ。」

とは言ったもののよ…客の入りがやべえ。

ほぼ満員じゃねえか。

キャパ1000人って言ってたから1000人近くはいる計算になるわけか。

だが大丈夫だ…やれる。

このメンバーなら。

できる…俺はできる。

大丈夫だ…信じろ。

今こそ俺のギター力ちからをオーディエンス観客に魅せつける時だ。

満員？

それがどうした。

できるか?とかそういう問答は今さらナシだ。
退路はとつくに断たれてるんだからな。

「Hello everyone!」

チュチュの挨拶に対し観客席から歓声があがる。

さすがに熟れてるな…こいつ。

何度もこういう場面を経験しているだけはあるな。

「今日はRAISE A SUILENの4thワンマンライブに来てくれてThanks!ライブの前にSweetな

New guitaristの紹介をするわ!」

先ほどよりもさらに大きな歓声があがる。

すげえ歓声…と、圧倒されてばかりでもいよいよいられないな。

さあ、早いところ紹介してくれよプロデューサー。

およそ1000人。

俺の音を聴く観客といよいよご対面の時だ。

You are unstoppable!

「Gt. ユウ！」

だ、大丈夫だよな？

いきなり大興奮を買ったりは…

「!?」

…しなかった。

むしろ凄い大歓声に思わずビビってしまう。

マジか…初見の…しかもガールじゃないギタリストだぞ？

それでも受け入れてくれるっていうのか…

なんて優しい世界なんだ。

「Ba. & V. レイヤ！」

「Dr. マスキング！」

「Key. パレオ！」

まったく、それにしてもどういう心臓してんだよ

この人達は…皆、堂々としてやがる。

こんな中でベストなパフォーマンスを發揮してきたっていうのか

よ…半端ねえな。

空気が震えている…熱気が凄い。

何もしていないのに最早手に汗握っていやがる。

「いくわよ！First song！」

「ふーっ…」

さあて、初っぱなからコケるわけにはいかない。

出しきるんだ…今までを…ありったけを込めて。

全部昇華してやるよ。

Roseliaさんやポピパさん達が見た景色を俺も…

見るんだ。

何もかも新鮮だった。

何コレ、すつげー楽しい。

振り向くことはできない…が伝わってくる…

音でわかる…きつと皆も同じ気持ちなんだ。

以心伝心っつーのか？

ますきさんのドラムが俺をイヤでも奮い立たせてくれる。ちよう

どいい…利用させてもらおう。

そうだよ。

ちよつとぐらいレールをはずれたって平気なんだ。

そんなくらいで崩れるほどのバンドは脆くはない。

それどころかそんなこと気にしてた日には

ヘタすりゃ置いてきぼりをくらってしまう。

『You are unstoppable!』

いつか、チュチュに言われた言葉を思い出す。

そうだ、俺は止まらない。

止まるわけにはいかない。

前を走り続ける。

トップを独走しろ。

並び立つことすら許すな。

叫びたい衝動すら音に乗せて。

そして、最初の曲『UNSTOPPABLE』を終える。

永遠——とまではいかないが、とてつもなく永く感じられた時間
だった。

「やっぱ、たのしーなあ…ギターって…」

思わずそう溢した。

誰の耳にも届くことはないが…改めてそう思った。

こんな味わつたらやめられなくなるわ。
チュチュのやつめ：責任取れよ。

そうして、2曲、3曲と演奏は進んでいく。
できるなら終わってほしくない。

この最高に楽しい時間。

次は――

『R・I・O・T』か。

RAISE A SUIRENの原点とも呼べる曲。

意味は暴動：だつたっけか？

ガールズバンド時代を終わらせると聞いた時には何を言ってるんだ
コイツは…と思ったもんだが…

大言壮語なんかじゃなかった。

相応の力を持っていた。

そんな事を望んじやいないが、こいつなら本当にそれをやってのける
んじゃないか…という期待感がある。

チュチュ、ありがとうな。

お前には返しきれない借りができちゃった。

ああ：終わりが近づいてきているのがわかる。

終わってほしくない願っても、時間は無情にも進んでいく。
もつと弾きたい。弾いていたい。

この最高のメンバーと。

「^{ラー}RAS!^{ラー}RAS！」

演奏が終わっても観客のコールは止む気配がない。

「ユウー！」

驚いたことに俺への歓声もあった。

終わった：終わったんだな…。

できればもつとやりたかったが…これ以上を望むのは贅沢ってヤツか。

十分すぎるほどのプレゼントは貰ったんだ。

思い残すことは…ない。

「アンコールの前にSweetなお知らせよ！」

あ、アンコールあるんだ。

良かった。もう一曲弾けるんだな。

それにしてもチュチュめ…まだあんな元気あんのかよ。

「RAISE A SUIREN は Bang Dream! Girls Band Challenge!に出場します！」

いい盛り上げっぷりだ。

大丈夫だ。

皆なら頂点を目指せる。

頑張れよ。

応援してるからな、チュチュ。

「そこで、Roseliaと——」

うんうん。

「ポピパを——」

うん？

「ブツ潰す!!」

「…は？」

ごめん、前言撤回するわ。

頂点獲れよ

Roseliaとポピパを…ブツ潰すつつたか？

「ちよいちよいちよいちよい。」

待て待て待て。

完全に想定外だぞこんなの。

セツトリストにないもん。

今まで盛り上がった観客もこのチュチュの発言には戸惑っている。

そりやそうだろう。

ていうか何を言うてくれとんねん

このガキンちよは。

RoseliaとPoppin, Partyのファンを敵に回す

気か？

俺は明日からどんな顔して学校行けばいいのさ？

「But、そのためには新しいギタリストが必要になるわ…」

お前に必要なのは一般常識だバカたれ。

最後の最後で大ポカをやらかしゃがって。

「ロツカ・アサヒ！あなたを私のバンド、RAISE A SUIRE
Nにスカウトするわ！」

照らされたスポットライトには本日の主役朝日 六花の姿が。
やっぱり来てたんだな。

「ご、ごめんなさい!!」

「なっ…」

ほらあー…あんなこと言うから…

断られちゃったじゃんかよ。

「はあーっ…」

しやーない。

呆けてるプロデューサーからマイクをぶん取る。

「ちよっ……」

最後の仕事といきますか。

「あー、ご挨拶が遅れました。本日、RAISE A SUIRENのサポートギターを務めさせていただきました……ユウです。先ほどはこのガ……プロデューサーが不適切な発言をしてしまったことをお詫び申し上げます。」

「ちよっと！勝手に話を進めないで！」

「うっさいわー！お前が変なこと言ったせいで

テンパった空気になつてんだろが。」

人がせつかくそれをフォローしようとしてんの……

言い終わる前にマイクをぶん取られる。

「あつ、このやろ……」

「どうして断るのよ！ロツカ・アサヒ！」

すかさず奪い返す。

「さっきの発言を取り消せ。そして謝罪しろ。」

「できるわけないでしょ！」

「こいつ……あとで激辛ジャーキー食わせたろ。」

「ほら、Roseliaさんとポピパさんに謝れ。すみませんでしたって頭下げろ。」

「マイクを返しなさい！」

「やだね。」

お前の短いリーチじゃ届かんだろ。勝ち確。

このやり取りがウケたのか観客席からはちらほらと笑い声が聞こえてきた。

望んだ形ではないが、結果オーライか。

「あー……ロツカ・アサヒさん。」

プロデューサーはこんなんですが、腕は確かです。RAISE A SUIRENは素晴らしいバンドです。

最強のメンバーと最高の環境が揃ってます。
今一度、考え直してみてもどうでしょうか？」

「……………」

迷っているみたいだな。

まったく、こんなもん即決だろうに。

「あつー！」

油断した…マイクを…

「返事は今すぐじゃなくてもいい！ロツカ・アサヒ！その気になったらいつでも来なさい！私は

あなたのギター力ちからを必要としているわ！」

…最初っからそう言えよな…まったく。

色々と一悶着あつたが、アンコールを一曲終え、

RAISE A SUIRENの4th ワンマンライブはお開

きとなった。

「Sweet!Excellent!unstoppable！」

出た。チュチュ様三種の神器。

随分とご機嫌ですなあ。

「ユウ！最初の緊張がウソのようなSweetな演奏だったわ！」

「そ、そうか？」

なんだよ、そんなこと言われたらさっきのこと

怒る気もなくしちまうじゃないかよ。

まあいいか、今日ぐらいは。

「うん、本当に…良かったよ優君。」

「レイヤさんこそ…力強い歌声にリズムキープも完璧って化けもんですか。」

「また一緒にセッションしましょうね♪」

「パレオ、いつもより3割増しくらい派手にアクションしてなかったか？ライブ中思わずツツコミそうになったぞ。」

「つい張り切ってしまった…」

うん、かわいいな。

「本番で今まで以上の演奏をするなんてな…

やつぱすげえなお前。」

「ますきさんとはもう勘弁ですよ…こつちが持たないもん。」

「そう言うなよ、またやろうぜ。」

「そう…ですね。」

やれて良かった。

それもこれも、この場を用意してくれた

チュチュのおかげだな…認めたくはねーけど。

「あれ？」

いつの間にかそのチュチュがいない。

どっか行ったんか？

…何かわからんがイヤな予感。

「すみません、ちよつとお手洗いに。」

「ユキナ！本当に出ないつもりなの？」

「……………」

うわあ…予感的中。

チュチュに向かいあうのはRoseliaの面々。

中心に立つ湊さんにチュチュが啖呵をきっていた。

「私たちに負けるのが怖いよね？」

それならそうと——」

「こちら、絡んでんじやねーよ。」

「ちよつ…！」

「はいはい、いきましようねー、チュチュちゃん。」

「放しなさい！」

「へいへい…リリース、リリース。」

またこいつは…懲りずにブツ潰すだのなんだの

言ってるのか？

「ゆう！凄かったよー！」

「お、おう…ありがとな宇田川。」

せつかく来て貰ったっていうのにすまんね。

「その…すいません、ウチの子が失礼を…」

「誰がウチの子よ！」

「いいからいくぞ…湊さん達はお前のことを

相手にしてるヒマなんか…」

「出るわ。」

「ないん…え？」

湊さん…今、出るわって？

「出るって…バンドリにですか？」

「ええ。」

いや、でも…

「FUTURE WORLD FES. ってのがあるんじや…？」

「その通りです…湊さん、どういうつもりですか？」

それは紗夜先輩も想定外だったようで…

難色を示している。

独断なのか…本当にどういうつもりなんだ？

こんなやつすい挑発に乗るとも思えないし…何か考えがあつてのことなのだろうか？

「…いくわよ。」

「じゃーねーゆうー！また明日！」

「おう。」

俺なんか考えても仕方ないか。

湊さんには湊さんなりの考えがあるのだと

納得するしかない。

「星川さん。」

「え、あ、はい。」

やっべえ…紗夜先輩めっちゃキレてね？

気のせい？気のせいだよな？

「…どうして隠れているのですか？」

「そうよ！放しなさいよー！」

「どうぞ、コイツから煮るなり焼くなり好きにしちゃってください。」

プロデューサーを生け贄にしても俺は助かる。

今日の友は明日のためへの俺の贄。

「…何の話ですか？」

あれ？シメるとかさつち系の話じゃないの？

「…素晴らしい演奏でした。ただそれだけを言いたくて…それでは。」

「あ…どうもです。」

素晴らしい演奏…そう言ってくれたのか。

もったいなきお言葉だな…俺には。

「今に見ていなさい…Roselia。」

「まずは、ギターだろ。」

「そうね、ユウ！あなたにも協力してもらおうよ！」

「へーい。微力ながらお力添えさせていただきますよ。」

できるならば武道館で。

5人揃った演奏を見たいものだ。

「チュチュ。」

「何よ？」

「頂点てっぺん獲れよ。」

「…言われるまでもないわね。」

「だな。」

…そのためにも、コイツのこの意固地な性格は

何とかしないとな。

後日、チュチュと俺の小競り合いを収めた動画が何故かバズってたらしい。本当に何故だ。

学校の放送で自分の名前を呼ばれると一瞬ドキツとするよね

「ふわあ…眠…」

しかし、こうして一夜明けてもまだ信じられないな。

昨日の出来事は夢だったんじゃないかとさえ

思うくらいだ。

しかし、体中の筋肉痛がそれが夢ではなかったことを証明してくれる。

「優のライブ、母さんも行きたかったわ。」

「別に、来るもんでもなかったって。」

「母さん嬉しくて…ギターをやってない優なんて優じゃないからね。」

「なんじゃ、そら。」

けど、そうか。

…当たり前前なのが当たり前じゃなかったんだもんな。

「んじゃ、行ってくる。」

昨日も大変だったけど、今日は今日で大変な一日になりそうだ。

「ん?」

げっ…我らがプロデューサーチュチュ様では

ありませんか。

…何故こんなところに?

絡まれるとめんどろそうだな…よし、さりげなくすれ違う作戦でいいか。

「よう、チュチュ。昨日ぶり。良い天気だな。」

「Good Morning!」

「つて待ちなさい！」

「ぐえっ！」

作戦失敗。

ていうかいきなり引つ張らないでもらえます？

「なーんだよーもう…」

「どうということよ!？」

「どうということよ!?!つてどうということよ?」

「ロツカ・アサヒ!逃げられたのよ!」

完全に嫌われてんじゃん。

「てか、昨日いつでも来なさいとか言ってたやんか。何で来ちやっぺんだよ。」

フットワーク軽すぎんだろ。

「もしかして、昨日の謝罪でもしに来たとか?」

「謝罪?...まさか!」

「だよね。」

「プロデューサーとしての挨拶がまだだったと

思つて...ジャパニーズは礼儀を重んじるんでしょう?」

昨日ブツ潰すとか言つてた子がそれ言う?

「そつか、頑張れよ。んじゃ。」

「Bye!」

「つて、だから待ちなさいつてば!」

「ほげっ!？」

おまつ...だから引つ張んなつて!

首絞まったわ。

「ゲホッ...もう始業のチャイムが鳴るんですが?」

「そうなの?なら仕方ないわね...」

「そういうこと。じゃあな。」

…ていうか、あいつ学校は？

「危ない危ない…ギリギリセーフ。」

ちよつと時間食ったけど何とか間に合つ…

「あ！来た来た！」

「星川！凄かったね！昨日！」

「いつの間にRASに入ったの!?!」

「チュチュとのラップバトル面白かったよ！」

「やっぱり、ギター弾けたんじゃん！」

わああー…やっぱりー…

案の定というべきか、朝っぱらから教室は大盛り上がりであった。
てか、ラップバトルとか言ったの誰や。

「皆さん静かに。席について。」

先生ナイスタイミングです。

「すごかったよねー！朝日さんスカウトされてたし！」

その朝日さんは何故か俺を睨んでいるが。

「よう、昨日は大変だったなあ。」

「ポ、ポピパさんは捏ねさせへんよ！」

「はあ?。」

捏ねる?何の話だよ。

「昨日、ブツ潰すって…」

ああ、そのことか。

「安心しろよ、そんな気はサラサラねーから…

少なくとも俺はな。」

「本当に?。」

「むしろ俺はポピパさんを応援してる側の人間だぞ?仮にチュチュの奴がそんなことをしようもんなら俺が止めてやるよ。」

まったく余計なことを言ってくれたもんだよ。
俺まで双方のファンに敵視されちゃ敵わんど。

「でも、昨日のライブでわかっただろ？俺はともかく、他のメンバーの
人達はRoseliaと比べても

遜色ないレベルだ…悪くはないと思うけどな。」

俺は化けると思う。

「無理強いはせんけどさ…一度話合ってみろよ。」

「…うん。」

あの感じだとまた来そうだけどな。

『1年A組 朝日 六花さん。 星川 優くん。

至急、生徒会室までお越しください。』

はい、休憩終了のお知らせ。

そしてフラグ回収。

生徒会室つてのがこれまたきな臭い。

「なんやろ?」

「朝日、俺お腹痛いから無理って言っといて。」

「ええ!?!」

「俺とお前が呼ばれたつてことは、ぜってー

チュチュの奴だろ。行きたくない。」

結局、ごねてもキリがなさそうだったので

しぶしぶ生徒会室へ。

「失礼しまーす。」

「Hello!」

「…失礼しました。」

「待ちなさいってば!」

チュチュめ…やっぱりいやがったか。

あと、朝日さん…俺の後ろに隠れるのやめてもらってもいい?あな

たも女子だからさ、触られると意識はしちゃうわけよ。

「なんで俺まで呼んだし。」

「スムーズに話を進めるためよ！」

いや、進まないと思う。

「優君のギターあたしも観たかったなあ…おねーちゃんも良い刺激になっただって言ってたよ！」

日菜先輩にそう言われるが、何だかむず痒い。

「ロツカ・アサヒ！RASに入りなさい！私のバンドに入ってガールズバンド時代を終わらせるのよ！」

「いや、誘い文句。」

当の本人めっちゃ怖がってるし。

…あといい加減俺から手を離そうな？

「まあなんにせよさ…一度チュチュのスタジオで演奏をみてもらったほうが…」

そこまで言いかけたところでチャイムが鳴る。

「午後の授業がありますので…」

つぐ先輩が申し訳なさそうに切り出す。

「…仕方ないわね。それじゃ二人とも、授業頑張つてね！」

チュチュ様、あなたもきちんとして学校へ行きましょうね。

「終わったあ…長い…長い一日だった…」

質問する輩をすべて捌ききり、悲鳴をあげる体に鞭打って授業も寝ずに聞いた。

頑張った自分にご褒美あげたいわ。

帰ろう。一刻も早く。

何だかイヤな予感がするし。

後日聞いた話だが、やはりチュチュがパレオを

伴って放課後に来ていたそうで散々だったらしい。巻き添えになつた戸山は泣いていいと思う。

不合格の理由

「ん…」

着信の音で目を覚ます。

チュチュからだ。

「んあ…どした?」

「ロツカ・アサヒがスタジオに来たわ。」

「マジか?それで、どうだった?」

あいつ、行ったのか…

あんだけ怖がってたのに…一体どういう風の吹き回しだ?

「正直拍子抜けね…不合格…はつきりとそう言ってやったわ。」

「そうか、そりゃ良かつ…ああ!?!不合格!?!」

「Yes。」

「ちよ、ちよつと待て…そんなわけねーだろ?」

お前も見ただろ?あの演奏。」

「その良さがまるで出ていなかった…」

他人の顔色を伺うような演奏だったわ…

あんな演奏は No Thank Youよ。」

なるほど…なんとなくではあるがわかった。

恐らくはチュチュの指摘通りなのだろう。

あいつはそういう演奏をしてみましたわけか。

「もう一回チャンスをやめることはできないのか?お前だつてこのままじゃ不本意だろ?」

「…それは彼女次第ね。」

あいつ次第…か。

「じゃあよ、本来の力が出せばワンチャンあるわけだな?」

「そうなるわね。」

「…よし、わかった。」

「何か考えでもあるの?」

「まあ、見とけて。」

「：遅くに悪かったわね。」

「気にすんなよ。わざわざサンキューな。」

「何か悪いことしちまったなーって思ってたさ…」

「なるほどね。ますきさんが引きずってたわけだ。」

そういうことが、色々と合点がいったわ。

「別に、引きずつちやあいねーけど…」

ラーメン銀河でのバイト中、今は客もいないのでますきさんに先日の事の詳細を聞いていた。

「それは…チュチュが最も嫌う演奏ですね。」

「ああ…GALAXYで聴いた時はそんなんじゃないかなって思ってたんだけどな…」

「：それって、暴れるような演奏だったでしょ？」

「ああ！そりやあまあ凄かったぜ！うまく言えないけどさ！」

「でしょ？」

やっぱりな…わかる人にやわかるんだよ。

それが正當に発揮されないだなんて…

「歯痒いなあ…くっそ…」

かと言って、俺にできるのは発破をかけてやることぐらいだが。

明日にでもあいつと話をしてみよう。

もう…報われてもいい頃合いだろ？

「あれ、先輩からメッセージだ。」

不在着信もある。

…そうだった。

あろうことか忘れていた。

ブツ潰す発言でまだ誤解を招いている可能性が…

『色々と聞きたいことがあるから折り返し電話くれ。』

やべ…怒ってねーよな？

…市ヶ谷先輩に嫌われたら俺生きていけねーぞ？

「あ、もしもーし。」

「おう、遅くに悪いな。」

「いえいえ…先輩、その…単刀直入に聞くんですけど怒ってないんすか？」

「怒る？何の話だよ？」

「いや、ライブに来てくれてたでしょ？そんな時にウチのプロデューサーがブツ潰すだの失礼なこと言っちゃったから…皆さん怒ってないのかなーと…」

「ああ…別にウチらは気にしてねーよ。」

「そ、そうですか…なら良かった。近々謝らせますんで…必ず。」

「それより、びっくりしたぞ…お前がまさかRASのギターやってるなんてな。」

「どうでした？良かったつしよ？ちよつとは見直したでしょ？」

「ああ…皆も凄かったって言ってたぞ…特に

おたえの奴はな。」

「おたえって…花さん？」

「ああ。」

マジか…嬉しい。

やっぱり、同じ分野の人からお褒めの言葉をいただけるのは嬉しいもんですな。

「それで、ロックのことなんだけどき…」

「あいつがどうかしました？」

「RASを不合格になったみたいなんだよ…お前何か聞いてないか？」

「ああ…今それで絶賛頭を悩ませ中ですよ。」

「ない知恵絞っても何も出ないだろ。」

「辛辣！」

「ウチらも何かできないかって考えてたんだよ。」

「なるほど…あ、そういうえば先輩…」

ポピパさんはバンドリに出場するんですか？」

「ああ。」

「そうすか…たぶん、あいつにとつては

それだけで十分だと思いますよ。」

「そうか？」

「ええ、俺も明日あいつと話してみようと思ってるんで…また何かあれば連絡します。」

「ああ、遅くに悪かったな。」

「いえいえ…二十四時間いつでもかけてください。」

「コンビニかよ…」

「はあーっ…良かった。」

気にしてないみたいだ。

それに、バンドリにも出場するっていうし…。

とにかく明日だ。

あいつと話そう。

…どうしてこんなにもあいつのことが気になるのか…今になってなんとなく分かった気がする。

境遇や環境は違うかもしれないが…

俺はあいつに…同じギタリストとして

シンパシーを感じていたのかもしれない。

闇の中から

『あの…』

『ん、何？』

『先生が職員室に来てくれて…』

『ええー…何かの間違いじゃないの？』

『星川君って言ったので…間違いない…と思います。』

『人違いだよ。俺、星川君じゃないし。』

『えっ…星川 優君じゃ…』

『…ちっ、バレたか…そうです。星川 優君です。気軽に優君とでも呼んでくれ。』

『え、あ、はいっ！』

『っーか、何でそんなかしこまってるわけ？別に取って食おうってわけじゃないんだしさ…タメ口でいいじゃん…えーと、わり…名前なんつったっけ…』

『あ、朝日 六花です。』

『ああ、そうそう出席番号1番の…岐阜から来たんだっけ。』

『は、はい。』

『そっか、そっか。どーもな。』

『あ！あの！』

『ん？』

『職員室…そっちじゃないん…だけど。』

『ちっ、バレたか…』

最初は冴えない奴…ぐらいの印象だった。

それがまさかあんな…

『羽丘一年…朝日 六花です！』

あんな演奏をするなんて思いもしなかった。

あれが…俺の運命を変えたのかもしれない。

あれがなければ、俺は…ギターをやることもなかっただろう。過去に囚われ続けたまま…チユチユの誘いだって断っていたはずだ。

ポピパさんがお前を救ったというのなら…
お前は俺を救ったんだよ。

「はあ…」

「朝っぱらからため息とはよろしくないな。」

「あ、おはよう。」

「聞いたぜ…不合格って言われたんだってな。」

「…うん。他人の顔色を伺うような演奏はいらなんて言われちゃった…。」

「いきなり連れてかれて、ハイ不合格！…つてのも

酷い話だよな。」

「……………」

「朝日…放課後、時間あるか？」

「え？今日は大丈夫だけど…あ、でも銭湯の番台が…」

「番台？バイトかけ持ちしてんのか？」

「ううん…叔母さんのところで住み込みでやらせてもらってるの。」

「ああ、上京してきたんだもん…そう考えたらすげーな…学校来て、バイトして、番台やって、メンバー集めにギターの練習だろ？考えただけで頭痛くなってきたわ。」

こいつこっぴり見えて特待生だしな。

ほんにようやっとなるわ。

「でも、好きでやってるから。」

「そっか…憂さ晴らしぐらいなら付き合っただろうかなーっと思っただけだな…」

「それなら、旭湯に来る？」

「え？」

「何もないけど…」

「お、お邪魔しまーす…」

おいおいおい、マジか。

旭湯に行く↑

朝日の叔母さんが気を利かせてくれて

番台を代わってくれる↑

じゃあ部屋に来る？↑今ここね

ど、どうしよう…女子の部屋に入るなんてのは初めてのことだぞ？

市ヶ谷先輩？あれはノーカウントだ。

戸山や宇田川はともかく俺は男だぞ？

少しは警戒心とかないのか？

まあ、こいつなら臆病チキンだし別にいつか…的なの？

それはそれで悲しいなオイ。

「何言ってるんだ…ギターがあれば充分だろ。」

「ギター…好きなんやね。」

「…あたりまえだろ。」

つい最近までガチ放置してたやつと言う

台詞じゃないけどな。

「いつから始めたの？」

「小学校あがるくらいかな…親父にき、欲しい

モンないかって言われてゲーム買って欲しいって

言ったんだよ……したら何をトチ狂ったのか

ギターを買ってきやがってさ……それが始まりかな。」

「そうやったんや…」

「最初はしぶしぶだったけど、やっっていくうちに楽しくなってるってさ…なんつーか、不思議な

「ことにギターだけは一生懸命頑張れたんだよな。」

「私も…勉強も運動も…全然ダメやったけど…」

「ギターだけは頑張れたんだ。」

「そっか…俺らって、案外似た者同士なのかもな。」

「うん。優君…ライブの時すごく楽しそうやったよ。」

「楽しそう？俺がか？」

「それは意識していなかったな。」

「自分の表情なんてわかんねーし。」

「でも…そっか…楽しそうだったか。」

「お前も味わってみろよ…あれは忘れたくても

忘れられなくなるぞ？」

「あの歓声…あの熱狂。」

「できるならもう一度戻りたいときえ思う。」

「…でも、その場所にいるべきなのは俺じゃない。」

「…もう一度チャンスもらってこいよ。」

「でも、不合格って言われちゃったし…」

「なら、何回でもやればいい。それこそあいつが根負けするぐらいにな。」

確かに、Poppin' Partyの花さんやRoseliaの

紗夜先輩には技術では劣るかもしれない。

けど、瞬間の爆発力みたいなもの？それならば

朝日は負けていないと思う。

「お前と一緒にバンドを組んでた子達だってさ…それを望んでいるんじゃないか？」

「そうや…そうやった。皆と約束したんや…頑張るって…」

「だろ？送り出してくれた親御さんやその子達に見せてやれよ。お前がギターを弾く姿をさ。」

「…うん。」

「そんでよ…武道館に立て。」

「えっ!?ぶ、武道館!？」

「不可能じゃねえさ…あのメンバーならな。」

それに…お前は不可能を可能にしたギタリストなんだ。俺に…
きつかけを与えてくれた。

「ありがとう…もう一度頑張ってみる！」

「ああ、頑張れよ。」

これで少しは借りが返せたかな？

…いや、返しても返しきれもんじゃないか。

何せお前は…俺を闇の中から救いだしてくれたんだからな。

LAST PIECE

バンドリ ガールズバンドチャレンジ。

その名が示す通りガールズバンドを対象とした有志イベントだそうだ。

各地のライブハウスで予選ライブを行い

観客から投票を募り、その投票率の多かつた上位

二バンドが決勝の武道館の地へと進める…

といったシステムである。

我らがRASには頑張ってほしいところではあるが、間違いなくRoseliaが立ち塞がるであろう。

チュチュ様はブツ潰すだのとイキってるが

ギター不在のこの状況では逆に

けちよんけちよんにされるのは

火を見るよりも明らかである。

早急にギタリストを確保しなければRoseliaどころか、上位に
にくい込むのも現状厳しいだろう。

打ち込みのギターでもRASのレベルであれば

いけないこともないだろうが、やはり求められるモノは『生きた音』
だろう。

彼女達もそうだが、個人的にはPoppin' Partyにも頑張
張ってほしい。

…何にせよ激戦は必至だろう。

もちろん、俺自身ライブは可能な限り行くつもりだ。

「…と思っただんですけどねー。」

「…バイトで行けないんだ？」

「そうなんすよ、戸山さん。」

あーあ…まさかライブとバイトが

バッティングしちまうとはな。

「しようがないんじゃない?」

「だよなー…てなわけで、俺の分まで楽しんできてくれよ。」

「お疲れーっす。」

はー…終わった、終わった。

今日も今日とて労働したぜ。

「おっと?」

チュチュから電話がきてた。

すぐに折り返す。

「チュチュ様ー?どしたん?アレか?寂しくなっちゃった?」

「…ロツカ・アサヒが来たわ。」

「しよーがねーなあ…俺が付き合っちやるから…」

ってロツカ・アサヒ?あいつ来たのか!?

それで?どうだった!?!どうだったんだよ!?!」

「ちよつ…落ち着きなさいってば!」

「…すまんすまん。で、来たってことは演奏したんだろ?どうだったよ?」

「よ?」

「以前よりはマシになっていたわ。及第点…といったところね。」

及第点…ね。

「じゃあ…合格?」

「一応ね…言うなれば、RASのギター(仮)といったところかしら。」

「(仮)か…いいんじゃないの?そっから始めてもさ。」

…ていうか俺…ポピパさんの予選ライブも朝日のRAS加入イベントも見逃したのか…なんて勿体無いことを。

「でも、まあ良かったじゃんよ…これでピースが揃ったな。」

「YES!ポピパもRoseliaもブツ潰してやるから

見ていなさい!」

よーし、今度激辛ジャーキー持ってってやっからな?覚悟しとけな。

「そうか、ロックのやつRASに入れたのか。」

「みたいですよ。ギター(仮)らしいですけど。」

「(仮)?なんだそりゃ?」

「さあ…それにしてもすみませんね先輩…ライブに行けなくつ「良かったあー!ロック、RASに入れたんだね!」て…」

いきなり大音量の音声が割り込んできた。

心臓に悪いなあ…もう。

「ちよつ香澄!いきなり抱きつくんじゃねーよ!」

あれ、香澄さんって…皆さんいつしよだったのかな?…ていうか抱きつくって?」

「あー…えつと…?先輩?皆さんいつしよなんですか?」

「あ、ああ!まあな。」

「何かすみません…お邪魔して。」

「じゃ、じゃあまたな!だーっ!だから離れろって!」

…切れた。

「…楽しそうやなあ。」

何はともあれ、ようやく…か。

スタートラインには立てたわけだな。

朝日 六花のギター力ちからが日の目を見る日もそう遠くはないわけだ。

「おはようさん、昨日は良かったな…朝日。」

「うん!ポピパさんのライブ…途中までやったけど…」

「そっちじゃなくて。」

「え?」

「RASのギター(仮)になったんだろ?」

「う、うん…チュチュさんにはまだまだって言われちゃったけど…」

「いいじゃんか…(仮)から始めてみるよ。」

「それで、いずれチュチュのやつに認めさせりゃいいんだよ。」

「そ、そうやね…頑張らんと!」

これで役者は揃ったわけだ。
さて、これからどうなるか見物だな。

Turns into a Lock

「やっぱり、Roseliaは強いな。」

投票率はトップ：それも、2位のRASとはかなり差がある。いわば、独走状態だ。

さすがに知名度、実力共に申し分無いだけはあるな。

だが、それをこのまま許すチュチュ様ではないはずだ。

朝日が加入し、本格始動したRASもこのまま

終わるとは思えない。

ポピさんは：今のところは順位圏外みたいだな。ただ、予選ライブは始まったばかり。

追いつてくる可能性はまだまだあるわけだ。

しかし、上位二バンドつてのが惜しいところだな。RAISE A SUIREN、Roselia、Poppin' Party…

是非とも彼女達が武道館に並び立つ姿を見てみたかった。

RASはMVを作成するそうだ。

確かに、客を取り込むのに一番手っ取り早い方法ではある。いつでも最短ルートを一直線だな

あいつは。

そしてそれを即座に実行できるあたり、チュチュの腕の良さが窺える。

前にパレオからチラツと聞いたけど、音楽業界にコネを多数持つているらしい：マジでスペックだけ切り取って見ればくっそ優秀なんだけどね…。

「いらっしやませー。」

「おう。」

「おや、ますきさんと…RASのギタリスト（仮）さんじゃないですか。」

「…ここでバイトしとったん？」

「まあな。ほら、座った座った。」

「どことなーく元気がないが…さっそく壁にぶち当たったか？」

「どうだ？MVの進捗具合は？」

「それが…」

「…うまくいってないと。」

「…うん。」

「ま、最初からうまくいったら苦労はしねーさ…俺も最初は怒られまくってたしな…」

「…優君も？」

「ああ、お前と違ってバンド組んだ経験もなかったし…探り探りやってくしかなかつたんだよ。」

「なんか、この間のことなのにすげー懐かしく

感じるな。」

「…ですね。」

壁にぶち当たるのは悪いことじゃない。

…コイツにはそれをぶっ壊す力があるはずだ。

「…ラーメンお待ち。」

「え、こ、こんなに!？」

「おう。特別大サービスだ。」

「…こ、この量は…」

「何言っただ…色々マシマシにしたラーメンはこの比じゃねーぞ？」

何せ野菜で麺が見えなくなっただもん。」

「野菜で!？」

一回だけとあるラーメン屋に行ったけどあれは

エグかったな。

「いいから食え。腹が減っては戦はできんだろ？細かいことは食ってから考えろ。」

「…いい、いただきます!」

「ぐちそうさまでした。」

「お粗末様。」

結局、食いやがったよ。

「朝日。」

「？」

「いつまでも（仮）やってんなよ？お前は俺と

チュチュが認めたギタリストなんだ。

もつと自信持て…な？」

「うん…ありがとう。」

「何だかんだ言って、六花のこと心配してんだな。」

「それはないっす。」

電話の鳴る音で目を覚ます。

誰かは何となく予想はつくが。

「やっぱりか。」

モーニングコールにしちや早すぎませんかねえ…チュチュ様。仕方ないから出るけど。

「はいよー…どしたん？」

「MVが完成したわよ！今すぐに見なさい！」

「…えむぶい？ああ…MV！マジか、わかった。」

…って、もう切れてるし。

相変わらずやな。

「どれどれ…」

さっそく視聴しますか。

「あった。これだな。」

さーて、出来はどうかね？

「か…」

かつ：けええええええ!!

S w e e t s ! E x c e l l e n t ! U n s t o p p a b l e だよ!

神? 神ですか!?! 神かよコレ。

鳥肌が止まらねえ!

これは神MV認定間違いなしですわ。

さすがはチュチュ様：良い仕事するねえ。

そもそも、こんだけクセの強いメンバー達の

個性を噛み合わせてんだもんよ：冷静に考えて

凄いやな。

：各々の実力が高過ぎるってことは裏を返せば

演奏を破綻させるリスクも孕んでいるわけで：

そういったリスクヘッジも踏まえて一つの演奏として見事に昇華

させるのはもはやプロフェツショナルの域と言っている。

レイヤさん、ますきさん両名はもはや言わずもがな：安定の力強

さ。こんな人達がサポートやつてたとかウソだろ。絶対喰われるわ。

パレオはかわいさに騙されがちだが結構暴れる。キーボードを背

面弾きしてたのを見た時はマジでこの子やべえ：と思ったのは記憶

に新しい。

指鉄砲に一瞬ドキツとしたのは内緒な。

そして、朝日。

あいつ：いっちょ前にツーステなんぞ刻みおって：しかし、眼鏡と

シユシユ(?)を外しているからなのか：

雰囲気がいっつもと段違いだな。

「…いいじゃん。」

最初の演奏にしては及第点つてとこだな（何様）

いや、しかしかっけえ。

「優！朝から何騒いでるの!？」

「あ、すんません。」

どうやら声に出てたようだ…はっず。

「そうか、（仮）は取れたのか。」

まあ、順当な結果だわな。

「心配させやがって…最初からやれよな。」

「ごめん…心配してくれてたんだ…。」

「あ、いや…言葉のあやだよ…お前がしつかりせんとRASの良い演奏にも繋がらんだろ?」

「はあ…優って本当に素直じゃないよね。」

「いやいや、戸山さん…そんなわけないじゃないっすか。」

「何で敬語なの?」

「それにしても、Lockとは…御大層な名を頂戴したもんだな。あ、ポピパさんにも呼ばれてんだっけか。」

「チユチユさんには鍵のことだつて…。」

なるほど、RASの鍵になれと…そういう

メッセージが込められてるわけね。

約半年か…長かったな。

「頑張れよ…ロック。」

「う、うん！頑張る！」

交わる二つのR

「ポピブイ…だと…?」

それは戸山、宇田川、ロックの仲良し三人組が
楽しげに話しているのをチラッと聞いたのが
始まりだった。

え、ちよ…何それ?

ポピブイって…ポピパさんもMVを作ったってこと?俺、何も聞いてないんだけど?

三人娘に聞いてみれば案の定でした。

ポピパさんのMV、ポピブイなるものが作成されていたそうさ。
早速視聴した。

「俺、ハブられたんか…?」

市ヶ谷先輩…俺に声ぐらいかけてくれても…

あれ、なんだろう…画面がよく見えねえや…

おかしいな…動画の出来は物凄く良いはずなのに。

とりあえず、全部ブツ込んでみました的な動画だったのだが、うまくまとめられていた。

ウサギとかチョココロネとかちよちよこ

よくわからないものも映りこんではいたが。

だからこそ…

「俺も…俺も入れてほしかった…」

「げ、元気出して?」

「ロック…お前何最後ちやつかりセンターに

居座ってんだよ…一番おいしいポジションじゃねーか…ずっる…。」

「え、ええつと…」

「…それはそうと、御宅のプロデューサー

ついにRoseliaに宣戦布告しやがったな。」

文字通り、チュチュがRoseliaに対し宣戦布告とも取れるような内容の動画をアップしていたのだ。

内容は早い話がRASとRoseliaの直接対決。

それがdubにて行われる。

…いつの間にかそこまでこぎつけたのやら。

しかし、思ったよりも実現するのが早かったな。

チュチュも動画内で言っていたが、RASと

Roseliaの頂上バトル。正直楽しみではある。

「頑張るのはいいけど…ムチャだけはすんなよ？ロック。」

「うん。」

「宇田川、RASは一筋縄じゃないぞ？」

「うん！あこ、頑張る！」

と、コイツは敵が強ければ強いほど燃えるタイプだったか。

「優はライブに行くの？」

「そりゃ、もちろん。」

ロックの初舞台だし、見届けないわけにはいかない。

「ああ？」

日菜先輩から電話だ。

随分と珍しい…イヤな予感しかしないけど…出るか。

「もしもし？」

「あ、もしもし！優君？」

「はいはい、どうしました？」

「んーとねー、おねーちゃんがチュチュちゃんと話したいことがあるらしいんだけど、アポなしはマズイでしょって話になったんだよね！」

「…なるほど。そういうことなら、俺から

チュチュに話つげときますよ…っていうか

「一緒に一緒にしてもいいですか？」

「うん！ーいーよ！」

「それじゃあ、待ち合わせ場所決めて
またあとで合流しますか。」

「うん！ーじゃあねー！」

：あーあ、終わったなアイツ。

まあ、あんだだけ煽りまくったんだ：当然の結果か。

チュチュよ：自業自得だ。

残念ながら俺にはどうすることもできん。

「すみません：手間をかけさせてしまつて。」

「いえいえ、気にしないでください。俺もあいつには用事があつたんでちようど良かったですよ。」

俺は紗夜日菜先輩と合流し、チュチュのいるスタジオへと向かつていた。ちなみにチュチュには

連絡済である。

「いや、しかしすみませんねー：うちのプロデューサーがごちやごちやと好き勝手に：」

「いえ：あのような挑発は受け付けなければ良い話なので：それを：湊さんが：」

そう。

そこがわからないのだ。

紗夜先輩の言うとおり相手にしなければそれで

済む話なのに：ましてや、RoseliaはOver the Futureライブなるものが控えてるとい話だ。

それならば、そもそもこういったバンドリというイベントに参加すること自体、スケジュール的にもマイナスにしかならないのでは？とも思う。

が、そんなことがわからない湊さんではないだろう。

何かを意図して今回の話も受けたんだとは思うけど。

「……………」

湊さん？

紗夜先輩には何も言ってないのかな？

その意図みたいなのが伝わっていないみたいなんですけど…紗夜先輩見るからにご立腹だもの。

あの人も言わなさそうだからな…言葉足らずというか。

…とりあえず、話題を変えようか。

「あ、あ…でもあれですね…姉妹揃ってギターやってるなんて仲がよろしいというか…」

「……………」

…あれ？何か微妙な顔された？

何かダメだった？

「…星川さんはいつ頃からギターを？」

「え、あ、俺ですか？」

急に話題を振られたので驚いた。

「小学校あがるぐらいの頃からですかね…中三あたりからちよつとブルックがあっただんですけど…なんやかんや今でもやっています。」

「そう…ですか。道理であのような素晴らしい

演奏ができるはずですよ。」

ベタ褒めやんか。なんか恥ずかしい。

「いやいや、俺にはギターしか取り柄がありませんから…」

「とうちやーくー！」

いつの間にか着いたみたいだな。

何も起こらず穏便に…いくわけはないか。

「いらっしやいませー！」

パレオが出迎えてくれる。

「んー…あ、レオナちゃん！」

「レオナちゃん？知り合いますか？」

「うん！フアンの子でいつもライブに来てくれるんだ！」

へえー…パレオってパスパレのファンだったのか。

「覚えていてくださって光栄です！ですが今は

パレオと申します。」

…改名したのかな？

「Welcome！サヨ・ヒカワ！ヒナ・ヒカワ！」

出たよ、ちびっこプロデューサー。

数分後にはそのイキリ顔が涙でびしょびしょになることだろうよ。

まあ、任せとけ。何かあっても俺が納めてやつからよ。

数分後。

「あー…ポテトがうまいわ。」

「お口にあつたみたいで何よりです♪」

「んー最高。しかし、パレオがパスパレファンだったとはなー…」

「はい♪…ところでユウさん…日菜ちゃんとお知り合いだったんですね。」

「まあな。先輩後輩ってただけだけど。」

「う、羨ましいですー！」

え？数分前の啖呵切ってたお前はどこ行ったのかった？

だってねえ…怖いんだもん。

肉食動物が睨み合ってる中わざわざ入ろうとする人っている？

…いないっしょ？そういうこと。

それにしてもこのポテトうめえ。

「日菜先輩も大満足だ。」

「日菜、帰るわよ。」

「え、もうー？」

どうやら話し合いは終わったようだ。

…良い結果にはならなかったみたいだな。

「あ、ちよいとお待ちを二人とも。俺も行きます。」

「ユウ！あなたも当然来るわよね？RASとRoseliaの頂上バトル！」

「あたり前だろ。だから半端なライブはするんじゃないぞ？」

「Of Course！」

それならいい。

「星川さん、ありがとうございます。」

「いえいえ、俺何もしてませんし（事実）。」

「…絶対に負けません。」

敵愾心MAXだなあ…チュチュよ、怒らせてはいけない人を怒らせたな。

「RASは手強いですよ。」

「相手が誰であろうと…私は私の演奏をするまでです。」

あくまでも冷静に、目の前の紗夜先輩は静かに

闘志を燃やしていた。

どちらか勝つのか…まったく想像がつかねえや。

頂上バトル。その時は確実に近づいていた。

頂上バトル開戦

ついに迎えたRASとRoseliaの決戦の日。

会場入りした俺は来ているであろう

戸山やポピパさん達を探していた。

一人でライブってのも寂しいし。

早いところ皆さんと合流して：

「あ、優くん！」

…ダメみたいですね。

「やっぱり来てたんすね…曰葉先輩。」

この人がいないわけがないか。

同じパスパレの大和 麻弥さんも一緒だったようだ。

「どうもです！」

「こんばんは。」

なんやかんや学校では見かけるけど

こうして話すのは初めてだな。

「楽しみだねー！」

「紗夜先輩気合い入ってましたからねー。でもRASは強敵ですよ？
なんとたつて精鋭揃いですから。」

とはいえ、入ったばかりのロックがいる分

Roseliaにちと分があるか。

「星川さんもあのメンバーの中で演奏したんですよね？それは凄いことですよ！」

「そ、そうですか？」

「ジブン、そのライブは行けなかったので…

もの凄く後悔してるんすよ。」

麻弥さん、RASのファンっぽいな。

…てか、敬語キャラだったのね。

「キングの生演奏、楽しみます！」

キングつて…ますきさんか。

なるほど、同じドラマー同士なものな。

「あの人には何回も泣かされかけましたけどね…半端なく音数入れるし、ついていくのがやつとでしたよ。」

「ますきさんはおかずが多いですからね…」

でも、それについていけること自体が凄いことなんですよ？」

麻弥さんあんま褒めないで…褒められたことなんて滅多にないからめっちゃむず痒い。

「いや、そんなことは…でも、やっぱり同じドラマー同士通じるものとかがあつたりするんですか？」

「はい…たくさん勉強させてもらってるっていうか…ジブンの憧れっす！」

なるほど…憧れね。

良かったつすね、ますきさん。

狂犬と呼ばれたあなたを尊敬^{リスペクト}してくれる人もいたみたいですよ。

『…こんばんは。Roseliaです。』

最初はRoseliaか。果たして今日はどんな演奏を魅せてくれるのか。

始まったのは聴いたことのない曲だった。

しかし、開始数秒でわかる。

「やっぱり、すげえな。」

Roseliaしか勝たん…とか言つちまいそうだわ。

見事に仕上げて来てる。

練習漬けの毎日らしいが、疲労の影響で

パフォーマンスが落ちているといった様子も

まったくない。

マジで何者だよあの人達…。

チュチュのやつ…よくもまああんな自信満々に

吹っ掛けられたもんだな。

これを越える演奏ができるのか…お手並み拝見

させてもらおうじゃないか。

『Gt.！LOCK！』

さあ、デビュー戦だ…気合い入れるよロック。

このライブの勝敗はお前にかかっていると云っても過言ではないからな。

思えば半年ちよつと…よく諦めずに頑張ったな。

…負けるんじゃないぞ。今日のお目当ては
やっぱりRASなんだからな。

「キングー!!」

それはそうとさつきから麻弥さんのテンションがヤバイ。

演奏するのはMVの曲か。

しかし、加工されたMVとは違い、リアルな

サウンドはより感情に訴えかけてくるものがある。

こつちもキレてるな。

ロックは初ライブだしさすがに緊張しているのか少しぎこちない部分もあるが、他の皆がうまく

カバーしている。やればできんじゃないの。

言うだけのことはある。

これならRoseliaにも…

『皆…残ってくれてThanks！投票結果を発表するわ！』

ライブも終わり、いよいよ決着の時間が訪れようとしていた。

チュチュのやつ…勝つのが当たり前前って顔してんな…正直言つて
甲乙つけがたい内容だったが。

設置されたモニターに今まさに投票結果が

映されようとしていた。

さて、勝者はどっちかね？

勝者は

『YES！YES！YES！』

響いたのはチュチュの声。

勝者は…

「…RAS。」

僅差の接戦だった。

どちらが勝ってもおかしくはない内容だった…

と思う。

「RAS！RAS！RAS！RAS！RAS！」

会場はRASコール一色となった。

「ん…なんだかな…」

票を入れた身としては嬉しいはず…なのだが…

どこか喜べない自分がいた。

こんなものが…果たして勝利と呼べるものなのか？

「いやー凄かったつすね。」

「ああ…ってお前、いつの間になんだよ。」

「たった今ですよ、市ヶ谷先輩。」

日菜先輩達と別れ、なんとかポピパさん達を

見つけ出して合流することができた。

「皆さんどうも。」

戸山やポピパさん達の他、Aftergrowの皆さんも

一緒だったようだ。

「RASが勝ちましたね。」

「あんまり嬉しそうじゃねーな…RASに

票入れたんだろ？」

「ん…なんていうか複雑ですね…素直に喜べないっていうか…」

「ねえ、あのチュチュって人…何であんなにRoseliaに拘って

るの？」

美竹先輩思わぬ方向から質問が飛んで来た。

気のせいかちよつと怒ってらっしやる？

「…一言で言うのと、湊さんにプロデュースを

断られたから…ですかね。」

「プロデュースを断られたからって…

それだけでかよ？」

市ヶ谷先輩が呆れたように言う。

「残念ながらそれだけなんです…」

「なるほどね…ありがと。」

「蘭はねくなんだかんだRoseliaのことが

気になつてるんだく。」

「モカ！」

「そういうことですか。」

意外だな…美竹先輩がねえ。

「違うから。」

なるほど、この人もツンデレなのね…了解了解。

「それにしてもロックのやつ…初のライブに

してはなかなか良かったつすね。」

ブツ倒れて裏で休んでるみたいだが。

「うん！凄かった！」

香澄さんが同意してくれる。

「それもこれも、皆さんがロックの背中を押してくれたおかげです…

あいつ、ポピパさんに

憧れてバンドやりたいって言っててね…

ずっとメンバー探してたんですよ。」

「ロック、優に感謝してたよ。いつも心配して

くれてるから頑張らなきゃ…って言ってた。」

「え…」

花さんから思いもよらぬ発言が飛び出す。

「そうですか…あいつ、そんなことを…」

バカだなあ…俺なんか何もしてないだろうに。

「ポピパさんのライブも楽しみにしていますよ。」

「本当!?来てくれる?」

「勿論、可能な限り行きますよ。」

「ありがとー!いっぱいライブするね!」

元気がいいなあ、香澄さんは。

越えるべき壁の高さを実感したはずなのに

気落ちした様子が微塵もない。

あくまでも自分達の音を信じるってスタンスか。

どんな困難にも揺らがない強さ。

それがPoppin' Partyの強みなわけね。

「とにもかくにも、武道館へ行くにはどちらかを引きずり降ろさなきゃいけませんよ?」

「わ、わかってるよ!」

Rosealiaだつてこのまま終わるとは思えない。

今日の敗戦を糧に必ず復活するはずだ。

…それに引き換え、RASの方は若干不安だな。

チュチュのやつが今日の勝利に浮かれて

天狗にならなきゃいいけど…まあ、あの様子じゃ無理な話かな。

勝敗の結果とは対照的っつーか…

こりや、釘さしといたほうがいいのかもしれないな。

「ポピパさん達も、チュチュに何かされそうに

なつたら言ってく下さいね。俺が懲らしめて

やりますから。」

「え、えーと、乱暴なことはしちやダメだよ?」

りみりん先輩(だっけ?)…ブツ潰すって言われてるのにも関わらずなんて心が広いんだ。

俺ならやられる前にやるね。

先手必勝って言うじゃん？

大ガールズバンド時代を揺るがすであろう
頂上バトルはRASに軍配が上がった。

ロックもデビュー戦にしては上々の出来。

不安材料はないように思えるが…

どこかで落とし穴というものは必ずある。

その時、RASはRASでいられるのか…

俺は堪らなくそれが怖かった。

かけがえのない人達と

ライブから数日。

RASの勢いはとどまるところを知らず、ついには Roselia を抜き去り票数トップの座に踊り出た。Roselia とRASの武道館行きは揺るがないものとなりつつあった。

そうになると、気になるのはポピパさんだな。

：ちよつとそっちの方に顔出してみるか。

というわけで、やって参りました市ヶ谷先輩の家。

万実さんに案内してもらい、中へ入れてもらう。

ちよつと皆さん集まっているそうだ。

「「「おー！」」」

何だか一致団結してるみたいだな。

決起集会的なのをやっていたのだろうか。

「気合い入ってますねー。」

「うわあつ！つて、なんだ：優かよ。」

「こんばんは。アポなしですみませんね。」

ケータイの充電が切れちゃって。」

「スパイ：とかじゃねーよな？」

「そんなわけ：ポピパさんのことが気になったんで、ちよつと来てみたんですよ。」

「いいけど、邪魔はするなよ？」

「はーい。」

「まあまあ、有咲。せつかく来てくれたんだし：」

これ、ウチのパンなんだけど、良かったら食べて？」

「いいんですか？じゃあ、お言葉に甘えて：」

ドラムの沙綾先輩がこれまた美味そうなパンを出してくれた。

「沙綾ちゃん家のパン、美味しいよ♪」

マジか…りみりん先輩のお墨付きかよ。

絶対美味いだろうこんなん。

「いただきます。」

「どうかな？」

「…すんげー美味いっす。」

パン食っただけなのに感動した。

今まで食ったパンの中で一番美味いわ。

冗談抜きで。

「家がパン屋さんなんですか？」

「うん！商店街にある山吹ベーカリーってところ。」

商店街か…今度行ってみよう。

これは一度食ったら忘れられなくなるな。

「…つと、そういえば、自己紹介がまだでしたね。」

「別にいいだろ？みんな知ってるよ。」

「いやいやいや！先輩がお世話になってるんですし、是非ともご挨拶させてくださいよ。」

「なってねえ！」

一つ咳払いをして立ち上がる。

いや、緊張するなー。

「…えー、先輩の幼馴染やってます…」

星川 優といます。1月27日生まれの水瓶座。

血液型はA型。明太子大好きです。嫌いなものは納豆ですかねー

…趣味は昼寝とギターかな。

あとは…そうだ！好きな女性のタイプは…」

「あー！もういいだろ！そんなことまで聞いてねーよ！」

ちよっ…ここからだっただのに…

「納豆、私もダメなんだー…」

「わかります？香澄さん。あのネバネバがちよつとねー…」

「引越して来たんだっけ？」と沙綾先輩。

「ええ、3月の終わり頃に越してきました。」

「本当にびっくりしたけどな…お前がまたこっちに來てるなんて…それにしても、よく羽丘に入れたな。」

「こう見えて、A判定だったんですよ?」

あの時はやけくそで猛勉強してたつてもあるけどな。

「そんなわけで、先輩ともどもよろしくお願いします。」

「よろしくねー!」

「ああ、それと…香澄さんの妹さんにはだいぶ

お世話になっております。」

「明日香ちゃんに迷惑かけんなよ?」

「はい。」

「あつちちゃんと仲良くしてねー!」

「勿論です。」

「じゃーねー!有咲!」

「ああ。」

「すみませんね、お邪魔して。」

「ホントだよ。」

「また、来ます。」

「来んな。」

時間も遅くなってきたので、帰宅すること。

「有咲ちゃんと仲良しなんだね。」

帰宅途中にりみりん先輩からそんな言葉を

投げかけられる。

「そうなんですよ。もうね、昔は毎日のように

遊んでましたよ。」

「そうなんだー…昔の有咲ってどんな子だったのかな?」

香澄さんのほうからも質問が来る。

いいですね…どんどん聞いちゃってください。

「すごく大人しい子でね…人見知りっていうか…俺以外の人と遊んだことなかったんじゃないかな？あ、小さな頃の写真…良ければ今度持ってきますよ。」

「ええっ!?見たい見たい!」

「…先輩のピアノの発表会とか、色々行ったりもしましたね…けど、親父の仕事の都合で引越さなきゃならなくなっちゃいました…」

「それで、離ればなれになっちゃったんだ…」

沙綾先輩がまるで自分のことのように呟く。

「でも、また会えた…優と有咲。」

「そう…ですね。」

そう、花さんの言うとおりだ。

運命つてのも捨てたものじゃない。

「ずっと心配でした…俺がいなくなっても大丈夫かなって。」

けれど…

「けれど、ポピパさんの主催ライブでその心配は吹き飛びました。先輩のあんな楽しそうな顔…

初めて見ましたよ。ああ、かけがえのない人達と出逢えたんだなって…幼馴染としてお礼を言わせてください。」

「ううん、有咲ちゃんには私達も助けてもらってるから…」

「頑張ってくれてるもんね…有咲。」

「結構ガチでしたもんね先輩…武道館への道!

とか紙に書いたりして。」

「有咲、ずっと前から言ってたから…みんなで

武道館に行きたいって。」

花さんからこれまた意外な事実が。

「そうなんですか…ずっと前から。」

本当に…本当に変わったな。

変えられたつてのもあるけど、他でもない

市ヶ谷先輩が一步を踏み出した結果でもある。

「…改めて、お礼を言わせてください。皆さんのおかげです…先輩のこと…」

そして、俺自身…最後の一步を踏み出す

きっかけをくれたことも。

「武道館…立ってくださいね。その時は必ず

行きますから。」

「うん…頑張る!」

そう言いきる香澄さんを見て、この人達なら

なんやかんや武道館行っちゃうんじゃないかな?と思う俺であった。

何も知らない

「Roselia 完全復活！OVER THE FUTURE
LIVE

大盛況！…だとさ。」

「…それがどうしたの？」

そう不機嫌そうな顔でこちらを睨み付けるはRAISE AS
UIRENプロデューサーのチュチュ様。

大ガールズバンド時代に終止符を打たんとする

背丈と目標が釣り合っていない困ったちゃん。

「…悪かったわね、困ったちゃんで。」

…また、声に出ていたみたいだ。

「…そういえばさ、何気なくチュチュって呼んでるけど…本名は別にあるわけだろう？なんて名前なんだ？」

「…何でもいいでしょ…それで？Roseliaのことを言うために来たワケ？」

「いや、まあぶっちゃけ暇だったんで来ただけ。ロック達は何か知らんけど、温泉旅行に行ってるみたいだし？お前は断ったみたいだからいるかなーっと思って。」

「あなたもいけば良かったじゃない。」

「やだよ。人多いみたいだし、温泉イベントってことは万が一にも俺が社会的に抹殺される可能性もあるわけで…デメリットのが圧倒的にでけえ。」

Poppin' PartyにAftergrowとRoselia…あとは、ハロハピさんの大所帯だそうだ。RASからはレイヤさん、ますきさん、ロックの三人が行っているみたいだが。

この中に混ざる勇氣は正直俺にはない。

しかし、パレオもないとは珍しいこともあるもんだ。

「そんなわけで、暇だし忠告がてら来たってわけよ。お前のことだから手を抜くことは一切ないと思うけど…気をつけろよって話。」

「No Problem! Roseliaが進化しているって話でしょ？それを言うならRASだつて進化してるわよ。差は縮まるどころか広がっているの！」

「わかった…けど、根詰めすぎんなよ？」

「ブツ倒れでもしたら、それこそ本末転倒だぜ？」

「わかってる！」

わかってんのかは怪しいところだが…指摘したらしたで怒られそうなのでここは黙っておいた。

「こんなところで躓いてなんかいられない…」

「ちよつとき、焦りすぎなんじゃねーの？」

細かいことはよくわからんが、コイツのやってることは多岐に渡り、なおかつ膨大つてことだけはわかる。

「こんなんじゃ、いずれ…」

「何でそんなに最強つてのに拘るんだよ？」

「…あなたには関係ないでしょ。」

ものすごく刺々しいな…何をそんなにカリカリしてんだか。

にしても、関係ない…ね。いつ聞いても効くなあ…その言葉は。

「…お前の頑張りは認めてるよ。だからこそ

もつと周りを頼れよ…な？」

「メンバーにはそんなこと求めてないわ。ただ、私の求める音をカタチにして奏であればいいの。」

「そんなんじゃねーだろ…バンドつて。」

「何よ…Poppin, Partyみたいな温いお友達ゴツコでもして、馴れ合えとでも言うの？ジャパニーズ

お得意の友情つてヤツ？そんなモノ不要なのよ！」

おつとつと？今のは聞き捨てならねーなあ。

とはいえ、ヒートアップしてるコイツ相手に

俺までキレてちやキリがない…ここは冷静に。

「その不要なモノつてのがバンドつてのを

形成していくんじゃねーの？俺はバンド経験が

ほぼないに等しいからわかんねーけどさ…

まるでプロデューサーの手足みたいなの……そんな寂しいじゃんかよ。」

「Shut Up! 何も知らないクセに適当なこと
言わないで!」

「……………」

静寂。

1分程それが続いただろうか。

「……そうかよ。」

そうだ。その通りだな。

俺は何も知らない。

「……確かに。お前の言うとおりだ。お前のこと知ったつもりでいたけど、お前の名前も……お前が音楽をやる理由も……俺は何も知らなかったんだな。」

「……………」

チュチュはちよつとばかり冷静になったよう

黙って俺の話を聞いていた。

「……俺さ、ちよつと前までは二度とギターなんかやらないって心に決めてたんだ。」

「……どうして?」

「人を傷つけたから。手を差しのべれば救えたはずだった……助けを求めると俺は振り払っちゃったんだよ。」

ギターを見ると思い出してしま

う。その傷は呪いのように俺を蝕む。

だから、遠ざけた。

罪のない相棒を。

「どうでもよくなった。他人も自分も。一人でもいいと思ってた。でもな、現実はその許してくれなかった。何でか知らんけど、俺にお節介焼くやつとか、話しかけてくるやつがたくさんいてな……それも悪くないな……と思い始めてたんだ。」

戸山に宇田川にクラスの中……日菜先輩 e t c.

そして……

「ある時…一人のギタリストの演奏を聞いて…俺はそれに心を奪われた…純粹にすげえって思った。その時は気づかなかったけど…冷めた心が熱を帯びたんだろうな。」

「…ようやくわかった気がするわ…優があの子を

推す理由が。」

「…それから、Poppin' Partyの主催ライブに行つて…バンドっていいな…って思ったよ。絆つてのを感じた。」

「確かに…あれはちよつとだけ感動したわ。」

素直じゃねえの。

「そして…お前が現れた。」

「……………」

「何だこのチビは…それがお前への第一印象だった。ゴツコ遊びなら余所でやれよと…でも、違った。お前は本気だった。R・I・O・Tを聴いて一瞬でわかったよ。ガールズバンド時代を終わらせる…半端じゃない覚悟と実力を備えてるってな。」

大言壮語は簡単に言える。

しかし、それを実行するとなると果たして何人の人間が動き出せるのだろうか？

「…楽しかったぜ？一夜限りだったけど…」

dubでやったあのライブは…俺はお前に

出会えて良かったと思ってるよ。」

…少しばかり、喋りすぎたかな。

「…だから、気が向いたらでいい…お前のことも教えてくれよ。」

「…Sorry。少し言い過ぎたわ。」

「らしくねーな、気にすんなよ。」

「…どうして、私に話したの？言いたくないことだったはずでしょ？」
「さあ、何でかね？相手のことを知るには

まず自分のことを知ってもらうことから始めろって親父に言われたことがあるからさ…」

「…そう。」

「つーわけで、邪魔したな。あ、ジャーキー置いてくから食つといてくれな。」

ていうか、食生活…いい加減何とかしろな。

「そーいや、両親は海外にいるんだっけか？」

寂しくねーの？」

「…別に。」

「ふーん、そつか。寂しくなつたら言えよ？」

俺でよければ相手してやるから。」

そう言い残し、スタジオを出る。

外に出るとちようどよくパレオとすれ違った。

「お帰りですか？」

「ああ、暇だったんでちよつと邪魔してた。」

「実はユウさんに少しご相談したいことが…」

「相談？」

「…へえー、チュチュの誕生日か。」

「はい♪なので、ユウさんにもご協力いただきたいと思ひまして…」

「そういうことなら、はりきつちやうよ俺。」

ますきさんと一緒にケーキでも作つちやるか。」

「ありがとうございますー！」

「あ、そうだ…パレオ。」

「はい？」

「あいつ、無茶しないようにさ…支えてやってくれよ。」

「もちろんです！」

「ん、さすがはチュチュ様のキーボードメイド。」

パレオがいれば心配はいらないな。」

「お任せください♪」

「…って言ってたじやねえかよ。」

それが、どうして。

「どこにいるんだよ…パレオ。」

どうして、いなくなったんだよ。

不穏な予感

パレオが失踪した。

どうしてそうなったのかはまったくわからない。

俺のほうからもパレオに何度か電話を試してみたのだが全て繋がらなかった。

そのうえ折り返しもない…そうになるとパレオが意図的にそうしているという説が濃厚になる。

チュチュに聞いても知らないっ！と

怒られる始末。

「知らないってどういうことだよ？」

メンバーのスケジュール管理とかもプロデューサーの仕事だろうが。ましてや、パレオだぞ？

お前が知らないわけ…」

「知らないっしたら知らないの！」

ちっ…こいつ…」

こうなったら何言っても火に油注ぐだけか…

他の三人もまったく心当たりがないみたいだし…さて、どうしたものかな。

「…悪い予感が当たっちゃったな…。」

できればその悪い予感は当たってほしくはなかったのだが…

パレオ失踪から遡ること数日前。

「Poppin, Partyです！」

ただいまPoppin, Partyのライブ中。
何でも彼女達は3Weeksライブって名目で毎日
ライブをやるみたいだ。
とんだハードスケジュールだな…ブツ倒れたりしないか心配であ
る。
毎日ライブってことなので毎日行きたいところではあるが、残念な
がら現実的に無理な話だ…
なんとも勿体無い。

「えっ…dubでやるんですか？」

「う、うん…マッスーがdubでやろうって。」

そんな中、Poppin, PartyとRASがdubにてライブ
を行うという話を沙綾先輩から聞いた。

かねてより行こうと思っていた山吹ベーカーリーさんにお邪魔中
である。

dubでライブか…確かに現状最も有効な手段ではある。キャパ
が多いと入る票もおのずと多くなる。

ただ…相手が相手だ。

RASが相手となるとほとんど票が喰われてしまう可能性がある。
それゆえ、どのバンドも

RASとは対バンを避ける傾向にある。

必然的にRASのワンマンになってしまうというわけだ。

「それはまた…ハイリスクハイリターンってヤツですね。」

「…だね。」

大博打も大博打だ…そういうのはキラリじゃないけど。

そうなる…チュチュがまた無駄に煽るんだろうなあ…あれから
あいつとはなんとなく顔を合わせづらくて、会っていないけど。

「チュチュのやつがまた何か言うかもしれないが…気にしないでく
ださいね。お仕置きしてやりますんで。」

「あはは…あんまり乱暴なことはしちやダメだからね？」

それはたぶん無理な相談だなーと思いつつ、会計を済ませて店を出

た。

しかし…

「…買いすぎたな。」

あまりに美味しそうなパンばかり並んでたもんだから…まあ、いいか。

「ポピパさんとdubでやるんですってね。」

「ああ、今から楽しみで仕方ねえ！」

燃えてんなーますきさん。

俺も楽しみだけどさ。

あ、今バイト中ね。

「チュチュはまたブツ潰してやるわ！とか言ってるんでしようね…まったく。」

「気合が入ってるのはいいことだろ。」

「そうなんでしょうけど…なーんか嫌な予感がするんですよ…」

「なんだよ？嫌な予感って。」

「うまく説明はできないんですけど…なんとなく、そんな気がして…」

「気にしすぎじゃねーのか？」

「だといいんですが…」

「それより、優。お前にちよっと手伝ってほしいことがあるんだけどさ。」

「手伝ってほしいこと？」

「ああ。」

何でも近々、花さんの誕生日だそうで、プレゼントとか何だとか色々計画しているそうなの。

「そういうことなら。」

「頼んだぜ。」

誕生日の日付けを聞いて気づいたけど、もう

冬なんだな。

月日が経つのがって本当に早いもんだと
実感する。

ジャネーの法則とかがってあるけど、あれウソなんじゃないかって思
うわ。

パレオは何処へ

RASとPoppin' Partyのdubでの対バン。
票数はRASが圧倒的だった。
ただの対バンならば手放しで喜べるのになあ…
どっちも応援している身としては
やはり複雑なところではある。
こればかりは票数という括りがある以上
仕方のない話なのだが。

「んじゃ、撮りますよー。」

来る12月4日。花さんの誕生日である。
ロックはスタッフとして、俺とますきさん
レイヤさんは手伝い兼観客として
GALAXYに来ていた。花さんが自分の誕生日を
忘れているという珍事案があったものの
滞りなくライブも終わり現在に至る。

写真を撮り終わると同時にランキング更新の
知らせが来たようで、ポピパさんは上位圏内に
入ったようだ。

ライブしまくった甲斐があったみたいだな。
これなら…

「あ…」

レイヤさんが小さく呟いた。
何があったのか理由はすぐにわかった。

「RAS…順位が落ちてる…」

そう…Roseliaが一位に浮上した。
とはいえ両者にそこまで差はなく、一度の

ライブでひっくり返るような票数ではある…

…と、アイツはそうは思わないだろうな。

その証拠にレイヤさん達は即招集がかかったようだ。

名残惜しそうではあったが、そのまま三人とは

別れることに。

「まさか、Roseliaがひっくり返すなんてな…」

市ヶ谷先輩が眩くが、俺はなんとなくそうなる

気がしていた。OVER THE FUTURE LIVEの影

響は

計り知れなかったってわけだ。

…武道館への切符争いはより一層激しくなるだろうな。そうなつてくると、心配なのはやっぱり

ポピパさん。ただでさえ、ライブハウスを梯子しているつてのに…これ以上頑張ると本当に誰かがブツ倒れかねない。

市ヶ谷先輩がここが正念場だぞ…と皆さんに

発破をかけている手前、口は出せないが。

その裏で、抱いていたイヤな予感が現実になろうとしているということに俺はまだ気づいていなかった。

期末試験…それは避けられぬ運命であり、高校生にとっては最大の試練である。なくなればいい…と思う人間が大半を占めるだろう。かくいう俺もその一人だった…

そう…以前までは。

だが、今の俺は違う。

復習も体調管理（前日睡眠時間10時間）も

バッチリである。教室に入ると、私やってない…やばいわーなど

というやり取りがそこかしこで繰り広げられていた。
おいおい、仮にも進学校だろうにここは。
そりややばいんでねーの？

おっと、ここにも一人。

天下の大魔姫あこ様がヤマ勘だなんだと

おっしやっている。その言葉が出てくる時点で

不勉強がひしひしと伝わってくるな。

個性的にも国語ができないとマズイのでは？
キャラ

「150ページからの古文はおそらく出るから

やっといたほうがいいぞー…ほら、教科書開いた。」

「あ、おはよー!」

「おはよう。」

「おっす。」

「…はあ。」

おーい、一人超絶ため息ついてるけど…

お前のことだぞロック。

RAS内で何かあったに千円。

戸山曰くさつきからこんな調子なのだとか。

「…」応、聞くけど何かあったのか?」

「あ、おはよう。」

気づいてなかったんかい。

「どうせまたチュチュのやつが何かアホなこと

言い出したんだろ?」

「…う、うん。」

「ほっとけよ。あいつの癩癩は今に始まったことじゃないだろ。いざ
れおさまるって。」

「…だといいんやけど。」

話を聞くにRoseliaに抜かれた影響かチュチュの

横暴っぷりは加速度的にひどくなっていたらしい。
すべてチュチュの指示に従うこと。

そんな条件を出してきたそうさ。

当然聞き入れられるわけもなくますますきさんは

帰ってしまったらしい。

そりゃ、そうなるわ。

「つたく、何をやっとするんだか…」

そんなことやってる場合か…

外部の俺があまり口を出すことじゃないのかもしれないが…今回ばかりはちよつとな。

「…出ないな。」

チュチュに直通で電話をかけると確実にケンカになりかねないので、パレオを経由したのだが…

立て込んでるのか？様子を聞こうと思ったんだけど。

頼むぜ…今日もライブがあるんだからな。

悪い影響がモロに出ないようにしてくれよ…

しかし、そんな俺の心配は無情にも打ち砕かれることになる。

「え？」

いよいよ、ライブが始まろうという時。

即座に違和感があることに気づく。

そう…パレオがいないのだ。

どういうわけだ、こりゃ。

そんなことはお構い無しとばかりに演奏が始まる。

おいおい…何のアナウンスもなしかよ？

どうしたんだ？パレオ…お前なら例え這つてでも火の中水の中ライブに来るはずだ…

何かあったのか？

演奏のほうはというと…忸度なしに今までで一番酷いものだった。

パレオがいらないのを抜きにしてもだ。まるでバラバラだ。

「なにしてんだよ…」

バラバラなのを纏めあげるのがプロデューサーの
役目だろうが。

おかげで、続くはポピパさん達の演奏だというのに、あまり耳に入
らなかった。

「…よう。」

「…来てたのね。」

「そりやあな。」

ライブ後。一人帰ろうとするチユチユを呼び止めた。

あまり口出しするつもりはなかったが、事情が

変わった。

「…パレオはどうした？電話かけても繋がんねーんだ…折り返しもな
いし…」

「…知らない。」

「知らないってどういうことだよ？メンバーの

スケジュール管理とかもプロデューサーの仕事だろうが。まして

や、パレオだぞ？お前が知らないわけ…」

「知らないったら知らないの！」

チユチユはそう吐き捨てると有無を言わず

帰って行った。

…知らないって顔じゃなかったぜ。

あれは心当たりがある顔だ。

いいのかよ…お前はそれで。

ちゅという少女

「やっぱり出ませんか…」

「…ああ、どうしちまったんだ…パレオのやつ…」
ますきさんの電話にも出ないようだ。こうなるといよいよパレオの身に何かあったと考えるほかはない。

チュチュはさっさと帰っちまうし…

でも、あいつのあの表情は…心当たりがあるって感じがしたな。
絶対に何か知っている。

やっぱり直接問い詰めるしか方法はないか。

そもそもパレオがライブを欠席すること自体

例え天地がひっくり返ろうともあり得ない話なのだ。

チュチュ様〳〵天地がひっくり返ること

…そんなような子だからな。

だから、そんな彼女が何も告げずに姿を消す

なんてのは繰り返す言うがあり得ない話なのだ。

あるとすれば…

「…まさか。」

浮かんでしまった。

とある一つの可能性。

「ちよつと待て…」

しかし、それはとても残酷な可能性…

「…おいしい、マジか。」

そんなことがあっていいのか？

「優君？」

「ちよつくら、プロデューサーさんとお邪魔してきます。」

俺の様子を不思議に思ったのか、呼びかける

レイヤさんにそう言い残し、スタジオを飛び出す。

「くそっ…」

ふざけんなよ。

もし今考えたことが真実だとしたら…

パレオは…

パレオはもう戻ってこないかもしれない。

ふざけんなよ。

間違いであってくれ。

杞憂であってくれ。

『心配をおかけしました！パレオは大丈夫ですよ♪』
早く折り返し電話をかけてきて、そう言ってくれよ。

「…意気消沈って感じだな。」

「…ユウ。」

いや、意気消沈というよりも疲労困憊って感じか。

まあ、それはどっちでもいい…

「…パレオに何て言ったんだ？」

「…!!」

チュチュの顔が驚きで染まる。

…やっぱりか。

できれば、当たってほしくはなかった。

どうしてわかったと…チュチュの目がそう言っていた。

「…はあ。やっぱり…そうなんだな…」

そう…冷静に考えればすぐわかる話ではあるのだ。

パレオはチュチュのことを第一に考えている。

そのパレオがチュチュを裏切るような真似をするはずがない。
では、何故姿を消したのか。

…それは、チュチュから必要とされなくなったから…拒絶、もしくはそれに近い言葉を投げ掛けられたのではないか？という結論に至る。

あの二人がどのような出会ったのかはわからない。けれど、パレオの並々ならぬ忠誠心は見ていればわかる。

…そんなあいつにとってはこれ以上ない仕打ちだろう。
身を切られるような思いのはずだ。

「別に責めにきたわけじゃねえよ…俺も人のこと言えた義理じゃないいな。」

「……………」

「だがな、一つだけ言つとくぞ？」

「このままだとお前は絶対に後悔することになるぞ。」

「……………」

「パレオに…どんなことを言ったのかは知らないけどな…ふとした瞬間に…それは襲^{後悔}ってくる。どんなに忘れようとしても、そいつからは逃げられねえんだよ。」

チュチュは黙って聞いている。

「…どこ行くんだよ。」

と、思ったら階段を降りて下に行ってしまった。

初めて見る部屋だ。

こんな部屋があったのか。

飾られた数々の楽器。

これ…いくらぐらいするんだらな…というそんな

場合じゃないだろ…というような感想しか浮かばない。

「…ちゅ？」

『ちゆ 8才』

プレートにはそう描かれていた。

どうやら、それはちゆという少女への誕生日
プレゼントのようだった。

ご丁寧に年齢ごとに分けられており、両親から
惜しみ無い愛情を注がれているということが
伺い知れた。

「…ちゆっていつのか。」

今さらながら初めて知った。

こいつの本当の名前。

「…毎年こんな誕生日プレゼントくれるなんて…」

良い親御さん達じゃなか。

「…何も判ってない。」

…だ、そうだ。

「惜しみ無い愛情を注がれているだろうに…何が
不服なのだろうか。反抗期？」

「…確かに、Mum^母もdad^父も私のことを褒めてくれるわ…例えば私が
どんなに酷い演奏をしたとしても…」

…そうか。

チュチュには才能がなかったんだ。

そっち方面の才能と呼ぶべきだろうか。

こいつのことだ。

たくさん努力はしたのだろう。

けれど、満足の行く結果は得られなかった。
にも関わらず両親はそんな自分を褒める。

それは、どれほど惨めなことだろうか？

俺には想像もつかない。

そんな及ばない想像のなか、チュチュ…
いや、ちゆは生きてきたのか。

…少しはわかった気がする。
こいつの根源^{ルーツ}ってのが。

「お前は両親のために音楽やってんのかよ？」

「…何が、言いたいなのよ？」

「…お前を見ているようで見ていない両親よりも…お前を本当に見てくれる人間を蔑ろにすんのかって言ってるんだよ。」

「…!!」

「パレオは今も苦しんでる…きつとな。」

「…パレオ。」

「そんなあいつの苦しみをどうにかできんのは…他でもない…お前の言葉だけなんだよ。」

瞳が揺らいでいる。

…苦しんでいるのはこいつも同じだ。

「…千葉の鴨川だってな…パレオの住んでるとこ。」

こうなったら…最後の手段を取るか。

「…俺は一人でもパレオを探すぜ。このまま
はいそうですか…なんて納得できるかよ。」

引きずってでもこの場に連れてきてやる。

パレオ…待っとけよ。

パレオと令王那

いても立つてもいられずパレオが
住んでいる（であろう）鴨川まで来たはいいが…

正直、無計画にも程があつたと若干後悔している。あと反省も
少々。

引きずつてでも…とは言ったものの、女子中学生に対してそんなこ
とをしようものなら一発レッドカード。退場。俺が制帽を被った青
い制服の人達に連れて行かれる未来しか見えない。

ぶっちやけて言うよ…

「…詰んだ。」

せめて、チユチユに何か情報でも聞いてくるんだつた。いや、そも
そもあいつが何か知ってるのかも怪しいところだけど…

しかし…本当に何も知らないでやんのな…

パレオのこと。手がかりはほぼナシのこの状況。

聞き込みでもするか…？

レオナちゃんって名前の女の子知ってますかって？却下だな…完
璧不審者だもん。

「さて、どーしたもんか…」

困った。

非常に困った。

啖呵切つて出てきたはいいものの、収穫ナシで帰るだなんて…カッ
コ悪すぎるにもほどがある…

相変わらずのノープラン男だな…俺ってやつは。

と、思っていたらますきさんから電話がかかってきた。タイミング
が神すぎる。

不本意だが、四の五の言つてられる状況でもない…この人に泣きつ
こう。

「もしもし？」

「優！お前今どこにいるんだよ？」

「俺ですか？聞いて驚かないでくださいよ？」

「…もしかして鴨川にいんのか？」

秒でバレた。

私はどこにいるでしょうかなんて茶目っ気出してる場合でもないけど。

「はい。」

「…そっか、考えることは一緒だな。」

「えっ?」

一緒って…まさか。

「…そっちも鴨川にいるんですか？」

「…ああ、ロックも一緒だ。」

マジかい…何でこう…行動力の塊が多いかね。

しかし、そのおかげで一つ手間が省けた。

「それじゃあ、一旦合流しませんか? 情けない話

俺一人じゃどうしようもなくなっ…」

「わかった。」

いや、助かった…ホント良いタイミングで電話かけてきてくれたよ。

そして無事、二人と合流に成功。

「つたく、何も考えずに出てきたのかよ?」

「…面目ない。」

そっちもどうせ似たようなものでしょうに…とは言えない。めちゃくちゃ言いたいけど。

「けど、どうします?」

「そりゃあ、聞いて回るしかないだろ。」

「ですよー。」

中学校に行くのが手っ取り早いということになり
最寄りの中学校へと向かう。

到着した俺達は早速聞き込みを開始した。

手始めに、女子生徒三人組がいたのでその子達に聞き込みをするこ
とにした。

「パレオってやつ知らねーか？」

「ちよっ…」

ますきさん？そこから突っ込まなきやいけませんか？

「…それで通じるわけないっしょ。」

「ああ？じゃあ何て言えばいいんだよ？」

ロツクが突っ込まないのを見ると、どうやらこの二人も無計画の極
みだったようだ。人のこと言えないじゃないかよ。

「レオナって名前の女の子を探してるんだけど…そんな名前の子いた
りしないかな？」

「レオナ？…鳩原にゆうばらさんかな？」

「にゆうばらさん？」

どうやら心当たりがあるみたいだ。

「はい、同じクラスに鳩原にゆうばら 令王那れおなさんっていう女子生徒がいるん
です。」

「…その子って、ピアノをやったりとかする？」

「はい！すごく伴奏が上手なんです！」

「ねー！」

これはほぼ確定かな？

いきなりビンゴとは運がいい。

一応ますきさんが写真を見せて確認をとる。

「え!?かわいいー！」

「でしょ？そうなんだよ…もう、かわいさの権化っていうのかね…か
わいさが留まるところを知らないっていうか…」

どうやらこの鳩原 令王那さんはパレオ本人に間違いはないみた
いだ。

「…あの、鳩原さんとはどういった？」

尤もな質問だ。

どう答えたらしいものか…

「…んー、音楽仲間…かな？」

「これしかないよな。」

「…だな。」

「はいー！」

ますきさんとロックも肯定してくれる。

「鳩原さん…なんだか具合が悪いみたいだったから…連絡も取れないから心配になっちゃってさ…でも、俺ら誰も鳩原さんの住んでるところとか知らなくて…良かったらでいいんだ…知ってたら教えてくれないかな？」

彼女にとつては迷惑かもしれない。

他でもないパレオが選択したことだ。

俺らがどうこう言ったところで簡単に揺らぐことはないだろう。

鳩原 令王那をパレオにしたのはチュチュだ。

殻に閉じ籠ってしまった令王那を再びパレオにすることができるのは…チュチュだけなんだ。

「お前、何でパレオの名前知ってたんだよ？」

教えてもらったパレオの家に向かう途中、ますきさんがそんなことを聞いてくる。

「まあ、仲良しっすから…俺ら。」

「何だそりゃ。」

「…どうしたよ、ロック。」

「…私、パレオさんのこと何も知らなかったんやなって…」

「…俺もだよ。」

知らないならばこれから知っていけばいい。

でも、そんな機会も失われてしまうかもしれない。

…そんなの寂しすぎるだろ。

チュチュ…お前は本当にそれでいいのかよ？

パレオはもう戻ってこないかもしれないんだぞ？

今ならまだ間に合うかもしれないんだ。

お前には…あんな思いはしてほしくない。
もう、御免だ…せつかくできた繋がりを失うのは。

「ん。」

メッセージ？

…レイヤさんからだ。

今どこにいるのかという所在を問う内容だった。

「…二人とも先に行つててもらえますか？」

「どうしたんだよ？」

「ちよつと野暮用が…すぐに追いつきますから。」

「わかった…すぐに来いよ。」

どうやら、彼女も鴨川に来たようだ。

プロデューサーを伴つて。

「そうか…来たのか。」

それじゃああとは、任せよう。

アイツに託そう。

RASの運命を。

きつといつか

「チュチュ様あー！」

木霊するのはパレオの絶叫。

終わってみればなんのことはない。

結局はパレオはパレオ。

チュチュ様からは離れられないってことだな。

何はともあれ一件落着である。

本当に良かった。

「なんて言うとも思ってたか！このバカちんが！」

「い、いたた！痛いですうー！」

痛いですうー！じゃねえ！

俺の気持ちも知らんでこの子はもう…

今回はね、わりと怒ってるよ？

心配させやがって。

罰として頭グリグリの刑に処してやるわ。

本人は若干涙目になっているがそんなのは

お構い無しだ。

「…つたく、心配したんだぞ。」

「す、すみません…」

本当だよ。

あー…胃が痛かった。

「ふふ…そのへんにしてあげて？」

「…わかりました。」

…レイヤさんに言われちゃしようがない。

このあたりで勘弁してあげるか。

しぶしぶパレオの頭から手を離す。

「…そんなじゃ、パレオも無事に戻ってきたことですし…帰るとしますか。」

「…ごめんなさい。」

チュチュは あたらしく 謝るを おぼえた！

これはびつくり。

帰りの電車内にてチュチュは自らの思いを

吐露した。

皆の気持ちにRASから離れていってしまうのではないかという
焦燥…恐怖。それが表面化してしまったとのこと。

まったく…いらぬ心配を。

そんなわけのないのにな。

「ごつちこそ、不安にさせてごめんね…」

こういう時にも謝れるレイヤさんは大人である。

「…ありがとう。」

「え、俺?」

本当にどうしたチュチュ?

明日の天気やばくねーかこれ。

一体何が降るんだ?

「あなたの言うとおり…あのままだと後悔する

ところだった…」

「…謝って良かったろ?ま、終わりよければ何とやらってやつだな。」

「…ユウにもそういう経験があったの?」

「…ああ。俺の場合は謝ることもできなかつたけどな。何も告げずに俺の前からいなくなっちゃった…」

「…そう。ごめんなさい、聞いちゃいけなかつたわね…」

「別にいいよ…謝るなって…らしくねーな。」

しみりするところじゃないだろ?お前はこれからのことを考え

てりやいーの。」

過去は過去。

後悔すれば戻れるのならいくらでもしてやるんだがな。

「これからも喧嘩したりすることもあるかもしれないけど…その度に乗り越えて…強いバンドになっていこうね。」

「はい♪」

「レイヤ…」

うん、やっぱりこの人は言うことが違うね。言葉の重みが違う。

チュチュのスタジオに到着。

時間も遅いが、とある目的のためにこのまま解散というわけにはいかないのだ。

しばらくしてバイク移動組のますきさん、ロックが戻ってきた。

みんな、揃ったな。

「チュチュ様…誕生日おめでとーございます♪」

パレオを皮切りに各々が祝辞の言葉を述べる。

「……」

当の本人は何のことかわかっていない様子。

「今日は誕生日だろ？みんな、お前のために考えてくれたんだぞ？」

「…あー」

忘れてたなこりゃ。

「さ、主役を特等席へとお連れしましょうか。」

「ちよ、ちよっとー」

皆それぞれ配置へとつく。

パレオがこの日のために作った曲。

『Beautiful Birthday』

…危うくお蔵入りになるところだったけど。

曲はパレオのキーボードから始まる。

うん…やっぱりこれがないとダメだな。

力強いメンバーの多いRASの中でも異彩を放つ綺麗な旋律を奏でるキーボードイスト。

それでいて、他に一切遅れを取らないという…

曲のほうもパレオ作ということもあり、普段とはまた違った感じだ。

でも…こういうのもアリだな。

また、違ったRASの一面が見れた気がした。

「…ずるいわよ…こんなの…」

曲が終わり、程なくしてチュチュがぐずり出した。

そう言っつて、泣きそうなんでしょ？

わかってんよ。

とどめさしてやるか。

まだ、お祝いの言葉言っつてなかったし。

「12歳の誕生日おめでどう…チュチュ。」

「…14歳よ。」

あれ？

「んじゃ、このノリで深夜の○鉄大会とでも

いきますか？」

「何言っつてんだ？帰るに決まっつてんだろ。」

一番乗っつきそうなますきさんに却下された。

一回やっつてみたかったんだけどな…ていうかそもそもゲーム機がないか…このスタジオ。

まあ、時間も遅いしね。

しかたないね。

「しっかし、パレオは大変だな。こっからまた

鴨川か。」

パレオ曰く、慣れてますからとのこと。

慣れるもんなのか？

夜道に女の子一人は危険なので、せめて駅まで送ることにした。

「すみません、わざわざ。」

「いいんだよ。もつと頼ってくれても構わないんだってのに…一人で抱え込まれるほうが

イヤなことだつてあるんだぜ？」

「…本当にご心配おかけしました。」

「これからは何かあったら言うんだぞ？

力になれるかもしれないからさ。」

「はい♪」

「しかし、そっちのパレオもいいな。オフモードっていうの？やっぱり、可愛い子はどんな格好しても可愛いもんなんだな。」

黒髪にメガネに制服。

たぶん、パツと見だとパレオだとわからんわ。

「そんな…恥ずかしいですよ…」

ちよつと赤くなつてるし。

もう全部が可愛いな。

「…鳩原 令王那っていうんだな。」

「…はい。」

「いい名前じゃん。なんかカッコ良くね？」

令王那つて響きがさ。」

「か、カッコ良い…ですか？そ、そんなこと言われたの…初めてです。」

「俺なんかさ、女の子みたい…つてよくからかわれてたよ。」

全員に制裁加えたけど。

「チュチュは…ちゆっていうんだな。」

俺、今の今まで二人の名前も知らなかったんだなーって。」

「……………」

急にパレオが押し黙ってしまおう。

「…私もです。」

「ん？」

「…言われた方も勿論辛いとは思いますが…ですが、言ってしまった方も同じくらいに辛いと思うんです。」

…ああ、そのことか。

「…言葉ってさ、恐ろしいものだよな。」

たった一つで何かを壊したりもするんだからさ。」

「…そうですね。ですが、救われたりもするんです…パレオは…チュチュ様のお言葉に救われました。」

「…そっか。」

「…その人とは、親しくされていたんですか？」

「うーん…まあ、そうかな？付き合いは短かったけど。ろくに友達もいなかったし…大切な繋がりではあったかな…けど、俺が壊しちまった。」

「……………」

っと、気を使わせちまったかな？

「ユウさんは…パレオのことを本気で叱ってくれました…本気で心配してくれていました。そんな人が他人の気持ちもわからないなんて…パレオは思いません。」

「そう、かな。」

「その人も…きつとそのことはわかっていると思います…ユウさんは優しい方ですから…少なくとも、パレオはそう思います。」

「は…何だ、励ますつもりが励まされてやんのな。」

「す、すみません…差し出がましかったでしょうか。」

「いや、ありがとな。」

救われたよ。

「きっといつか会えますよ。」

「そうかな?」

「はい…きっといつか届くと思います…ユウさんのお言葉が…お気持ち
ちが。」

「…だといいな。」

「はい♪」

もしも、その時がきたならば…謝ろう。

そう…俺は夜空に誓いを立てた。

俺ができること

【朗報】Poppin, Party・RAS・Roselia

武道館でライブすることが決定

朗報も朗報。

すべてはタイトルの通りである。

武道館への切符を手にしたのはこの三バンド。

投票の結果、一位通過はRoselia。

二位が同票数でPoppin, PartyとRAS。

どうせなら二バンドどっちもあげちゃおうぜ的な

感じで武道館行きが決まったらしい。

運営の人達に拍手。

マジでよくやった。

本来なら一位・二位のところ三バンドって…

同じ票数ってどんな確率だよ…

奇跡としかいいようがない。

いや、奇跡なんかじゃないな。

紛れもない実力で勝ち取ったモノか。

「今の気分は？」

ロックへ質問する。

「最高やー！」

だ、そうです。

「どうよ？」

続いて聖墮天使（どっちだ）あこ姫へ聞いてみる。

「ふっふっふ…よくぞ聞いて」

「はいはい、とつても嬉しいと。」

もつとこう、変化球で来いよな。

直球ストレートばかり投げやがって。

「戸山はボランティアスタッフだっけ？」

「うん。」

いつの間にやら加入していたらしい。

そんなのあるなら俺も入りたいんだけど。
なににせよ良い子や…この子は。

そんなのはそうそうできることじゃない。

「…そういうのって、心の中に閉まっておくものじゃない？すごく恥ずかしいんだけど…」

心の声が駄々もれだったみたい。

ちよいちよいあるな、こういうこと。

「何だよみんなして…俺も何か力になれんかね…」

応援してくれるだけでもあこは嬉しいよ！

とは宇田川。

ポピパさんと武道館だなんて…と、もはや

別世界にいるロツク。

第一印象が厨二病娘と鈍くさい地味眼鏡。

そんな二人が武道館とは今となっては

とてもじゃないが信じられん。

「世の中って何があるかわからないよな。」

「ホントだね。」

「頑張ってほしいよな…二人とも。」

「…うん。」

ふと、戸山がこちらを見ていることに気づいた。

「どうした？」

そんなに見つめられると恥ずかしいんだが。

「…優って変わったよね。」

「俺が？」

変わった？

「うん…最初は何事にも無関心…って感じだったけど。」
実際そうだったからな。

話しかけんなオーラ出してたつもりだし。

「何も期待なんかしてなかったからな…高校生活なんて…つまらないものだと思ってたし。」

けど、現実とは違った。

つまらないなら面白くすればいい…

そういうパワーに溢れた人達がたくさんいて…

いつの間にかそんな人達のペースに

飲み込まれて…

案外悪くはないかもしれないって思い始めて…

「変わったって言うより、変えられたってほうが正しいかな。」

どうしてみんなそんなに一生懸命になれるのか

最初は不思議で仕方がなかった。

でも、今ならちよつとはわかる気がする。

「入学式の時にさ、日菜先輩が言ってた

るん♪ってしよーってのはこういうことなのかもな。」

「そうかもね。」

「…ありがとな。」

「…このタイミングでお礼？」

「最初に話しかけてくれたろ。ちよつと嬉しかったんだぜ？女子ばかりで不安だったしさ。」

本当に。

俺にはもったいなさすぎるくらい幸せな日々だ。

「優は？」

「んー？」

「バンド、組めばいいじゃん。」

「その発想はなかった。」

とは言うものの、たぶんそれはないと思う。

「ライブとかやれば、あこも六花も

お姉ちゃん達もみんな観に行くと思うよ？」

「その発想もなかった。」

それならワンチャンありか？

…が、それはありえたとしても

まだまだ先のこと。

それよりも今は…ほんのちよつとだけ先のことに

目を向けよう。

：俺ができることは。

眼に焼き付けて、心に刻みつけて、精一杯応援すること。

ガールズバンドの人達を。

彼女達のライブがより良いライブとなるように。

始まりは

放課後にパレオ失踪騒動の謝罪をするべく
ポピパさん達の通う花咲川女子学園に来ていた。
怪しい者だとは思われない…はず。

合同で文化祭もやったし俺の顔ぐらいは皆さん
知ってる…よな？長時間待つのはずがに
キツイけど。

「とはいえ、さすがに帰ってるかな…」

時間も結構経っているし、今日のところは諦めて帰ろうか…

「ゆーくーんー!」

と、そんなことを思った矢先に後ろから俺の
名前を呼ぶ声が聞こえた。

この声は…香澄さんかな？

そう思い振り返るってみると予想通り香澄さんが
俺のほうへ向かって…というかもう目の前まで
きてるんだが…

…ちよつと待て!?

「つとおー!」

ギリギリセーフ!セーフ!?

抱きつこうとしてきた(?) 香澄さんから間髪
逃れることができた。

…この人マジでか!?

今、俺に何しようとした!?

…とにもかくにもだ。

危うく越えてはならない一線を越えるところ
だったのは確かだ。

…いや、本当に危なかった。

^{明日香}
妹よ…お前の姉ちゃんは一体どうなっているんだ…俺にハグかまそ
うとしてきたぞ?

「か、香澄さん…」

「ん？」

「…相手は選んでください。」

「えー？」

えー？じゃなくて。

何でちよつと残念そうなんだよ。

「それよりどうしたの？」

「ああ…えつと…」

それよりで済ませちゃいけない気もするけど…

なんだったつけ…衝撃的すぎて当初の目的を忘れてしまった。

ていうか、今さらながらすげー髪型してんのな

この人は…猫耳ヘアーとでも言ったらしいのか。

「そうだ、ほら、RASのゴタゴタで色々のご心配をおかけしたじゃないですか？その謝罪をと

思いまして…」

「全然いいのにー！でも良かったね！」

「まったくですよ…それで、他の皆さんはもう

帰っちゃいました？」

できれば皆さんにも謝りたかったのだが

塾にバイトに家の手伝いに生徒会と忙しいらしい。

「私だけ暇になっちゃって…」

「なるほど…それじゃあ仕方ないですね。」

それはまたの機会にしましょう。

「とうか、生徒会って…ちゃんとやれてるんですかね？あの人市ヶ谷先輩は。」

「有咲？頑張ってるよ！」

お前にだけは言われたくねーよ！とか言われそうだけど…それを聞いて安心した。

香澄さんが連れ出してくれなかったら今頃どうなっていたことや
ら…そう考えると本当に感謝しかない。

「そういえば…」

「ん？」

「先輩ってどうやって市ヶ谷先輩と知り合ったんですか？前にチラッと本人から話は聞いたんですけど…」

大体、香澄のやつが——しか言っていなかったから要領を得なかった記憶しかない。ちなみに百回は軽く言ってたな…間違いない。どんだけやねん。

「んーとねー…星のシールを見つけたから…」

かな？」

「星のシール…ですか。」

「うん！色んなところに貼ってあって…それを

追いかけていったら有咲の家の蔵に続いてたんだ！」

「たぶん、犯人はあの人本人ですね。」

そういうことか。

大体わかった。

「あの人が通ってたピアノ教室じゃ、ピアノが上手に弾けましたねってことで星のシールを貰えることになってたんですよ。」

「そうなんだー！」

それをその辺に悪戯で貼っていたんだな。

まったく…何をやってんだか。

なんにせよそのおかげで…

「お二人は運命の出会いを果たしたと…」

「…泥棒に間違われちゃったけどね。」

ファーストコンタクト最悪だった。

何はともあれ、星のシールが香澄さんを導いたんだな。

それがPoppin' Partyという一つのバンドが生まれるきっかけになったわけで…

それはもう…

「…奇跡ですね。」

「ん？」

「あ、いえ…それで、ギターに出会ったんですね。」

「うん！それで有咲とライブハウスに行ってるね！」

いや、行動早いな。

いきなりライブハウスで。

弾こうとしたのか？

ギター初心者だったんだよな？

無謀にも程がある…チュートリアル終わってないのにボス戦行くようなもんだぞ？

そうして、そこでグリグリというバンドの演奏を聴いてキラキラドキドキ？したそうだな。

「キラキラドキドキ…ですか。」

「うん！」

なんとなくわかった気がした俺は確実にあ日菜先輩の御方の影響を受けているな…うん。

しかし、小気味の良いフレーズだな。

なんだか気に入った。

「…香澄さん。」

「ん？」

「今度の武道館で俺にもさせてくださいよ…」

その、キラキラドキドキってやつを。」

パアツと効果音が付きそうなくらい香澄さんの顔が明るくなる。

「もちろんだよー！ゆーくんをキラキラドキドキさせてあげるね！」

「ちよっ…!?!」

…完全に油断してた。

「先輩…離してくださいってばーやばいってー！」

…当たってるし…何がとは言わないが。

引き剥がそうにも女性を手荒に扱う真似はできない。

…早い話が詰んだ。

誰か助けてくれ。

「じゃーねー！ゆーくん！」

「は、はい。」

…ようやく解放された。

なんだろう…すげー疲れた。色んな意味で。

ちなみにこの日、俺の中に香澄さんがデンジャラスな人物として追加されたのを追記しておく。

誓いと出会い

「おれがずっと守ってやるよ。」

そうだ。

俺はあの時、子供ながらに気恥ずかしい

誓いを立てたんだ。

「…ホント?」

「ああ!約束だ!やぶつたら針千本でもなんでも飲んでやる!」

「…うん!」

「ずっと一緒だ。おれがありさを守ってやるよ。」

…結局その誓いは破られることになるわけ

だけど。なにはともあれ、それが俺達二人の

出会いだった。

「うっわ…恥ずかしい。」

「は?いきなり何だよ?」

隣を歩く幼馴染市ヶ谷有咲が怪訝な顔をして俺に問いかける。言外に頭大丈

夫か? って顔をしていた。

「いや、俺らが出会った頃の過去の過去を回想してたんですけど…超絶恥ず

かしい台詞を吐いていたうえに約束まで破っちゃってるっていう余

計なことまで思い出しちやったっていうか…」

「約束?」

「覚えてませんか?」

そうだよ。

何かの間違いだよ。

俺の記憶違いか何かなんだ…きつと。

「…ああー…」

…何故顔を赤らめる？

その反応はもう間違いないやつですよ。
確定しちゃったじゃん。

それが事実なら針千本飲むの俺？

いや、守る云々は俺が言い出したことなんだけど…
吐いた唾は飲めぬが針千本は飲めと？

「…確か公園だったよな？お前と初めて会ったのは。」

「ええ、そうです。」

そう、あれはいつだったか——幼少の頃。

偶々公園を通りかかった時のことだ。

何気なく見た先には泣きじゃくる女の子の姿。

そして、それを取り囲む自らとそう歳の変わらないであろう男の子
三人組。何が行われているかは明白だった。

「おい。」

考える間もなく体は動き出していた。

正義感からとかそんな高尚なものじゃない。

ただ単純に同じ男としてそいつらが気に入らなかったただけだ。

「女の子一人によってたかってダセーまねしてん

じゃねーよ。」

「なんだよ、お前？」

三人組のリーダー格であろう奴がこちらを睨みながら言う。

「おれか？おれは……」

「……………」

「…なんだろ？」

「なんだ、こいつ！バカにしてるのか!？」

気の効いた台詞が思い浮かばなかったんだった。

なんともしまらない男である。

「その子、泣いてるだろ？やめてやれよ。」

「やだね！」

「そうか…じゃあしようがないな。」

「やるのか？こっちは三人いるんだぞ！」

確かに数的不利でこちらの勝ち目は薄い。

…正面からやればの話だが。

「…げっ！母ちゃん！」

「えっ？」

間抜けが俺から目を逸らす。

ウソだと言うのに。

「んなわけねーだろ！バーカ！」

隙だらけのリーダー格をこごぞとばかりにボコボコにしてやった。

「うわーん！」

「た、たけし君がやられた！」

「…どこぞのガキ大将かよ。」

「ひ、ひきようだぞ！」

「は？三人で女の子一人いじめてるお前らに言われたくねーよ。」

正義の味方のつもりもないし。

当時は捻くれた子供だったから、悪役の怪獣とか怪人のほうが好きだったし。

「で？手下その1、その2はどうすんの？やるの？やらないの？」

「うっ…くそー！おぼえてろよ！」

完全に去り際に三下。

「おとといきやがれ…だっけ？」

今思えば結構危なっかしいことしてたんだなあ…俺って。

「つと、そんなこと言ってる場合じゃないか。」

すすり泣く女の子のほうへと近づく。

「もう大丈夫だぞ。あいつらこらしめてやったから。」

「…あ、ありがと…」

「おれ、ゆうって言うんだけど…名前はなんていうの？」

「…ありさ。」

「ありさって言うのか。」

「…うん。」

「なあ、ありさ。今度からいつしよに遊ばないか？」

「え？」

「一人ぼっちでつまんないなーって思ってたんだよ。ダメか？」

「…ううん。」

「そっか、じゃあ決まりだな！またあいつらみたいなのが来てもさ、おれがぶつとばしてやるよ！」

「…お前が助けてくれたんだよな。」

「男の風上にも置けない連中でしたね。」

「あいつら、全員名門校に通ってるぞ。」

「…マジかよ。」

何があつたんだよ。

何でちよつと浄化されちやつてんだよ。

本当に人つてのは変わるものなんだと実感する。

「…まあ、過去の話はこのぐらいにしましょつか。」

今はそれよりも未来の話だ。

「明日なんですね…いいいよ。」

「…ああ。」

「先輩方は夢を現実にしたわけだ。」

「や、やべー…お前が急にそんなこと言うから

緊張してきただろ…」

「ふっ…みんなと同じもの目指すのいいな…って？」

「…なっ!?おまつ…何でそれを!？」

「良いこと言っちゃってまあ。」

「う、うるせー!」

「うぐっ…!」

この子いつから暴力振るうようになったん？

しかも結構いいの入ったんですけど。

「つたく、でかくなっても全然変わんねーな…

お前は。」

「先輩がちっちゃすぎるんでっ…!!」

ちよっ！何で正確に同じ場所に打ち込めるんだ!?

…まったく、小さいわりに一撃は重いのかな。

どっかの猫耳ヘッドフォンのプロデューサー然り、一体どこにそんなパワーを秘めているんだか。

レイヤさんはあんなスラーツとしてるのにな。

背丈でいえば俺とそんな変わらんもん。

「しかし、すみませんね…明日は武道館だっというのに…母ちゃんが会いたい会いたいというるさいもんですから…無理言っつて来てもらっちやいましたけど。」

「気にすんなよ。今日は練習もないし、おばさんには世話になったしな…挨拶ぐらいはしないとな

ダメだろ。」

「しなくていいと思いますけどね。」

「ただいまー。」

「おかえり…っであらまー!」

「ご、ご無沙汰してます。」

「あーちゃん!久し振り!大きくなったわねえ!」

あーうるさい。

「どうぞあがってあがって!」

「お、お邪魔します。」

「優!ちゃんと隠すものは隠したの!?!変な本とかビデオとか置いてないでしようね!?!」

「あるわけねーだろ。」

余計なお世話だっつての。

ビデオとか古いんだよ。

「はは…相変わらずだな。」

「悪化してますよ。」

幼馴染との久し振りの語らいは母親が
終始ハッスルしててうざかったが、有意義な時間だった。

「お邪魔しました。」

「泊まっていけばいいのに。」

「あほか。」

どうせ、同じ部屋で寝ろとか言うんだろうが。

見え見えなんだよ。

「明日のライブ頑張るんだよ！優、送ってってあげなさい。」

「ああ。」

「ここまででいいぞ？遠くなるだろ。」

「いやいや、家まで送りますよ。何があるかわからんですし。」

「…何かあつたら守ってくれるのか？」

「え？」

「守ってやるよって言ってくれたよな…あの時。」

その話が…こっ恥ずかしいからやめてもらいたいが。

「…あの時、すげー嬉しかったんだぜ？」

「…どうも。といっても、もう先輩には大切な人達がいるじゃないですか。」

「何言ってるんだよ…その大切な人達の中には…お前だつて入ってるんだからな。」

え、何このかわいい生き物。

やばいんだけど。

「…俺が有咲を守る。」

「お前…」

「それは今も昔も変わらないですよ。」

「はっ…途中、いなくなつたくせによ。」

「う、それは…」

「針千本でもなんでも飲んでやるって言ってたよな？」

なんてこった。

きつちり覚えてやがった。

…俺の知らない間にこの人は色んなものを得ていた。そんな幼馴染の側に自分がいられるということが…そんな幼馴染の中に自分も確かにいるということが…何よりも嬉しかった。

番外編

一周年

本日は大晦日。

もう一つ寝たら正月である。

「もう今年も終わりか…早いもんだ。」

今年は特に早かった。

もうあつという間だ。

イベントも盛りだくさんの濃い一年だった。

こんな濃い一年を過ごしたのは、生まれて初めて

かもしれない。

「大掃除も終わってるし、もうひと眠りでもするか…ん？」

と、思ったらパレオからメツセージがきた。

なにになに…

『如何お過ごしでしょうか？チュチュ様が皆様と歳末をお過ごししたいとおっしゃっているのです！もし、ご予定などなければぜひいらしてください！ご連絡お待ちしております♪』

「マジかよ…」

あいつがねえ…丸くなったもんだよな本当に。

俺としては嬉しい限りだけどさ。

…仕方ない。

寂しいだろうから行ってやろうか。

家にいたところでどうせ昼寝して、夜はテレビのバラエティか格闘技を見るだけだし。母ちゃんは紅白見てるだろうし、親父は会社が家みてーなもんだし。

「つーことで母ちゃん、悪いけど年の暮れは一人寂しく過ごしてくれ。」

「楽しんできなよー！」

やけにあっさりだな。

見守るような表情がちよつと腹立つ。

「優！男を見せるのよ！」

アホなのかな？

「じゃ、行ってくるわ。」

しかし、不思議なものだな…年々、年越しなんてどうでもよくなつてただけ…今はちよつと

楽しみだもん。

「ジャーキー…買ってってやるか。」

パレオに連絡して、ちよつとお高めのジャーキーを買ってチュチュの住むマンションへと到着した。

…今さらだけど、これって外泊じゃないよな？

…いや、話の流れ的にそうなのか？

だとしたら、やべえ。

「おい、チュチュ！俺年越したら帰るからな…と、悪い。」

どうやら、誰かと通話中だったようだ。

『ちゆのお友達？』

「Yes。」

もしかして、チュチュの母ちゃんか？

「Momよ。」

やっぱり…タイミング悪かったか。

『ちゆ…ボーイフレンドができたのね！』

「は？」

『是非ともお話したいわ！』

あれ…ひよつとして何かとんでもない勘違いされてる？

「いやあ…しかし、チュチュ…あ、いや…ちゆ様のお母様がこんなに若くてお綺麗な方だとは…」

『まあ！お上手なのね！』

「いやいや、ウチのMomとは大違いですよ。」

「誰がお母様よ…」

やかましい…こつちだつてキャラ設定が迷子になってるくらゐ承知のうえだわ。

『でも良かったわ！ちゆにボーイフレンドができて！』

ボーイフレンドつて…つまりはそういうことだよな？残念ですが、娘さんは私のストライクゾーンの対象外なのですが…

「お、おい…お前のMomなんか勘違いしてんぞ…いいのかよ？」

「はあ…相変わらずね…Mom…」

相変わらずね…じゃなくて！何でそんな悠長なんだよ。このままだと取り返しのつかないことになりそうな予感がするんですが？

「お母様、あのですね？僕とちゆさんはそのようなご関係ではなくてですね…」

『パパも呼んで四人でお食事でもどう？是非ともパパにも紹介したいわ！』

ほら見ろ。

何故かパパにも気に入られてトントン拍子に話が進むパターンだぞ…これ。

「はあ…疲れた。」

「悪いわね…。」

「あやうく、ゴールインするところだったな。」

なんとか誤解は解けた(？)けど…解けたよな？

ちゆをよろしく頼むわね！つてどちらとも取れるようなこと言つてたけど。

「Wedding Ceremonyなんてまだ早いわよ。」

「だよな…びつくりしたわ…にしても、邪魔して悪かったな。」

「別に、構わないわ。」

「ウ、ウエディング…!?!」

とか言つてたらパレオがやって来た。

「おー、パレオ。」

「い、いつからお二人は…そのような、ご、ごごご関係に…!?!」
「落ち着けよ。」

そんな事実は一切ねえ。

「みんな、まだ来てないのか？」

「はい！ですが、もうすぐいらっしやると思いますよ♪」
しかし、どつと疲れた。

来て早々こんなことになるとは思ってもみなかった。

「おう。」

「ごきげんよう、ますきお姉様。」

「……………」

「すみません！ごめんなさい！もう言いませんから！コブラツイストはやめて！」

やっぱり、下手なことは口走るものじゃない。

来年からは気をつけよう。

「…ロックが話したのか？」

「は、はい…それにしてもお姉様って…笑うなってほうが無理…あ、ウソです！ウソです！勘弁してください！」

「もう…二人とも何やってるの？」

「レイヤさん…こんには。いや、ただ挨拶しただけなんですよ？」

「お前のは悪意に満ちてるんだよ。」

「また何か言ったの？優君。」

またって…最近レイヤさんも俺に味方してくれなくなってきたる気がする。

「何やこの状況!？」

続いてロックもご到着。

何でもいいから助けて。

「パスパレ出てんじやん。」

さつきからパレオのテンションが高いと思ったら。

しかし、本当にすげーよな…テレビに出てるなんて。

そんなアイドルが身近にいるっていう状況もすごいけど。

『まんまるお山にいどろっ…』

いきなり噛んでるし…この人…確か丸山 彩さんだっけ。
一ヶ月後ぐらいにライブをやるらしく、その宣伝らしい。

「パレオはやっぱり行くのか?」

「はい!今から楽しみです♪」

『私たちのライブユツ…』

また噛んでるし…ある意味持つてるな…この人。

そういえば、文化祭の時もテンパってたっけ…

『寒い季節が続きますが、大ガールズバンド時代の熱気はおさまりそうにありませんね!』

大ガールズバンド時代…か…よく言ったもんだよな。

この一年、そのガールズバンドというものを知ったのが一番の収穫だ。確実に…俺の世界を広げて、変えてくれた。

夜になり、年越しも近づいてきた。

「ちゅちゃんお眠?寝てもいいんだぞ?」

「Shut Up!」

「…一言いいか?」

「何よ…改まって。」

「いや、なんだ…その…俺は幸せ者だなって思ってたよ。」

「そうね、ワタシ達の最強の音楽を間近で聴くことができるんだもの。」

「ああ…だから、来年も最強の音楽を奏で続けてくれよ…ってそういう話。」

「決まってるだろ!」

「はい♪」

「そうだね。」

「が、頑張らんと…!」

「ってことで…来年も、よろしくお願いします。」